ストライク・ザ・ブラッド 7
焔光の夜伯

凪沙が倒れたと知らされて、急ぎ病院へと向かった古城。そんな古城たちの前に現れたのは、先代の第四真祖アヴローラと同じ姿を持つ謎の少女だった。

真祖の眷獣を自在に操り、古城と雪菜を追い詰めていく少女。はたして彼女は本物の第四真祖なのか。そして彼女との接触によって甦る古城の記憶とは――

ついに明かされる古城の過去と、第四真祖にまつわる秘密。世界最強の吸血鬼が、常夏の人工島で繰り広げる学園アクションファンタジー、待望の第七弾！

み-3-38

ストライク・ザ・ブラッド7
焔光の夜伯
三雲岳斗
電撃文庫

9784048915557
ISBN978-4-04-891555-7
C0193 ¥530E
1920193005301
ASCII MEDIA WORKS
発行● アスキー・メディアワークス
定価: 本体 530 円
※消費税が別に加算されます

1年間で1万名様に当たる大プレゼント!
電撃文庫創刊20周年大感謝プロジェクト 春
の特賞(20ポイントで応募) 5名様
著直筆サイン入り電撃文庫1年分
(13年10月刊～14年9月刊)
の大感謝賞(5ポイントで応募) 10名様
著直筆サイン入り額装複製原画
の20周年賞(2ポイントで応募) 1,000名様
製しおり10枚セット(春夏バージョン)
のWチャンス賞(外れた方の中から抽選でプレゼント) 1,480名様
製ノート(春バージョン)
応募方法と応募券は反対側のオビ折り返しをCheck!

TVアニメ化決定!!
ついに明かされる古城の過去!
第四真祖の秘密とは!?
大人気シリーズ第七弾!
20th 大感謝プロジェクト 電撃文庫
特製グッズ大プレゼント実施中!
年間1万名に当たる! 詳しくはオビ折り返しをご覧ください。

電撃文庫 20th

コミックス第1巻を監視せよ――!!
電撃コミックス
ストライク・ザ・ブラッド 1
原作／三雲岳斗 作画／TATE キャラクターデザイン／マニャ子
月刊コミック電撃大王(毎月27日発売)にて大好評連載中!!

ストライク・ザ・ブラッド 7

STRIKE THE BLOOD

焔光の夜伯

三雲岳斗

illustration マニャ子

暁凪沙［あかつきなぎさ］
『真祖の妹』Sister of Primogenitor
天真爛漫な騒々しき賢妹
姫柊雪菜［ひめらぎゆきな］
『剣巫』Sword Shaman
獅子王機関の可憐な監視者
暁古城［あかつきこじょう］
『第四真祖』
The Fourth Primogenitor
世界最強の〝怠惰な〟吸血鬼

暁牙城［あかつきがじょう］
『死都帰り』Returnee From The Netherworld
逆運の武闘派考古学者
南宮那月［みなみやなつき］
『空隙の魔女』Witch of the Void
唯我独尊の高貴なる女教師

矢瀬基樹［やぜもとき］
『過適応者』Hyper-Adapter
陽気な級友、あるいは双貌の道化師
藍羽浅葱［あいばあさぎ］
『電子の女帝』Cyber Empress
華麗で気儘な天才電脳女子高生

ストライク・ザ・ブラッド

焔光の夜伯 7

Contents

序章 Intro 11

第一章 妖精の柩 Fairy's Coffin 17

第二章 仮面の真祖 Shadow Of Another Kaleido-Blood 95

第三章 道化師の追想 Reminiscence Of The Zany 197

終章 Outro 233

あとがき 240

デザイン／渡邊宏一（有限会社ニイナナニイゴオ）

序章
Intro

遥かな過去に、男は生まれた。

彼を生み出したのは、神々の楽園を追放され、大地に降り立った最初の人類——すなわち彼は、人の手によって創られた最初の人であった。

然れど男は、神の怒りを受けて異境の地へと追放される。

神が男に与えたものは、同胞殺しの汚名と、不死の呪い。

かくして彼は罪人となり、地上には最後の同胞と、その子孫だけが残された。

生命あふれる大地は男を呪い、彼の帰還を拒み続ける。

ゆえに彼は大地を憎んだ。永劫の闇と孤独の中、彼が異境で流した血と涙は、地上に降り注ぎ、数多の魔族を生み出した。

喪った大地の実りに代わって、彼は文明と争いを生み出した。学問と魔術を識る者と、青銅や鉄のすべての刃物を鍛える者を。

やがて地上に残された者たちは、大地の理に逆らって新たな都を造り出す。

カーボンファイバーと樹脂と金属と、魔術によって生み出された人工の都市を——

彼の者の名はカイン。原初の罪人。魔族の祖。

†

異境の地で、彼は今も微睡み続ける。

地上への帰還と、世界への復讐を果たす瞬間を夢見ながら——

揺らめく光が、虚空を覆い尽くしている。刻々と色や形を変えていく、極光に似た虹色の炎。

凍てつく白い空気。静止した時間——

静寂と孤独だけが支配する空虚な世界に、少年は一人きりで横たわっている。

歳は十二。いまだ幼い、成長途上の少年だ。

しかし己が死者であることを、彼はすでに自覚していた。

片肺と心臓、無数の骨と臓器を吹き飛ばされ、鮮血を撒き散らしてむごたらしく死んだのだ。

彼が最後に目にした光景は、爆発の閃光。猛々しく荒れ狂う巨大な獣人と、群がる生ける屍たちの群れ。

そして柩の中の少女。輝く氷の破片が羽毛のように舞い散る中で、彼女は眠り続けている。

氷河のように透きとおる青白い肌を、少年の流した血で紅く染めて——

『——何故、我を恐れぬ、少年？』

時間の流れから切り離された世界に、厳かな声が鳴り響く。
虚空に浮かび上がったのは、白い凍気をまとう巨大な影だった。
氷の翼を広げた妖鳥。あるいは人魚か。
それは陽炎のように揺らぎながら、血まみれの少年を冷たく見下ろしている。
「さあ……な……」
かすかに唇を震わせて、少年は答えた。
実際に声を出したわけではない。彼の肉体はすでに喪われているのだ。そして肉体を喪った魂もまた傷ついて、この空虚な世界へと呑みこまれようとしている。
だが、それを知りながら、少年の瞳に恐怖の色はなかった。
命の消滅に抗うかのように、彼は、巨大な妖鳥を見上げて薄く笑う。
「たぶん……まだ、やることが残ってるからかもしれないな……」
妖鳥は冷厳な超越者の双眸で、少年を睨めつけた。
彼女の意思は、この世界を支配する冷徹な理そのものだ。少年が一瞬でも恐怖に囚われ、自らの死を受け容れれば、その瞬間、圧倒的な力をもって彼の魂を引き裂いていただろう。かつてこの世界に取りこまれた、無数の生け贄たちと同様に。
しかし少年は目を逸らさない。朽ちゆく身体を無理やり起こして、無言で不屈を訴える。

『汝の生はすでに尽きた。もはや出来ることはなにもない――』
一切の感情のこもらぬ声で、妖鳥が淡々と事実を伝える。
『ここは第四真祖の〝血の記憶〟――悠久の生によって無限に堆積する時間の墓場。我らは、その血脈の中に潜み、真祖の記憶を糧として生きる者。今や汝もその一部に過ぎぬ――』
巨大な氷の翼を翻し、妖鳥がその姿を変えていく。
逆巻く炎のような虹色の髪と、焔光の瞳――美しい少女の形へと。
『死にゆく人の子よ、何故、我を恐れぬ？　何故、我の名を呼んだ？』
「うるせえよ……！」
少女の問いかけを遮って、吐き捨てるような口調で少年が叫んだ。
虚空に沈みかけていた血まみれの腕を、無理やり引き剝がして起き上がる。
「まだ終わってない！　俺はあいつを護るために来たんだ！　そのためならどんな力でも使う。それが世界を滅ぼす力だとしてもだ……！」
『真祖ならぬ只人の身で、我が悠久の〝血の記憶〟を喰らうか――？』
感嘆したような表情で、少女が笑った。妖精のような顔立ちに相応しい、無邪気な笑みだ。
喪われていたはずの少年の血が、肉が、骨が、内臓が、なにもない虚空から再生されていく。
少年を呑みこもうとしていた〝血の記憶〟を、彼は逆に喰らおうとしているのだ。吸血鬼の真祖だけが御し得る無限の〝負の生命力〟を、無力なただの人間が――

『その代償、高くつくぞ、哀れなる人の子よ――』

焔光に輝く瞳を細めて、少女が告げた。

彼女が握った手の中に、小さな氷の破片が現れる。それはたちまちのうちに成長して、一本の長大な槍の姿に変わった。二叉の穂先を持つ氷の槍だ。

「それでもいい。だから、力を貸してくれ――アヴローラ！」

血に濡れた腕を懸命に伸ばして、少年が彼女の名前を呼ぶ。

その刹那、少女の瞳をよぎったのは、泣き笑いに似た優しげな表情だった。

微笑みを浮かべて少女が囁く。

よかろう。受け取れ――

そして彼女は、無防備に手を伸ばす少年の胸に、氷槍を深々と突き立てた。

第一章 妖精の柩 Fairy's Coffin

1

その島は地中海のほぼ中央に浮かんでいた。

ゴゾというのが島の名前だ。

欧州マルタ共和国の一部であり、観光地として知られた島である。変化に富んだ海岸線が美しい景観を創り出し、灰色の岸壁と青い海のコントラストは、多くの旅行者を魅了してきた。

同時にゴゾは、遺跡の島としても知られている。

島内の各地には地下墳墓や環状列石、さらには人類最古ともいわれる新石器時代以前の巨石建造物が数多く残されている。それらがいかなる人々の手によって造られたのか、あるいは、いかなる神を祀るものなのか、今も多くの謎に包まれているのだった。

そして

そんな貴重な遺跡のひとつ。名もなき地下墳墓の発掘現場で、一人の男が頓狂な声を出す。

「くううううっ――！　美味ェ！」

長身で、それなりに体格のいい日本人だった。日焼けした肌に、不敵な顔立ち。自分で散髪しているのか、髪はナイフで無造作に切ったように不揃いで、顎には無精髭が目立つ。色褪せた革製のトレンチコートに中折れ帽を被った姿は、遺跡の調査員というよりも、時代遅れのマフィアの一員か、売れない私立探偵という雰囲気だった。

年齢は四十前後といったところか――

男が握っているのはバイトラのボトル。サボテンの実を原料にしたマルタ特産の酒である。

キャンピングチェアに深々と座って脚を投げ出し、彼は昼間から酒をかっ喰らっていたのだ。

「いいねェ、青い空、白い雲、美味い酒と喰い物。これでこそ生きてる実感が湧くよなあ」

そう言って男は、焚き火で炙ったソーセージを口に運ぶ。

マルタ特産のソーセージは粗挽きで、独特の香気が効いている。それを乱暴に喰いちぎりながら、男は再び酒瓶を傾けた。それから、彼はふと無念そうに深い溜息をついて、

「あとは隣に色っぽい姉ちゃんの一人でもいてくれれば完璧だったんだが……」

「――なにが仰りたいんですか、博士」

男を咎めるように冷たく訊き返してきたのは、二十代半ばほどの白人女性だった。

地味な探検家風サファリルックに身を包んでいても、有能さと几帳面さ、そして気品めいたものを感じさせる女だ。整った顔立ちに化粧っ気はほとんどなく、美しい髪を惜しげもなく短く切り揃えている。見るからに一流の研究者という雰囲気だ。

「あー……つまりだな、ミス・カルアナ　こんなに天気もいいことだし、彼女たちを見習って、

きみももう少しラフな服装をするべきではないか、ということだ。そのほうが発掘隊の士気も上がると思うんだがね」

苛立たしげな歩調で近づいてくる彼女に気づいて、男は、飼い主に叱られた駄犬のような表情になり、読みかけの雑誌の水着グラビアを広げてヘラヘラと笑った。

「生憎ですが、そのようなサービスは私の職務ではありません」

白人女性――第四次ゴゾ遺跡調査団統括顧問リアナ・カルアナが、男の手から乱暴に雑誌を引ったくる。博士と呼ばれた男は、やれやれと肩をすくめて首を振り、なぜか同情するような視線をリアナの胸元に向けた。

「お堅いねェ。わざわざ地中海くんだりまで来てんだから、もっと陽気に行こうぜ。ラテンのノリでさ。そんなに気に病まなくても、俺の母国には〝貧乳は希少価値〟って金言があってな。胸が小さくたって、それはそれで根強い需要が――」

「――セクハラ訴訟も手続きがいろいろ面倒ですから、これ以上は、私の仕事を増やさないでもらえるとありがたいのですけど」

両腕で胸を庇いながら、リアナが冷ややかな表情で男を睨みつける。

「博士こそ、勤勉さが売りの日本人らしく、もう少し真面目に働いてみてはいかがです？　それにラテン諸国の人々が、享楽的で怠惰な国民性というのは勝手な思いこみです。この島が古代から地中海貿易で栄えた交易、文化の要衝だったことをお忘れなく」

「忘れちゃいないよ。この島が北海帝国連邦の一員で、世界最古の〝魔族特区〟、ついでに第一真祖の自治領〝滅びの王朝〟の侵攻に対する最前線の激戦地だったって歴史もな」

瓶の底に残っていた酒を飲み干しながら、博士と呼ばれた男は苦笑した。

「だが、まあ、それこそ俺の仕事とは関係ねェ話だな。どうせ必要な人材が揃うまで、俺たちにできることはねェんだ」

「それは……たしかにそうですが……」

「のんびり行こうや。功を焦って闇雲に作業を進めても、ロクなことにならねェからさ――」

呑気な口調でそう言って、男は新たなソーセージに手を伸ばす。

彼らの背後から、内臓を揺さぶるような爆発音が聞こえてきたのは、その直後のことだった。巨大な火柱が噴き上がり、大地が揺れた。

上煙が空を灰色に覆い尽くす。

爆心地は、人がいる岩場の裏側　ちょうど地下墳墓の入り口付近だ。遺跡発掘現場で火薬が使われるのはめずらしいことではないが、爆発の規模が大きすぎる。

遺跡の一部が吹き飛んで、石塊が雹のように地面に降り注いでいた。逃げ惑う作業員たちの悲鳴とともに、銃声らしきものが聞こえてくる。明らかにまともな爆破作業の風景ではなかった。なにか想定外のトラブルが発生しているのだ。

「あー……そうそう、あんな感じでな……」

爆煙に包まれた遺跡を眺めて、男が気怠げな声を出す。リアナは彼を睨みつけて絶叫した。

「お、落ち着いてる場合ですかっ！　いったい、なにが――!?」

「あー……おーい、ミス・カルアナ……」

男が呼び止めるより早く、リアナは、岩場をよじ登って走り出していた。吹きつける爆風に逆らいながら、無謀にも爆心地のほうへと降りていく。

男は小さく舌打ちすると、愛用のライフルケースを抱えて仕方なく彼女を追いかけた。

もうもうと立ちこめる土煙の中から、絶え間ない銃声と怒号が聞こえてくる。

遺跡の発掘作業は休止中で、現場に残っていた作業員は多くない。北海帝国から派遣されてきた学術調査団が数名と、遺跡の警備を担当する民間軍事会社の戦闘要員だけだ。

銃撃戦を行っているのは、おそらくその警備員たちなのだろう。

彼らが戦っている相手は、爆煙の奥で蠢いている奇怪な影だ。まともな生物には見えないが、単なる人工物とも思えない。しかも恐ろしく巨大だった。最新鋭の大型戦車を人のように直立させたなら、あるいはこのような姿になるのかもしれない

「ガホ！　手を貸してくれ、ガホ！　博士！」

土煙の中から走り出してきたのは、恰幅のいい髭面の警備員だった。民間軍事会社社員のディマス・カルーゾ。遺跡調査団の警備担当責任者だ。身長一九〇センチを超える巨軀で機関銃と弾帯を担いだその姿は、武装した大猪を連想させる。そんな彼の全身も今は傷だらけで、

表情は焦りに歪んでいた。

「よォ、カルーゾ。なんの騒ぎだ？　第二階層には入るなって言っといたはずだぜ？」

博士と呼ばれていた日本人の男が、場違いなほど軽い口調でカルーゾに呼びかける。カルーゾは男の姿に気づいて、脱力したようにその場に膝を突いた。

「すまん、ガホ……ダータラム大学の調査団が、協定を破って勝手に調査を……！」

「やれやれ。まあ、そんなことだと思ったぜ……あと、訂正だ。俺の名前はガホじゃねえ」

投げやりな態度でそう呟くと、男は遺跡の奥へと目を向けた。

ようやく薄れ始めた爆煙の中から、〝敵〟の全貌が現れる。

それは全高四メートル余りの、奇怪な形をした神像だった。四肢を持ち、全身を鎧のような金属製の甲殻で覆った人型兵器だ。

のっぺりとした巨大な頭部はマッコウクジラに似て、奇妙な神々しさと不気味な威圧感を漂わせている。ギリシャ神話に描かれた地中海の怪物――〝ケートス〟あたりが原形になっているのかもしれない。

「博士、あれは……!?」

リアナが引き攣った表情で男に訊いた。男は、おう、と愉快そうにうなずいて、

「遺跡守護像の類だな。第二次調査団の連中が全部排除したと聞いてたんだが、あんな大物がまだ残っていたとはなァ。燃えるねェ」

「なにを呑気な……！」

他人事のように感心している彼を見て、リアナが頭を抱えた。

神像の出現地点は、遺跡の地下だ。墳墓への侵入者を撃退する自動防衛装置の一種だったらしい。迂闊に遺跡に入りこんだ調査団員たちが、それを起動させてしまったのだ。

そして神像は分厚い石灰岩の壁をぶち抜いて、無理やり地上に這い出そうとしている。

警備員たちは必死で応戦しているが、機関銃程度の攻撃では、神像の装甲には歯が立たない。恐ろしく強靭な金属で造られている上に、魔術的な強化が行われているのだろう。

逆に神像が放つ青白い閃光が、警備会社の装甲車を薙ぎ払い、次々に炎上させていく。

「くっ……！」

リアナは悔しげに唇を噛み、自分の左手首の腕輪に触れた。そして、人で神像の前へと飛び出そうとする。だが男は、そんな彼女の襟首をつかんで無理やり引き止めた。

「そう慌てなさんな、ミス・カルアナ。あの手の化け物に力押しで勝てるのは、吸血鬼の真祖くらいのもんだ。冷静にならなきゃ、被害が増えるだけだぜ」

「し、しかし――！」

リアナが表情を歪めて男を睨む。一人の傍ではカルーゾが必死で神像に応戦していた。だが、弾丸はおろか手榴弾の直撃ですら、神像の装甲には傷ひとつつけられない。

「なんとかならないのか、ガホ!?　このままでは俺たちも助からん！　全滅だぞ！」

「だからガホじゃねえっての……」

中折れ帽の庇に手を当てて、男は億劫げに息を吐く。そして立ち上がった神像を携帯カメラで撮影しながら、妙に愉しげに呟いた。

「第九メヘルガル遺跡の古代兵器に似てるな……盗掘対策の罠というよりは墓守――墓の中にいるモノを目覚めさせないための番人か。どうやら、ここは当たりだな」

「ガホ！」

冷静に観察を続ける男を睨んで、カルーゾが恨めしげな声を出す。

男は、焦る大柄な警備員に笑いかけ、

「心配するなよ、カルーゾ。やつは遺跡の番人だ。外にいる人間を襲ってくるような真似はしないさ。調査団の連中が無駄な抵抗さえしなければ――」

その言葉が終わる前に、神像が巨大な爆炎に包まれた。ロケット弾の直撃だ。野営地から駆けつけてきた民間軍事会社の増援部隊が、携帯型のロケットランチャーを使ったのだ。

対戦車用の成形炸薬弾の直撃を喰らって、しかしそれでも神像は無傷だった。

それどころか攻撃を仕掛けてきた警備員たちへと、即座に反撃を開始する。

神像が放つ青白い閃光の正体は、高出力のレーザー砲だった。それは一瞬で巨岩を熔解させ、調査団の野営地を炎に包む。反撃の対象になったのは、武装した警備員たちだけではない。遺跡調査用の機材や野営地のテント、逃げ惑う調査団員たちまで、神像は容赦なく無差別攻撃を

仕掛けていく。このままでは調査団のキャンプが全滅するのは時間の問題だ。

「おやおや……さすがにやばいか、これは」

男が落胆したように目元を覆った。ケートスを模した神像は、完全に調査団を敵として認識したらしい。もはやこの地にいる人間を全滅させるまで、動きを止めることはないだろう。

「博士――！」

「へいへい。できれば、無傷で回収して調べてみたかったが、そうも言ってられんよなあ」

急き立てるリアナの声を受け流しながら、男は担いでいたライフルバッグを降ろした。

彼がバッグから取り出したのは、全長二・八メートルにも達する狙撃銃だった。総重量は約二十キロ。ライフルというよりも、むしろ大砲という表現のほうが相応しい巨大な火器だ。

常軌を逸したその巨銃を、リアナは瞬きも忘れて呆然と眺める。

「た……対物ライフル!?」

「二〇ミリ口径だ。クソ重いのを我慢して持ってきて正解だったな」

オモチャを自慢する子どものような口調でそう言って、男はライフルを二脚の上に構えた。敵意を察したのか、神像がゆっくりと振り返る。それでも男の動きに焦りはない。滑らかな動作で弾薬を装填。慎重に狙いをつけていく。

そして神像が完全に振り返り、頭部のレーザー射出口が開放される――

その瞬間、男はトリガーを引き絞り、轟音とともに弾丸を撃ち放った。狙いは神像の装甲

の隙間、レーザーの射出口そのものだった。

いかに大口径とはいえ、ライフル弾程度で、対戦車ロケットの直撃にも耐える巨大な神像を破壊できるはずもない。対物ライフルの本領はあくまでも狙撃　弾道の正確性にある。

男が撃ち出した弾丸は、わずか数センチに満たない装甲の隙間へと吸いこまれるように侵入し、神像内部の精巧なメカニズムに致命的な破壊をもたらした。射出口が破壊されたことで、行き場を失った高出力レーザーのエネルギーが逆流し、青白い稲妻とともに爆発する。

「やった……！」

リアナが両手を握りしめて歓声を上げた。いかなる攻撃をも受けつけなかった神像に、初めてダメージを与えたのだ。

「いや、まだだ――」

しかし男は表情を変えない。傷ついた神像を興味深く眺めながら、淡々と空薬莢を排出する。

爆発直後こそ動きを止めた神像だが、すぐに活動を再開し、銃を構える男たちのほうへと、真っ直ぐに歩き出していた。レーザー砲の暴発は、神像にとっては致命的な損傷ではなかったらしい。重装甲に覆われた巨体を活かして、男を踏みつぶすつもりなのだ。しかも破壊されていたはずのレーザー砲の周囲が、生物のように蠢いて、自動修復を始めていく。

「……再生する!?」

「ま、そうだろうな。曲がりなりにも〝天部〟の遺産だ。その程度はやってもらわねェと」

予想どおりだな、と満足げに呟いて、男が笑う。動揺したのはリアナたちだった。

「ド、博士――！」

「どうするんだ、ガホ!?　あんなもの、どうやって倒せばいい!?」

弾丸を撃ち尽くしたカルーゾが、半泣きになって男に怒鳴る。逃げ出したいのが本音だろうが、警備の責任者としてはそうもいかないのだろう。せめて野営地にいる人々の避難が終わるまでは時間を稼ぐ必要があるのだ。

「心配すんな。今ので、やつの駆動術式の術紋はだいたいわかった。あの手の遺跡守護像には共通の脆弱性があってな　次の弾丸は特別製だぜ」

対照的に男の表情は明るい。この危機的状況を楽しんでいるのだ。

革ジャケットの懐に手を入れて、彼は新たな弾丸を取り出した。宝石を埋めこんだ黄金の弾頭だ。カートリッジには奇怪な紋様が描かれている。

「いくら古代超文明の産物とはいえ、何千年も動き続けるような内蔵動力源ってのはそうそうあり得ねえ。遺跡守護像ってのは、その性質上、遺跡本体から魔力を供給されてることが多いんだ。だから、その回路に過剰な魔力を流しこんでやれば――」

弾丸をライフルに装填し、男は再び銃を構えた。神像の胴体を狙って、無造作に撃ち放つ。

黄金の弾丸は、轟音とともに神像の胸部へと激突した。

もちろん対物ライフルの弾丸に、神像の装甲を貫通するほどの威力はない。弾頭は瞬時に

圧壊し、無数の破片と化して四散した。

同時に、膨大な魔力を吐き出して、巨大な魔法陣を形成する――

「呪式弾……!?」

男が使った弾丸の正体に気づいて、リアナが愕然と振り返った。

呪式弾とは、貴金属製のカートリッジに膨大な魔力を封じこめた特殊な弾丸だ。現存する弾丸は極めて少なく、それを撃ち出せる銃となると更に少ない。ごく一部の王族だけが所有する、桁外れに高価な代物である。しかしその威力は絶大だ。

「あんなものをいったいどこで!?」

「言ったろ、特別製だってな」

男は気怠く微笑みながら立ち上がる。

すでに勝敗は決していた。魔法陣に囚われた人身鯨頭の神像が、閃光を撒き散らして崩壊していく。呪式弾の放つ膨大な魔力が、神像を駆動する太古の魔術術式を暴走させ、自滅させたのだ。

「ハハッ……やった……さすがだな、ガホ……!」

武器を投げ出して立ち上がったカルーゾが、豪快に笑いながら抱きついてくる。それを乱暴に蹴り退けながら、男はうんざりと顔をしかめた。ヒスパニア出身のカルーゾは、日本人の名前を発音するのが苦手なのだ。

「だーかーらー……何度も言わせんなよ、カルーゾ。俺の名前はGAJOじゃねェ。そいつはガジョウって発音するんだよ」

銃身の焼きついたライフルを抱えて、男は面倒くさそうに立ち上がる。

そんな彼らの会話を、リアナは、歩離れた場所で聞いていた。そして誰にも気づかれないように、口の中だけでぼそりと呟く。埃まみれの男の背中に、憧憬の眼差しを向けながら――

「ガジョウ……暁牙城……」

2

暁古城がイタリア半島――自治領ローマの空港に降り立ったのは、二月も半ばを過ぎた春のことだった。地中海の島嶼国家マルタに向かうため、飛行機の乗り継ぎで立ち寄ったのだ。

同行者は一名。妹の暁凪沙だけである。同行していた母親とは、経由地の香港で別れていた。

古城は小学校を卒業した直後で、凪沙はそれよりも一歳年下。普通なら二人きりで外国をうろつくような年齢ではないのだが、暁家の場合は、少々事情が特殊だった。

多国籍企業MARに勤務する母親は、仕事の関係で一年の半分近くを海外で過ごしており、父親は三カ月前から遺跡の発掘調査のためにマルタに滞在中――

そんな感じで、やたらにグローバルな両親に挟まれた古城たちは以前に何度も海外旅行を経

験していたし、今回も父親に呼ばれて仕方なく、遠路はるばる日本から旅してきたところなのだった。

「うわあ……！」

十一歳の暁凪沙は、空港の到着ロビーに出るなり、周囲の風景を見回して歓声を上げる。

「見て、古城君。外国だよ外国！　外国人の人がいっぱいだよ！　看板も全部外国語だよ！　久々だねえ、この雰囲気！」

「まあ、外国だからな……つか、ここじゃ俺たちのほうが外国人だろ」

二人分の荷物を引きずりながら、古城は、声変わり前の声で呟いた。

長いこと飛行機の機内に閉じこめられていた反動か、凪沙は妙にテンションが高い。腰まで届く長い黒髪のせいで、それでなくても彼女は目立つのだ。周囲の人々にやたら見られている気がして、古城はわけもなく恥ずかしい気分になる。

「どうしたの、古城君？　元気ないね？　あ、屋台発見！　美味しそう！　ビスコッティ！　ビスコッティください！　四個！　クワットロ！」

両替したばかりの小銭を握りしめ、構内の売店へと駆け寄っていく凪沙。ふたつで十分だよ、と助言する店員に四個と言い張り、さらには片言のイタリア語で値引き交渉を始める。

「……馴染んでやがる」

買い物を終えた凪沙は、古城が一瞬目を離した隙に、ほかの旅行者に頼まれて一緒に写真に写っていた。見事なまでの順応ぶりである。

「おまえ元気だなー」

ようやく戻ってきた妹を眺めて、古城はたまらず嘆息する。

凪沙は、そんな古城の顔を、首を傾げてのぞきこみ、

「古城君こそ元気ないね。せっかくの海外旅行なのに、楽しまないともったいないよ。ビスコッティ食べる？　半分上げようか？」

「いや、いい。てか、おまえ、あんだけ機内食を喰っといて、まだ食べるのか」

古城はあくび混じりにそう言った。日本とローマの時差は八時間。時差ボケの影響で身体がだるい。ここからさらにマルタまで、一時間半ほどのフライトが待っている。

親父のやつ、安い航空券送って来やがって。乗り継ぎ多すぎんだよ。だいたい海外旅行っていっても、あいつの仕事の手伝いじゃねーかよ」

「……そうだよね。ごめんね、古城君。つき合わせちゃって」

凪沙が少し声のトーンを落とす。父親に会うための今回の旅行だが、正確にいえば呼ばれたのは凪沙だけ。古城は彼女の付き添いだった。

「おまえが謝ることはねーよ。で、これからどうすればいいんだ？」

「えっとね、牙城君のお友達が迎えに来てくれるって。航空会社のカウンターの近くで待っててくれてるはずなんだけど……そうそう、地図をもらってたんだ」

そう言って凪沙は、コートのポケットを漁り始める。古城が荷物を抱いたまま、ぼんやりとそれを眺めていると、いきなり誰かが乱暴に肩をぶつけてきた。

「Scusi――」

小柄な外国人の男性が、困ったような顔で話しかけてくる。どういう意味かはわからないが、ぶつかってしまったことを謝っているらしい。年齢は二十歳前後。やけに地味で目立たない服装の男だ。

「あ、すんません……えと……ミディスピアーチェ……？」

古城もうろ覚えのイタリア語で返事をする。と、男は満足したように歯を見せて笑った。

「Huh... Di niente. Buon viaggio, stronzo――」

「あー、どもども。グラッツェ、グラッツェ」

にこやかに手を振って男を見送る古城。そのとき凪沙がハッと顔を上げて男を指さした。

「古城君、荷物――！」

「え……？」

凪沙が騒ぎ始めたことに気づいて、男が突然走り出す。彼が小脇に抱えていたのは、古城が預かっていた凪沙のバッグだった。中身は航空券とパスポート、現金カードその他の貴重品。

さっき肩がぶつかった一瞬に、ひったくられてしまっていたのだ。

「あの野郎っ――！」

その瞬間、古城の意識が沸騰したように白く染まった。気づいたときには身体が動いて、全力で走り出していた。子ども離れした猛烈な加速で、ひったくり犯を追いかける。

しかし必死で走っているのは相手も同じだ。徐々に差は詰まっていくものの、そう容易くは追いつけない。このまま空港の外に出られてしまったら、土地勘のない古城が彼を捕まえるのはほぼ不可能だろう。

間に合わないか――と、古城が絶望しかけたそのとき、一人の旅行客がひったくり犯の前に静かに歩み出た。古城や凪沙よりも、さらに小柄な東洋人の少女だった。フリルまみれの豪華なドレスをまとったその姿は、美しい人形を連想させる。

「――Per Dio!?」

ひったくり犯は少女をよけるよりも、突き飛ばすことを選択したらしい。速度を落とさずに真っ直ぐに彼女に突っこんでいく。少女が手にしていた日傘を軽く一閃したのは、その直後だ。

少女の行動に驚いたのか、まるで見えない階段を踏み外したように、ひったくり犯の脚が不意にもつれた。そのまま勢いよく転倒する　それでもすぐに立ち上がって逃げ出そうとするが、その前に古城は彼に追いついていた。

「――凪沙の荷物、返してもらうぜ」

ひったくり犯の逃げ道を塞いで、古城が言う。

「Figlio di puttana...!」

苛立たしげに舌打ちして、ひったくり犯はナイフを抜いた。古城を威嚇するように、これ見よがしに振り回す。古城は身体を低くして、無言で男を睨みつけた。小学生時代に熱中していたミニバスのディフェンスを思い出す。

もちろん古城に武器はなく、体格でも負けている。しかし不思議と恐怖はなかった。冷静になって観察すれば、男の動きは隙だらけだ。古城の下手なフェイントに面白いほど引っかかる。男が業を煮やしたように、古城に向かって足を踏み出した。その瞬間、古城は男の懐へと潜りこみ、バスケのスティールの要領で、ひったくられた荷物を取り戻す。

「悪いな、オッサン。たしかにもらったぜ」

奪い返した荷物を見せつけ、古城は獰猛に唇を吊り上げた。

男は奪われた荷物を呆然と眺めてうめき、やがて口汚い捨て台詞を残して逃走した。彼の背中を見送って、古城はぐったりと脱力する。

「ふふん……やるじゃないか、小僧」

そんな古城に声をかけてきたのは、豪華なドレスの少女だった。見た目の年齢は古城よりも幼いが、口調や態度は傲慢で偉そうだ。しかしそれが妙にしっくりと似合っている。

「あんたもな。助かったよ。そういや、あんた、あいつになにをしたんだ？」

詮索するな。気まぐれで手を貸しただけだ」

ドレスの少女はそう言って美しく笑う。古城は思わず微苦笑を洩らした。見た目に反して態

度がでかいが、妙な威厳があって憎めない少女だ。

「古城君！」

凪沙が息を切らせながら、ようやく古城に追いついてくる。古城の無事を確認した彼女は、もう、と拗ねたように眉を吊り上げて、

「無茶しないでよ。こんなところで怪我したらどうするの！」

「大丈夫だよ。手伝ってくれたやつもいたしさ」

「え？　誰が？」

「誰って……あれ？」

きょとんと訊き返してくる凪沙に困惑しながら、古城は視線を巡らせた。しかしさっきまで傍にいたはずのドレスの少女は、いつの間にか姿を消していた。まるで虚空に溶けこんだかのように、なんの痕跡も残さずに――

「おかしいな。さっきまでここにいたんだよ、変な服を着た日本人の女……おまえと同い年くらいだと思うけど」

「……まあ、無事だったのならいいけど……もう」

言い訳をする古城を見上げて、凪沙が呆れ顔で溜息をつく。

どうにか荷物は取り返したものの、ひったくり騒ぎのせいで空港内はまだざわついていた。無駄に注目を集めている気がするのは、古城の気のせいではないだろう。

これ以上面倒なことになる前に逃げるべきか、と古城が迷っていると、野次馬たちをかきわけて近づいてきた見知らぬ女性に声をかけられる。

「――失礼ですが、暁凪沙さんではありませんか？」

紺色のスーツを几帳面に着こなした、若い白人女性だった。化粧っ気はないが、かなりの美人だ。有能な社長秘書という雰囲気である。

「そうですけど……あの、あなたは？」

「リアナ・カルアナと申します。暁牙城博士のご依頼で、お迎えに上がりました」

少し気後れしたように訊き返す凪沙に、女性は流暢な日本語で答えた。

凪沙が驚いて目を丸くする。

「え!?　じゃあ、お姉さんが牙城君……いえ、父のお友達なんですか……？」

「はい。第四次ゴゾ遺跡調査団の統括顧問を任されています」

リアナ嬢が真面目な口調で言う。この若さで統括顧問を任されているということは、見た目どおり有能な女性なのだろう。しかも美人だ。

「親父から連絡があったとき、母さんがやたら不機嫌だった理由はこれか」

「牙城君、ああ見えて不思議と女の人にもてるもんね」

古城と凪沙は互いに顔を寄せて、どこか諦めたような口調で囁き合う。

「あの……なにか？」

リアナが少し不安そうな表情で訊いてきた。

凪沙は曖昧に笑って誤魔化し、礼儀正しく頭を下げる。

「いえ、なんでもないんです。あははは。よろしくお願いします」

3

ゴゾ島に到着した古城たちを待っていたのは、軽装甲を施した軍用の四輪駆動車だった。リアナの運転でゴゾの中心地ヴィクトリア市街を抜けて、島の反対側へと移動する。

ゴゾは自然の豊かな観光地だが、世界遺産にも登録された古代遺跡の島でもある。中でも特に有名なのが、ジュガンティーヤと呼ばれる巨石神殿だった。

「今から五千五百年以上も前――新石器時代に建設された世界最古の神殿のひとつです。島の伝承によれば、神殿を建てたのはサンスーナと呼ばれる女性の巨人だったといわれています。ジュガンティーヤという名前は〝巨人の塔〟という意味ですね」

「巨人……ツスか」

リアナの説明を聞きながら、古城は適当に相づちを打つ。さすがに調査団の顧問というだけあって、遺跡に関するリアナの知識量は相当なものだった。もっとも、専門家ではない古城たちには、彼女の言っていることは半分も理解できなかったのだが。

「巨人と呼ばれる存在が、人類の出現以前に世界を支配していた、という神話は、世界各地で見られる類型のひとつです。ギリシャ神話のティターン、北欧神話のヨトゥン、中国の盤古、喪われた聖書のネフィリム　それにアダムとイブやその子孫たちも人間の域を超えた巨人だったと記されています」

「じゃあ、リアナさんや牙城君たちは、その巨人の伝説について調べてるんですか？」

後席に座っていた凪沙が、ルームミラー越しにリアナを見つめて訊いた。

するとリアナは、少し戸惑ったような表情になって、

「お二人は、もしかして博士からなにも聞いてないのですか？」

「はあ」

怪訝顔でうなずく古城と凪沙。リアナは小さく唇を噛んで、自問するようにぼそりと呟く。

「そう……そうなの……だとしたら、どうして博士は……」

「あの、ところで、リアナさん」

話題を変えたほうがいいと判断したのか、凪沙が明るい声で呼びかけた。

「その腕輪って、もしかして――」

「腕輪？　登録証のことですか？」

リアナが左手を持ち上げる。そこには腕時計よりもひと回りほど大きな、金属製のブレスレットが嵌められていた。魔族の安全を保証する身分証であり、彼らを監視するための発信器でもある〝魔族特区〟の特殊装備　魔族登録証。

「やっぱり！　じゃあ、リアナさんって魔族なんですか？」

「え、ええ。私は戦王領域出身の吸血鬼です。この調査団の護衛役も兼ねていますから」

驚く凪沙を見返して、リアナは少し心細げな表情を浮かべた。聖域条約が発効して四十年以上が過ぎたとは言え、いまだに魔族を嫌悪したり、恐怖する人間は少なくない。リアナの正体を知って凪沙たちがどういう反応をするか、不安に思っているのだろう。

しかし凪沙は、そんなリアナの不安を吹き飛ばすようにキラキラと目を輝かせ、

「わ、すごい！　私、戦王領域の人とお話しするの初めてです。そっか、この島、〝魔族特区〟ですもんね。牙城君にこんな綺麗な吸血鬼のお友達がいたなんてびっくりです。二人はいつから知り合いだったんですか。この島、けっこう陽射しが強いけど大丈夫なんですか？」

「え、あ……あの、それは……」

「……その辺にしとけ、凪沙。リアナさんがびっくりしてるだろ」

ものすごい早口で質問を始めた凪沙を、古城が仕方なく制止する。絶句しているリアナに、苦笑混じりに頭を下げて、

「すみません。こいつ、無駄に口数が多くて」

「……あなた方は変わってますね。さすがは博士のお子さんです」

リアナは軽く溜息をついて微笑んだ。彼女が喜んでいるように見えるのは、おそらく古城の

気のせいではないだろう。

「よくわかんないけど、それって絶対褒めてないですよね」

「ふふっ、ごめんなさい」

むっつりと言い返す古城を見つめ、リアナはクスクスと笑い出す。几帳面そうな第一印象とは裏腹の、無防備で可愛らしい笑顔だった。

「通り過ぎちゃってますけど、いいんですか？」

遠ざかる遺跡の石壁を振り返りながら、古城が訊く。

「構いません。私たちが調査しているのは、このジュガンティーヤ神殿ではないんです」

「ほかにも遺跡があるってことですか？」

「はい。昨年、ここから二キロほど離れた丘陵で地下墳墓が発見されました。正式な名前は、まだありません。私たちは〝妖精の柩〟と呼んでいますが」

「地下墳墓？　墓？」

「ええ。おそらくは〝聖殲〟前後の遺跡ではないかと考えられています」

「〝聖殲〟って……たしか、親父が研究していたやつでしたっけ」

古城が自信なさげに訊き返す。リアナはなぜか少し頬を赤らめてうなずいた。

「そうですね。世界各地に残された原因不明の大量虐殺と大破壊の痕跡――第四真祖が引き起こしたと伝えられている大いなる災厄の総称です」

「はあ……」

古城たちの父親　暁牙城という男は考古学者だ。学者といっても、研究室に籠もって文献を漁るような知的で落ち着きのあるタイプではない。世界各国の紛争地帯を巡って戦闘のどさくさに発掘品をかすめ取ってくるような、火事場泥棒と紙一重のフィールドワーカーである。

そんな牙城の研究テーマが、〝聖殲〟と呼ばれる出来事だった。西欧教会の聖典にも記された、歴史上の大きな事件であるらしい。

「だけどそれって、ただの伝説なんですよね。実際にそんな出来事があったって証拠は、まだどこにも見つかってないって……」

「ええ。ただの伝説だったら良かったんですけど……」

リアナは、なぜか物憂げな表情でぽつりと言った。彼女の態度を古城は少し訝しく思ったが、その疑問を問い質す前に、彼らを乗せた車は幹線道路を離れ、岩だらけの荒れ地へと入っていった。どうやらその先に目当ての遺跡があるらしい。

「見えてきました。調査団の野営地です」

ハンドルを必死で握りしめて、リアナが言う。起伏の大きな岩場に乗り入れたせいで、車は激しく揺れ動いていた。下手にしゃべっていると舌を噛みそうだ。

やがて辿り着いた野営地は、テントとプレハブ小屋を寄せ集めた質素なものだった。掘削用の重機が何台か置かれているだけで、調査機材と呼べそうなものもほとんど見あたらない。

代わりに目立っていたのは民間軍事会社の警備員や、重武装の装甲車だった。遺跡発掘現場というよりは、ゲリラ部隊の武装拠点のようだ。

「なんだかすごい警備だね。もしかして財宝とか埋まってたりするのかな？」

「そんなんあったら、あの親父が真っ先にかっぱらって逃げ出しそうなもんだけどな……」

口々に勝手なことを言いながら、凪沙と古城は車を降りる。と、

「――誰がなにをかっぱらうって？」

いきなり背後から、二人の肩を抱き寄せてきた男がいた。くたびれた中折れ帽と革ジャケットを身に着け、酒と火薬の臭いを漂わせた中年男性だ。

「牙城君！」

久々に再会した父親を見上げて、凪沙が明るい声を出す。牙城は幼い子どもをあやすように、娘を軽々と頭上へと抱え上げ、

「おおっ、凪沙ァ！　こんなところに天使がいるかと思ったら、俺の娘じゃねェか！　ハハッ、よく来てくれたな。ちょっと見ないうちにますます美人になったんじゃないか？」

「ちょ……牙城君、恥ずかしいよ！」

抱き上げられた凪沙が、頬を赤らめて抗議する。牙城は日焼けした顔で豪快に笑いながら、

「長旅で疲れただろ。危ない目には遭わなかったか？」

「うん。古城君がいてくれたからね」

「ん！……古城？」

そのときになってようやく牙城は、息子の存在を思い出したらしい。心底不思議そうに首を傾げて、素っ気ない口調で訊いてくる。

「よぉ、チビ。なんでおまえがここにいるんだ？」

「付き添いだよ、付き添い！　凪沙一人で旅行なんて行かせられるわけねェだろ！」

「……おまえが来てもなんの役にも立たんと思うが」

小柄な凪沙を肩に乗せたまま、牙城は、うーむ、と顎に手を当てて、

「まあいいや。俺の仕事の邪魔はすんなよ、チビ」

「俺と凪沙で、ずいぶん扱いが違うな。クソ親父」

憎々しげに唇を歪めて古城は言った。腹が立たないわけではないが、この男の口の悪さには慣れている。対等の男同士として扱われていると思えば、それほど悪い気もしない。

「とりあえず、飯にしようか。この島の料理はなかなかいけるぞ。特産のソーセージが地元のビールに合うんだ、これが」

「俺らは思いきり未成年だっての！」

相変わらずデタラメな牙城の父親ぶりに、古城は思わず頭痛を覚える。だが、こんなときに真っ先に文句を言うはずの凪沙は、古城たちの会話を聞いていなかった。

「凪沙？」

「気づいたか……」

凪沙の異変に気づいて、牙城が重々しく呟いた。

彼女が無言で見つめていたのは、岩場の麓。祭殿とおぼしき石造りの洞窟の入り口だ。決して壮麗な遺跡ではない。赤茶けた石灰岩は雨風に浸蝕されて無惨にえぐられていたし、手のこんだ装飾が施されているわけでもない。発掘作業中に事故でもあったのか、周囲には破壊された車両の残骸が散らばっていたりもする。

しかしそれでも、そこにはただならぬ気配が漂っていた。

迂闊に近づく者を拒むような、王気にも似た威圧感が。

「あれが……遺跡なのか？」

「ああ。〝聖殲〟の遺産――十二番目の〝妖精の柩〟だ」

「妖精の……柩……」

無骨な遺跡には似合わないどこか詩的なその響きを、古城は口の中で反芻する。

凪沙はなにかに魅入られたかのように、無言で遺跡を見つめ続けていた。

4

翌朝　夜明け前に野営地を抜け出して、古城と凪沙は近くの森へと向かった。

四方を海で囲まれたマルタでは真水は貴重品だ　しかしゴゾ島は比較的水に恵まれており、澄んだ湧き水をたたえた泉もある。

その小さな泉の中に、凪沙が身体を沈めていた。穢れを祓い清め、精神を研ぎ澄ますための沐浴中なのだ。

地中海性気候のマルタは比較的温暖だといわれているが、それでも早朝はかなり冷えこむ。彼女が身につけているのは薄い白襦袢だけ。水に濡れた布地が肌にピッタリと張りついて、小柄な彼女の身体が今はいっそう小さく見えた。

「誰も来ないようにちゃんと見張っててよ、古城君！」

岩場の陰で待機する古城に、凪沙が大声で呼びかけてくる。

おー、と古城はやる気のない態度で手を振った。こんな人里離れた荒れ地に、小学生の沐浴をのぞきに来る変質者がいるとも思えないのだが、さすがに一人では不安だろうということで、仕方なく一緒についてきたのだ。しかし凪沙は、そんな妹想いの兄に向かって、

「古城君ものぞかないでよ！」

「のぞくかっ！」

「わ!?　だから、こっち向かないでってば！」

ちょうど沐浴を終えて着替え中だった凪沙が、悲鳴とともになにかを投げつけてくる。濡れタオルで視界を塞がれたところに、革製のブーツの直撃を喰らって、古城はたまらず悶絶した。

「古城君、鼻血！　いやらしい！」
「おまえが靴をぶつけたせいだろっ！」
いわれのない誹謗中傷に、古城は猛然と抗議する。その間に凪沙は着替えを終えていた。
彼女が身に着けていたのは白衣に緋袴、千早を羽織った巫女装束だ。長い黒髪は檀紙と水引でまとめている。
「お待たせ！　さあ、行くよ。このために来たんだから、頑張らないとね！」
「無理するなよ。本当はおまえが親父の仕事を手伝う必要なんてないんだからな」
鼻の付け根を押さえたまま、くぐもった声で古城が言った。
そんな古城をちらりと見上げて、凪沙は悪戯っぽく微笑んだ。
「うん。でも、凪沙もこの遺跡には興味があるからね」
履き物の踵を鳴らしながら、巫女装束の少女は、跳ねるような足取りで歩き出す。
「なんだかこの遺跡には哀しい気配が満ちてるよね」
「哀しい気配……？」
「誰かが独りぼっちで泣いてるような、そんな気がするんだ」
「まあ……柩ってくらいだから誰かが埋葬されてはいるんだろうけどな……」
古城は凪沙のあとについて、野営地のほうへと歩き出す。
野営地の入り口には、体格のいい髭面の男が立っていた。見た目はごついが、威圧感はない。

分厚い唇に人懐こそうな笑みを浮かべている。
「ガホが日本から呼び寄せた子どもってのは、おまえさんたちか」
たどたどしい日本語で、男が話しかけてくる。彼が口にした聞き慣れない単語に、古城は軽く面喰らった。
「……ガホ？」
「俺はディマス・カルーゾ。ガホには何度か仕事で世話になってな。今はここの現地スタッフの顔役をやってるんだ。よろしくな」
「どうも。いつも親父が迷惑をかけてます」
どうやら牙城のことを言っているらしいと見当をつけて、古城は、差し出された男の右手を握り返した。カルーゾと名乗った男が愉しそうに笑う。
「ハハッ、ところでそのお嬢ちゃんの服はなんだい？　見慣れないドレスだな」
「日本式の巫女装束ってやつです。本当は着替える必要はないんですけど、こっちのほうが気分が出るんだそうで」
「巫女装束？　ガホの娘は巫女だったのか……」
照れたように微笑む凪沙を凝視して、カルーゾが感嘆の声を出す。
「ちゃんとした修行は受けてないんですけどね。たまに祖母ちゃん家の神社の手伝いをしてるくらいで。過適応者の母親の血も引いてるんで、少しは役に立つと思いますよ」

古城がそう補足すると、がんばります、というふうに凪沙がガッツポーズをつくってみせた。
「なるほど、そいつは頼もしいな。なんせこの遺跡には、超音波診断も探査魔術も利かなくて、正直お手上げだったからな。よろしく頼むぜ」
ふむ、と納得したようにうなずくカルーゾ。
父方の祖母から受け継いだ霊媒としての素養と、母親から受け継いだ過適応者の力　凪沙はそのふたつを併せ持つ、極めて稀少な混成能力者だった。牙城が彼女をわざわざ日本から呼び寄せたのも、それが理由だ。
凪沙の過去透視能力は、これまでにも何度か、埋もれていた遺跡の位置を特定したり、解読不能とされていた古代の碑文を読み解いてきた。もっともそれらの業績は、すべて大学や専門の機関に依頼されての奉仕活動だ。
牙城が、凪沙の力を自分の仕事に利用しようとしたのは、実は今回が初めてである。古城がなんとなく不安を感じているのもそのせいだ。
噂によれば、牙城はどうやら、凪沙を呼び寄せることを最後まで反対していたらしい。
しかし遺跡調査団の出資者たちは、なかば無理やり凪沙に声をかけ、牙城も渋々それを受け入れた。つまり今回の遺跡調査は、それほどまでに重要で、なおかつ危険ということだ。それは野営地周辺の厳重な警備態勢を見るだけでも薄々想像できることだった。
「おまえさんにも霊感があるのかい？」
その警備責任者であるカルーゾが、何気ない口調で古城に訊いてくる。
「いや、さっぱり。俺はただの付き添いです」
「そうか。まあ、人間それぞれ役割ってもんがあるからな。妹さんをしっかり護ってやんな」
そうします、と古城は肩をすくめて、それからカルーゾが担いでいる自動小銃に目を向けた。
「なんか、すごい装備ですけど、やっぱり〝魔族特区〟ってヤバいんですか、治安とか」
「そんなことはないぜ。管理がしっかりしてるぶん、魔導犯罪の件数はヨソの国より圧倒的に少ないしな」
カルーゾは古城たちを安心させるように明るく笑ってみせた。
「ただ、この遺跡の中身がな……俺たちもよく知らないんだが、けっこうな値打ちモンらしい。戦王領域から貴族の姉ちゃんを派遣してくるくらいだからな」
「……貴族？　リアナさんって、もしかして偉い人だったんですか？」
古城は驚いて訊き返す。戦王領域の貴族といえば、第一真祖〝忘却の戦王〟直系といわれる純血の吸血鬼だ。本国に封土を与えられ、自前の軍隊を持っている。
そして彼らは例外なく強力な眷獣を　最新鋭の戦車や戦闘機をも凌駕する召喚獣を従えているはずだった。リアナ・カルアナこそが、この遺跡の最強の護衛だったのだ。
「おう。酔った勢いでうっかり尻を撫でたら、危うく殺されかけたぜ。冗談の通じねえ女だ」
「あんたも無茶苦茶するな、おっさん……」

笑いながら告白するカルーゾを見上げて、古城は呆れ果てた。リアナはたしかに魅力的な美人だが、実際には軍の一部隊にも匹敵する強力な吸血鬼である。そんな女性を相手にセクハラ行為。ここまで来ると豪快というよりも単なるアホだ。

「ま、遺跡の周囲は結界でガチガチに固めてあるし、なんかあったら、軍の連中も飛んでくることになってる。お宝目当ての盗掘団なんざ、近づくこともできねえよ。このキャンプの中にいる限り、おまえら兄妹には指一本触れさせないから、安心してな」

きっぱりとそう断言すると、カルーゾは力強く古城の背中を叩いた。その勢いに咳きこみながらも、古城は笑ってうなずいた。

「わかった。頼りにしてるよ」

「おう、任せろ――」

幼い日本人の兄妹が、遺跡の入り口へと向かって歩いていく。

遺跡の中では、牙城たちが彼らの到着を待っているはずだ。

暁 凪沙という少女が触れこみどおりの能力ならば、発掘作業は飛躍的に前進するはずだった。例の〝柩〟の中身を回収できれば、この遺跡での仕事も終わる。

「さあて……じゃあ、俺も気合い入れて持ち場に戻るかね」

カルーゾは強張った身体を伸ばしながら、野営地をぐるりと見回した。

時刻は午前四時過ぎといったところか

夜明け前。霊能力者の感覚がもっとも鋭くなる時刻であると同時に、夜襲にもっとも適した時間帯であるともいわれている。カルーゾたちの仕事はここからが本番だ。

もっとも野営地の周囲には、リアナ・カルアナが張り巡らした強力な結界がある。どんなに強力な魔族であろうと――否、強力な魔族であればあるほど、野営地に近づくことは困難だ。だからこそカルーゾたちも安心して、人間相手の警備に専念出来るというものだ。

そんなことを考えながら暁兄妹を見送っていたカルーゾは、ふとなにかにつまずいて足を止めた。先日の雨でぬかるんだ地面から、枯れ枝に似た棒状の物体が突き出している。

「なんだ、こいつは？　死体……か？」

それが干涸らびた人間の腕であることに気づいて、カルーゾは息を呑む。

まだ比較的新しい人間の死体が、野営地の敷地内に埋まっているのだ。

死体の身元を確認しようと、カルーゾはその場に屈みこむ。その刹那、

「――っ!?」

完全に干涸らびていたはずの死体の腕が、凄まじい勢いでカルーゾを襲った。

喉を引き裂かれた巨軀の警備員は、声を出すことも出来ぬまま絶命する。

5

外観の無骨さとは対照的に、洞窟の内部は滑らかに磨き上げられた美しい石室になっていた。入り口付近こそ、岩盤を爆破した際に積もった瓦礫や、巨大な怪物に引き裂かれたような痕跡が目立つが、その奥はほとんど無傷で保存されている。

石室内には、年代や文化が特定できそうな、いかなる文字も装飾も残されていない。数千年前に造られたといわれればそう思えるし、数年前に完成したばかりだといわれても納得できる。そんな不思議な空間だった。調査が難航するのも無理はない。

「けっこう綺麗な場所なんだな。地下墳墓っていうくらいだから、もっと不気味で薄暗いところを想像してたんだけど……」

初めて目にする遺跡内部の様子に、古城は素直に感動していた。

石室の中は薄ぼんやりと明るく、ライトがなくても大まかな様子は見て取れる。石壁自体が太陽光を蓄えて発光するような材質になっているらしい。

「どちらかといえば墓地というよりも、神殿に近い目的で造られた構造物だからな」

凪沙を護衛するように最後尾に立っていた牙城が、意外にも真面目な口調で説明してくる。

「古代の神様が眠ってるってことか？」

「神か」

クッ、と牙城が愉快そうに喉を鳴らした。

「そんないいものでもないけどな。神は神でも、祟り神ってんなら、そう外れてもないか」

「博士……！」

リアナが責めるような口調で牙城を制止した。しかし牙城は、ふてぶてしく笑って首を振り、

「今さら隠しても仕方ねーだろ。べつにビビらせようってわけじゃない。本当のことだからな」

「どういう意味だよ？」

古城が父親を睨んで訊く。牙城は、どこから説明すっかな、と言いたげに軽く顔をしかめて、

「第四真祖って言葉、知ってるだろ？」

「焔光の夜伯」ってやつだろ。十二の眷獣を従える幻の真祖、だっけか……」

古城はもちろんその名前を知っていた。おそらく誰もが一度は耳にしたことがある有名な都市伝説だ。からかわれているのだろうか、と腹立たしい気分になる。

しかし牙城は、恐ろしく真面目な表情で重々しく首肯した。

「そうだ。一切の血族同胞を持たない、唯一孤高にして世界最強の吸血鬼。歴史の転換点に出現して、世界に幾度となく虐殺と大破壊をもたらしてきた、といわれてるな」

「だけど実在したって証拠はないんだろ。今どき小学生だって信じてねーぞ、そんなオカル

ト」

「証拠はあるさ。おまえたちの目の前にな」

牙城はそう言って石室の奥を指さした。

そこにあるのは重厚な石造りの扉だ。継ぎ目も可動部も見あたらず、どうやれば開くのか見当もつかない。下手に扉を爆破すれば、石室ごと崩れて生き埋めになる可能性が高かった。凄まじく高度な技術によって生み出された罠だ。

おそらく凪沙が呼ばれたのは、この扉を開ける手がかりを得るためなのだろう。

「この奥に第四真祖が眠ってるっていうのか？」

無意識に声を潜めて、古城が訊いた。しかし牙城は緊張感のない態度でクックッと笑い、

「もしそうだったら面白いよなあ」

なんだよそれは!?　そんなふざけた理屈で貴重な古代遺跡を掘り返すなよ！」

古城は思わずカッとなって父親を怒鳴る。その瞬間、悲痛な声で絶叫したのはリアナだった。

「ふざけているわけではありません！」

「リ、リアナさん……？」

古城は唖然として彼女を見つめ返す。リアナの絶叫の余韻は、広大な石室の中に反響して、まだうっすらと消え残っている。取り乱してしまったことを恥じているのか、すみません、と小声で謝ったきり、リアナはうつむいて沈黙した。

「ま、大人には大人の事情があるってことだ。おまえらは細かいことは気にするな」

そんなリアナを庇うように、牙城が無責任な口調で言った。

「ここが地下墳墓の第二階層〝追憶の間〟だ。この先にもうひとつ部屋があるはずなんだが、なにしろ封印が厳重過ぎて入り口がわからねえ。それで凪沙に来てもらったんだが　――」

牙城はそこで言葉を切って、凪沙の横顔に視線を向けた。

そのときようやく古城は気づいた。普段はあれほど口数の多い凪沙が、さっきからひと言もしゃべっていない――

「凪沙……？」

古城がかすれた声で妹に呼びかける。しかし凪沙は振り返らない。虹彩の開ききった大きな瞳が、無感情に石室の扉を見つめているだけだ。

ふと気づけば遺跡の壁全体が青白く輝きを増していた。石材が水晶のように透明度を増して、その中に電子回路に似た巨大な魔術紋様が浮き上がる。

凪沙の口から、聞き慣れない異国の言葉が洩れ出した。まるで遺跡に残留する誰かの意思と、その言葉で対話しているかのように

この遺跡を造り出した人々は、当然、石室の扉を開ける方法も知っていた。凪沙は彼らを降霊することで、封印を解こうと試みたのだ。

しかし強大過ぎる存在を受け入れたせいで、凪沙自身の意識はすでに失われている。

今の凪沙に彼女の自我はない。遺跡の管理システムを構築する魔術的な回路の一部になってしまっているのだ。

「博士！　これは……？」

「遺跡が再起動したみたいだな。遺跡守護像の件もあったことだし、魔力源が生き残ってるだろうとは予想してたが、思ったより派手だねェ」

驚くリアナの問いかけに、牙城が緊張感の乏しい態度で答える。

凪沙の憑依状態は続いていた。なにかに誘われるように彼女が足を踏み出すと、それに呼応して、石室の扉が輝きを増した。

そして扉はなんの前触れもなく消滅する。瓦礫の一片すら残らない。

おそらくは空間制御の魔術によって、異世界へと転送されたのだ。どれだけ高度な魔導技術があればそんなことが出来るのか、古城には想像すらできなかった。

戦王領域の魔導技師でも解けなかった封印なのに、こんな一瞬で……そんな……」

リアナは呆然と呟いて、いまだ憑依状態の凪沙を見つめる。

巨大な扉の消滅によって、遺跡の奥に続く通路が姿を現していた。

「うお……しばれるな、こりゃ！」

通路の奥から吹きつけてきたのは強烈な冷気。吐く息が白く凍る冷たい空気に、牙城が大げさに震え上がる。

急激に大気が冷やされたせいで、遺跡内部には濃霧が立ちこめ始めていた　その霧の中に溶けこむように、凪沙が通路の奥へと進んでいく。

「凪沙っ!?」

古城は慌てて彼女を止めようとした。それを遮ったのは牙城の声だ。

「待て、古城！　近づくな！」

「だけど、凪沙が……！」

「ここはあいつに任せよう。少なくとも交霊には成功してるらしい。下手に正気に戻すと、そのほうが危険だ」

「ぐ……！」

古城はその場に踏みとどまって唇を噛む。悔しいが父親の言うとおりだった。今の古城に出来るのは、凪沙を見失わないように必死で彼女を追うことだけだ。

濃霧に覆われた通路を抜けると、その先には最後の部屋があった。

ほぼ円形の背の高い部屋だ。部屋の奥に設けられた祭壇は、極地の氷河にも似た巨大な氷の塊に覆われている。その氷の柩の中には、小柄な人影が眠っていた。

凪沙と背格好のよく似た少女だ。

肌の色は透きとおるように白く、幼い顔立ちは非人間的なまでに整っている。色素の薄い金髪は、光を反射して虹のように輝いていた。

「あれが〝妖精の柩〟……？　死んで……るのか？」

少女を見上げて、古城が呟く。

氷の柩で眠る少女は、たしかに透明な琥珀に閉じこめられた妖精の姿を連想させた。どこか禍々しさを感じさせる美しい妖精だ。

たとえ彼女が第四真祖　世界最強の吸血鬼だとしても、この状況で生きていられるとは思えない。それでも、この石室にいる全員が気づいていた。

遺跡に供給されていた魔力の源は、柩の中にいるこの少女だ。彼女が凪沙を呼んだのだ。

「ようやく見つけた……十二番目の〝焔光の夜伯〟……！」

リアナが少女を見つめて独りごちた。

古城にはリアナの言葉の意味がわからない。だがその無機質な肩書きは、柩の中で眠る儚げな少女には、どこか似つかわしくないように思えた。

氷の柩を覆う無数の氷柱が、鋭く尖って少女に近づく者を阻んでいる。それは彼女の眠りを護るイバラの城壁を見ているようだった。

「まるで眠り姫じゃないか……」

古城は思いついた言葉を無意識に口にする。そう、氷の柩に囚われた孤独な少女は、吸血鬼というよりも、おとぎ話の悲運の姫君に似ている。

そんなふうに感じていたのは、古城だけではなかったらしい。

リアナが古城の横顔を見つめて、白い花のような清楚な微笑を浮かべた。
「眠り姫……フロレスタン王の娘オーロラ――ですか」
「いいねェ。味も素っ気もない数字で呼ぶよりは、詩的でイケてるな」
牙城が柄にもなくそんな褒め言葉を口にする。古城は無性に気恥ずかしさを覚えて、緊張感のない父親を怒鳴りつけた。
「そんな呑気なこと言ってる場合かよ！　このままだと凪沙まで氷漬けになるぞ！」
「ああ……そうだな……」
息子の言葉を、牙城は否定しなかった。
柩の前に辿り着いた凪沙を、凍気の霧が覆い尽くそうとしている。少女を閉じこめている柩は、このまま凪沙をも氷の中に取りこもうとしているのかもしれない。
あるいは少女本人が、自ら復活するために凪沙の霊力を吸い尽くそうとしているのか――
しかしそれを知っていながら、牙城は凪沙を救い出そうとはしなかった。それどころか、
「ミス・カルアナ、ここは任せて構わないか？」
「親父――!?」
突然、凪沙に背を向けた牙城を見て、古城は今度こそ絶句する。
考えるよりも先に身体が動いた。古城は小さな拳を固めて、父親に殴りかかろうとする。
しかし牙城を止めることはできなかった。古城が彼に殴りかかるよりも早く、遺跡全体が揺れたのだ。巨大なハンマーを打ち下ろしたような衝撃で地面が揺れ、古城はバランスを失い転倒する
「……地震か!?」
石室全体が激しく軋んで、バラバラと砂礫が降り注いだ。地面の揺れはそう長くは続かない。代わりに強い風が吹きこんでくる。火薬の臭いが混じった爆風だ。
その衝撃がきっかけとなったのか、凪沙の憑依が解除されていた。呪女装束に包まれた小さな身体が、音もなくその場にくずおれる。
「博士、今のは……！」
リアナが表情を険しくして背後を睨んだ。
「ああ……ちょっとばかり面倒なことになってるみたいだな」
牙城は背中に担いでいたライフルを降ろして、安全装置を解除する。ブルパップ式の軍用自動小銃だ。古城は、突然異質なものへと変わってしまった父親の気配に圧倒された。
「悪いな、古城。凪沙を頼む。すぐに戻ってくるからよ」
「親父っ！」
走り去っていく牙城の背中を、古城は呆然と見送った。
野営地を警備していたカルーゾたちの、ものものしい雰囲気を思い出す。この遺跡が狙われているのは、最初からわかっていたことだった。古城がそれを理解していなかっただけなのだ。

そして牙城は、そんな場所に凪沙を呼びつけたのだ。危険があることを知りながら

「くそっ！　なに考えてんだよ、あの男はっ!?」

古城は力任せに床を殴りつけた。

リアナがつらそうに目を伏せながら、古城の隣に屈みこむ。

「……巻きこんでしまったことはお詫びします。ですが、どうか博士を責めないでください。あの方がいちばん苦しんでいるんです」

「なんなんですか、この遺跡は？　ただの地下墓地じゃないんですか？　十二番目の〝焔光の夜伯〟ってのは、いったい――!?」

リアナに詰め寄りながら、古城が訊いた。

そんな古城を突き放すように押しとどめ、リアナが静かな殺気を放つ。

「その話はまたあとにしましょう。古城さん、下がってください」

「え？」

左手首の登録証を外して、リアナは遺跡の入り口を睨みつける。彼女の瞳が真紅に輝き、唇の隙間から牙が覗いた。

古城は彼女の正体を思い出す。リアナは戦王領域の貴族。〝旧き世代〟の吸血鬼だ。

「来ました。敵です」

リアナの言葉が終わる前に、石室の中へと無数の人影が雪崩れこんでくる。

その姿に古城は言葉をなくす　彼らの顔を、古城は知っていたからだ。

遺跡の入り口を爆破して、強引に押し入ってきた〝敵〟の兵士たち

防弾アーマーを身に着け、銃器で武装した彼らの姿は、野営地を警護していた民間軍事会社の警備員たちそのものだった。

6

調査団の野営地は、炎に包まれていた。車両や採掘用の重機は軒並み破壊され、遺跡とは無関係な宿舎やテントも丁寧に焼き払われている。

「おうおう……派手にやってくれたじゃねーか」

地下墳墓の外に出た牙城が、ギリッと奥歯を鳴らす。

敵の正体はわからない。心当たりが多すぎた。第四真祖の復活を望まない連中は、人間だけでなく、魔族の中にも大勢いるのだ。〝戦王領域〟の内部にも、だ。

「ミス・カルアナの結界が破られたのか？　そんなことができるとしたら、カルアナ家と同格以上の吸血鬼だけだが……いや……」

妙だな、と牙城は眉根を寄せる。

リアナ・カルアナが従えている眷獣は三体――

野営地を守護する結界の正体は、そのうちの一体が姿を変えたものだ。その結界を破るほどの攻撃に、宿主であるリアナが気づかないはずがない。

死人の数が、やけに少ないことも気になった。

これだけの被害が出ているにもかかわらず、地上には死体がほとんど見あたらない。調査団の学者たちだけなら、どこかに避難したという可能性もあり得るが、民間警備会社の警備員までもが、揃いもそろって持ち場を放棄したとは考えにくい。

そもそも敵兵の姿が見あたらない――

油断なく腰を落としたまま、牙城は遺跡の外に出る。

そんな牙城の前にひょっこりと姿を現したのは、髭をたくわえた巨軀の警備員だった。

「牙城！　よかった、無事だったか」

「カルーゾか……なにがあった!?」

岩場の陰から現れたカルーゾを睨んで、牙城が訊いた。どうやらカルーゾは負傷しているらしい。彼が身に着けた戦闘服は、流れ出した血でどす黒く染まっている。

「すまん、不意を衝かれた。結界が破られて野営地はこの有様だ。どうにか敵は撃退したが、負傷者が多い。牙城も手を貸してもらえるか？」

「そうだな。そうするよ……だが、その前に」

頼りない口調で報告する友人を、牙城はどこか哀しげな表情で見つめた。

そしてライフルの銃口を、カルーゾの胸元へと向ける。

「牙城……!?」

カルーゾがギョッとしたように目を剝いた。しかし牙城はそれに構わず引き金を引く。

撃ち放たれた弾丸は、狙い違わずカルーゾの右腕を撃ち抜いた。鮮血と肉片が飛び散って、携えていた銃が地面に落ちる。

「なんの……真似だ、暁牙城……!?」

カルーゾが生気のない瞳で牙城を睨んだ。中折れ帽の庇で目元を隠し、牙城は怒りを圧し殺した低い声を出す。

「下手な小芝居はやめとけよ、テロリスト野郎。本物のカルーゾが、俺の名前をまともに発音できるわけねーだろ……それに今のおまえからは、死体の臭いがプンプンするぜ」

「ぬ……」

カルーゾが――かつてカルーゾだった動死体が、動揺したように短く唸った。

牙城はそのまま、足元の地面へと向けてライフルを連射。地面から這い出そうとした新たな死体を次々に葬り去っていく。

「死霊魔術……なるほど。どうやって結界を破ったのか不思議に思ってたんだが、調査団が到着する前に、あらかじめ遺跡の周りに死体を埋めておいたんだな。そいつらを甦らせて、内側から野営地を襲ったのか――」

際限なく現れる動死体を撃退しながら、牙城がうめく。

死体には体温も脈もなく、殺気を放つこともない。埋葬された死体が相手では、どんなに優れた監視装置も無力だ。強烈な魔力を蓄えた地下墳墓が近くにあるせいで、発掘現場を訪れた魔術師たちも、死体の気配に気づくことは出来なかった。

敵ながら見事なトラップだった。外側からでは破れないリアナの結界も、最初から中に潜んでいた敵を防ぐことはできないのだ。

「死霊魔術を操るテロ集団――この手口、聞いたことがあるぜ。黒死皇派か！」

『よくぞ見抜いた。さすがは〝死都帰り〟の暁牙城……だが、もう遅い！』

カルーゾの声で、彼を操っている魔術師が叫んだ。

その声が合図になって、新たなゾンビが地中から現れる。分厚い毛皮に覆われたその姿は、ただの人間の死体ではない。牙城が撃ちこんだライフル弾を、強靭な筋肉が撥ねのける。

「獣人の動死体だと――!?」

新たな敵の攻撃に圧倒されて、牙城はじりじりと後退した。たとえゾンビと化していても、獣人の筋力と運動能力はやはり脅威なのだ。

黒死皇派とは、〝戦王領域〟出身のテロリストたちの組織名だった。

獣人優位主義を唱え、吸血鬼による〝夜の帝国〟の支配に反発。人間と魔族の共存を目的とした聖域条約の破棄を訴える好戦的な一派だ。黒死皇と名乗る彼らの指導者は、獣人でありながら死霊魔術に精通し、世界各地で様々なテロ活動を繰り広げている。最悪の予想を上回る極悪の敵だった。

「馬鹿どもがっ……おまえたちは、この遺跡になにがあるのかわかって襲ってきたのか!?」

『知らぬよ。それに興味もない』

カルーゾを操っている男が、牙城の問いかけを一蹴する。

『だが、薄汚い吸血鬼の真祖どもが、この遺跡に並々ならぬ関心を寄せているのは知っている。カルアナ家の跡取りを目付役として送りこんでくるほどだからな――！　それだけでも我らがここを焼き払うには十分な理由よ！』

「ちっ……！」

牙城が焦りに表情を歪めた。やはり彼らの狙いは遺跡なのだ。だが、彼らをそこに行かせるわけにはいかない。遺跡の中には凪沙と古城がいるのだ。

カルーゾの声で、死霊魔術師が笑い出す。

『案ずるな。この遺跡に眠る宝物は、我らが存分に役立ててやる。死体となった貴様の脳から、遺跡に関わる知識のすべてを引き出してな――』

「腐りかけたてめえの脳ミソで、俺の知識が理解できるものかよ」

どうにかゾンビたちを無力化したところで、牙城のライフルの残弾も尽きた。役目を終えたライフルを捨てて、牙城はジャケットの背中から新たな銃を引き抜いた。短銃身のショットガ

ンだ。

「悪いな、カルーゾ……救ってやれなくてよ！」

『フ……そんな豆鉄砲でこの身体を止められるとでも』

ゾンビと化したカルーゾの巨軀が、猛然と牙城に突っ込んでくる。そのタックルをまともに喰らえば、牙城とてひとたまりもないだろう。

しかし牙城はよけなかった。ショットガンの銃口をカルーゾに向けて、正面から撃ち放つ。ショットガンから放たれる散弾は、広範囲を制圧出来るかわりに貫通力に劣る。ゾンビ化した今のカルーゾを止めることは出来ないはずだった。

が、

凄まじい悲鳴とともにカルーゾは横転した。

魔術師の支配から解き放たれ、ただの死体に戻った彼は、そのまま目を閉じて動きを止める。

代わりに近くの岩場から、よろめきながら現れた影がある。カルーゾを操っていた死霊魔術師の本体だ。彼は苦悶の声を洩らしつつ、憎悪の視線を牙城に向けた。

「対魔族用、銀パラジウム合金製のフレシェット弾だ。てめえの霊体にも効くだろ」

新たな弾丸を装填しながら、牙城が醒めた声を出す。

牙城が使った弾丸は、呪力を蓄えた魔弾だった。実包に詰めこまれた小型の矢弾は、ゾンビ化したカルーゾの肉体だけでなく、それを操っていた魔術師にも直接的なダメージを与えていたのだ。

「貴様……貴様ァ！　人間の分際で我の身体に傷をつけるか　！」

額からこぼれ落ちる鮮血を拭って、男が喚いた。彼の全身の筋肉が膨れ上がり、巨大な獣の姿へと変わる。漆黒の毛並みを持つ巨大な獣人だ。

「死霊魔術を使う獣人……!?」

牙城が愕然と表情を凍らせた。強靭な肉体を持つ獣人が、あえて魔術を習得するケースは希だ。もしも例外があるとすれば、先天的に強大な魔力を備えた、ごく一部の種族ということになる。黒死皇派のテロリストでそれほどの力を持つ者といえば、黒死皇本人ともう一人。

「まさか――〝死皇弟〟ゴラン・ハザーロフか！」

我が名を知っていたことは褒めてやる！　その誉れを抱いて冥土へ行け、暁牙城！」

漆黒の獣人が咆吼した。牙城が彼を目がけて散弾銃を発砲する。

しかし撃ち出された無数の矢型子弾を、獣人は圧倒的な反応速度ですべて回避した。そのまま視認できないほどの速度で牙城に迫り、強烈な膝蹴りを叩きこむ。

「ぐお……!?」

蹴りを受け止めたショットガンがへし折れた。牙城の顔が苦痛に歪む。骨が砕ける鈍い音が響く。牙城は血反吐を撒き散らしながら、背後へと吹き飛ばされていく。

燃え広がった炎は野営地を覆い尽くし、夜明け前の空を深紅に染めていた。

7

「ん……っ」

占城の腕に抱かれていた巫女装束の少女が、小さな声を洩らして身じろぎする。

長い睫毛を揺らして彼女は目を開けた。まだ少し焦点がぼやけているが、彼女の瞳の色は普段と同じだ。憑依が解けたのだ。

「……占城……君？」

「起きたのか、凪沙。せっかくだけど、もう少し目を瞑ってたほうがいいぜ」

周囲の様子に動揺する妹に、占城は精いっぱい平静を装ってそう言った。

巨大な氷塊に囚われた金髪の少女。イバラの茂みを思わせる無数の氷柱。地下の石室。そこに侵入してきた兵士たち——

そしてゾンビ化した警備員の群れから占城たちを護っていたのは、美しい女性吸血鬼だった。

几帳面に整えていた髪は乱れて、彼女の全身は返り血に濡れている。彼女自身も手傷を負っているようだ。しかし遺跡を襲ってきたゾンビたちはすべて斃され、元の死体へと戻っている。

〝旧き世代〟の吸血鬼の女性が、たった一人で数十体のゾンビを殲滅したのだ

占城たちを庇っていなければ、傷を負うこともなかっただろう。〝戦王領域〟の貴族の名に恥じぬ、圧倒的な戦闘能力だった。

「リアナさん……」

「すみません。少々手こずってしまいました」

弱々しく呼びかけてくる凪沙に気づいて、リアナは困ったように微笑んだ。

彼女の両脇には、二体の獣がうずくまっている。

それぞれ金と銀に輝く巨大な狼だ。体長はどちらも二、四メートルはあるだろう。明らかに普通の生物ではない。彼らは実体を持つほどの濃密な魔力の塊だった。

「眷獣……」

「はい。私たち吸血鬼が血の中に従えている異界からの召喚獣……意思を持つ魔力の塊です。たとえテロリストが何人こようと、このスコルとハティがいる限り、柩とお二人には決して手出しはさせません。どうか安心してください」

「テロリスト……？」

占城はリアナに訊き返す。テロリストを名乗る連中が、なぜこんな辺境の遺跡を襲ってくるのか——その理由がわからない。

言葉を選ぶような短い沈黙を挟んで、リアナが答えた。

「おそらくは黒死皇派――獣人優位主義者でしょう。魔族の中でも獣人こそがもっとも優れた種族であると称し、聖域条約の破棄を訴える国際指名手配犯たちです」

「どうして、そんな連中が遺跡を狙ってるんですか？」

「ここが〝熔光の夜伯〟ゆかりの遺跡だと知ったからでしょう。獣人優位主義者たちにとって、吸血鬼の真祖は憎むべき最大の敵ですから」

彼女の言葉に、古城はハッと息を呑んだ。

「そうか……アヴローラが本当に第四真祖なら……」

「ええ。彼らにとっては、彼女は命を懸けて破壊する価値のある存在でしょうね」

そう言ってリアナは溜息をついた。

本当なら彼女は今すぐにでも、牙城の援護に行きたいのだろう。だが調査団の最大の戦力であるがゆえに、リアナはここから動けない。ここにはテロリストたちが狙っている〝妖精の柩〟の本体があるからだ。

「アヴローラ……って？」

凪沙が戸惑うような表情で聞いてくる。古城は小さく微笑んで、背後の氷塊を指さした。

「そこで眠ってるお姫様の名前だよ。リアナさんがつけてくれたんだ」

「そう……なんだ」

氷の柩に囚われた少女を見上げて、凪沙は柔らかく目を細める。

「どうした？」

「ううん　なんだか、彼女が喜んでるような気がしたから　」

「彼女？　アヴローラが……？」

古城はかすかな不安を覚えて、凪沙の顔を覗きこんだ。憑依は解けたと思っていたが、そうではないのかもしれない。もしかしたら凪沙とアヴローラは、今でも意識の一部を共有しているのかも――

その仮説に、古城が漠然とした恐怖を覚えたとき、不意に凪沙が全身を硬直させた。怯えたように激しく震えながら、古城にしがみついてくる。

「……凪沙？」

「なにか、来るよ……なに、これ……嫌……恐い……！　古城君、逃げ……！」

「凪沙!?　おい!?」

ただならぬ妹の反応に、古城は混乱して周囲を見回す。爆撃にも似た轟音とともに、石室の壁が崩れ落ちたのは、その直後のことだった。

降り注ぐ瓦礫を蹴散らして、巨大な獣人が姿を現す。

漆黒の毛並みを持つ狗頭の獣人　身長は二メートル近くあるだろう。その並外れた巨体のせいで、まともな通路を使って遺跡に入ることが出来なかったのだ。

「　ここにいたか、リアナ・カルアナ」

女吸血鬼を睨めつけて、漆黒の獣人が嘲るように笑った。
「人間ごときに戦わせて、自分は野ウサギのように穴蔵に潜んで震えているとはな。さすがは惰弱で知られたカルアナ伯の娘よ。当主に似て臆病なことだ」
「……黙れ、ケダモノ！　それ以上の父への侮辱は許さぬ！」
リアナが頬を紅潮させて叫んだ。どうやら獣人はリアナの素性を知った上で、彼女を挑発しているらしい。期待どおりのリアナの反応に、獣人は満足げに笑い、
「笑わせるな、小娘。貴様になにができる。暁牙城は貴様よりもよほど歯応えがあったぞ」
「――噛み裂け、〝日蝕狼〟！」
牙城はすでに始末した　そう言いたげな獣人の言葉が、リアナから冷静さを完全に奪った。
リアナは自らの眷獣を、怒りにまかせて獣人にぶつける。
吸血鬼の眷獣とは強大な魔力の塊だ。強靭な肉体を持つ獣人といえど、眷獣とまともにぶつかって耐えられるはずがない。誰もがそう確信していた。ただ一人――獣人自身を除いては。
「その程度の眷獣で、この〝死皇弟〟に歯が立つと思ったか――！」
閃光と化して突進してきたリアナの眷獣を、漆黒の獣人は右腕だけで受け止めた。眷獣の動きを抑えこみ、そのまま押し潰そうとする。
「なっ……!?」
信じられないその光景に、リアナは呆然と立ち尽くした。生身の獣人が眷獣と互角に渡り合

う　そんなことがあり得るはずがないのだ
驚愕する彼女の目の前で、漆黒の獣人が姿を変えていく。
獣人ではなく、完全な獣へと――
今や彼の全身は数倍の大きさに膨れ上がり、その肉体は濃密な魔力に覆い尽くされていた。
リアナの眷獣とほぼ同等――いや、それ以上に強大な魔力の獣だ。
「まさか、神獣化!?」
男の力の正体に気づいてリアナがうめいた。獣人種族の中でも、ひと握りの上位種だけが持つという特殊能力。彼は膨大な魔力を使って、自らの肉体を一時的に神獣へと変えたのだ。天使や龍族にも匹敵する神話の世界の存在へと　―
「召喚獣の力を借りねばなにもできぬ貴様ら吸血鬼とは違う。我らは、巨人の心臓を喰らいて生まれし魔狼の末裔そのもの。ゆえに獣人こそが最高位の魔族！　この地上でもっとも優れた種族の力、思い知れ！」
「ほざくな……！　喰いちぎれ、〝月蝕狼〟！」
動揺から立ち直ったリアナが、もう一体の眷獣へと攻撃を命じた。
防御を捨てた捨て身の攻撃だ。一体がかりの眷獣の猛攻で、神獣化した敵を押し返す。が、
「クハハハハッ……！　没落したとはいえ、さすがは戦王領域の貴族。しぶといな！　だが、やはり我らの勝ちだ！」

「負け惜しみを――！」

リアナは表情を歪めながら、限界近くまで魔力を放出する。

そのせいで彼女の視界は狭まり、危険に対する反応が遅れた。

それを待ちわびていたかのように、石室に積もった瓦礫の中から数体のゾンビが飛び出して、無防備なリアナ本人へと殺到する。漆黒の獣人がわざわざ壁をぶち抜いて現れたのは、死体を瓦礫に潜ませるためだったのだ。

「動死体――!?」

「遅いぞ、リアナ・カルアナ」

獣人が勝ち誇ったように猛々しく笑う。

吸血鬼は最強の魔族と呼ばれているが、それは眷獣という圧倒的な切り札を持っているからだ。肉体そのものは魔族としては、むしろ脆弱な部類に入る。ましてやリアナは痩身の女性で、体格に恵まれているわけでもない。

ゾンビ化した警備員の銃撃に、護衛の眷獣を持たない彼女は抗うすべを持たなかった――

「リアナ……さん……!?」

動死体たちが乱射した弾丸が、リアナの胴体を貫いて心臓を抉る。

古城はそれをただ呆然と見ていた。

幼い古城にも、一目でわかった。〝旧き世代〟の吸血鬼といえども、これほどの深傷を負ってはもはや再生できない　致命傷だ　リアナはもう助からない

「あ……」

凪沙の喉から声が洩れた。

リアナの身体がよろめいた。彼女の瞳から涙があふれ、青ざめた唇が弱々しい言葉を紡いだ。

「すみません、博士……私は……」

その声は古城たちの耳に届くことなく、獣人の咆吼にかき消された。

神獣化した漆黒の獣人が、宿主を失った二体の眷獣を蹴散らした。実体を維持できなくなった眷獣たちは膨大な魔力を撒き散らして爆散し、その衝撃で遺跡が崩れ始める。

そして血まみれのリアナが、ゆっくりと仰向けに倒れていく。

「い……いやあああああああああああぁぁぁ――！」

凪沙が天を仰いで絶叫した。遺跡内に残留する濃密な魔力と、戦闘の余波、そしてリアナの断末魔の想いが、幼い巫女の中に際限なく流れこもうとしているのだ。

漆黒の獣人が、苦悶する凪沙を冷ややかに一瞥する。

しかし彼は、すぐに興味をなくしたように顔を上げた。幼い人間の兄妹二人、わざわざ殺す価値もない、と判断したのだろう。

「第四真祖か――」

彼が見つめていたのは、古城たちの背後にある氷塊と、その中で眠る少女だった。

リアナの脅獣の暴走によって巨大な氷塊が半壊し、少女の肉体の一部が外気に触れている。しかし少女が目を覚ます気配はない。氷の中に囚われていた亡骸が、目覚める理由などありはしないのだ。

「遺跡の真贋になど興味はないが、リアナ・カルアナが命懸けで護ろうとしたというだけで、潰す価値があるというものだ……幼き兄妹よ、この場に居合わせた不運を呪うがいい」

獣人の言葉が終わる前に、動死体たちが銃を構えた。

一斉射撃をもって少女の肉体を、二度と復活できないように粉砕するつもりなのだろう。彼女の傍にいる古城と凪沙が、巻き添えになることを知った上で――

「あ……あ……」

苦しむ妹を抱きかかえたまま、古城は必死で絶望に抗っていた。牙城は戻ってこない。リアナは死んだ。彼らを護ってくれる者はもういない。凶悪な獣人と動死体たちを相手に、幼い古城が立ち向かえるはずもない。

それでも諦めることはできなかった。凪沙を護らなければならないのだ。考えろ、と古城は自分に言い聞かせる。考えろ考えろ考えろ。どうすれば凪沙を助けられる。どうすれば――

しかし時間は古城の決断を待たない。

「〝焔光の夜伯〟の伝説は、ここで潰える　爆ぜろ！」

獣人の命令に、動死体たちが引き金を引く。そして銃口が一斉に火を噴いた

8

薄暗い遺跡の中を、濃霧と硝煙、そして氷の破片が埋め尽くしていた。

動死体たちの一斉射撃の余韻である。

氷塊の中に囚われていた少女の亡骸は、無数の銃弾を浴びて細切れの肉片へと変わったはずだ。仮にあの少女が本当に第四真祖だったとしても、もう二度と甦ることはないだろう。

もちろん、第四真祖が実在する可能性を、死皇弟　ゴラン・ハザーロフは信じていない。むしろ偽者で構わないのだ。

世界最強の吸血鬼と呼ばれる第四真祖を、黒死皇派が滅ぼした――その事実だけが残ればいい。リアナ・カルアナが遺跡を護っていたことで、噂の信憑性も増すだろう。

これで黒死皇派というテロリスト集団は、ますます威名を増すことになる。

もっともその代償は、決して少なくはなかったが――

「終わったか……」

口元からあふれる血を拭いながら、ハザーロフはそう呟いた。

彼の脇腹から背中にかけて、魔術の炎に焼かれた生々しい傷が残っている。暁牙城との戦いで負った傷だ。ただの人間でありながら、あの男はハザーロフを散々手こずらせ、最後に呪

式弾で一矢報いたのだ。

そして重傷を負った状態での神獣化によって、ハザーロフの寿命はごっそりと削られていた。リアナ・カルアナとの戦いは、決してハザーロフの圧勝というわけではなかったのだ。むしろ動死体たちの力を借りなければならないほど、ハザーロフはあのとき追い詰められていた。だがそれでも、ハザーロフが勝利したことに変わりはない。

苦労して強敵を斃したという実感に、彼はかつてない昂揚を覚えていた。

だが、そんなハザーロフの満足に水を差すように、霧の中にかすかな声が響く。

「古城君！　古城君……目を開けてよ、古城君！　お願いだから……！」

声の主は巫女の衣装をまとった東洋人の少女だった。兄とおぼしき少年の身体にすがって、必死に彼を救おうとしている。

しかしそれが徒労であることは、誰の目にも明らかだった。

少年の身体は、無数の銃弾を浴びて血みどろだった。特に胸部はズタズタだ。高い再生能力を持つ吸血鬼でも、その傷では助からないだろう。ただの人間では尚更だ。

むしろあの状況で、妹のほうが生きていられたことのほうが驚きだった。動死体たちが放った銃弾は、確実に彼らを始末していたはず――

「そうか……妹を庇ったのか。その気概は賞賛するぞ、少年」

絶命している東洋人の少年を見下ろして、ハザーロフは感嘆の息を吐いた。

おそらく彼は銃撃を浴びる寸前に、妹の身体を力任せに突き飛ばしたのだ。銃撃の死角となる石室の隅へと。そして自分自身は囮になって、動死体たちの銃撃を引きつけた。

おかげで妹は無事だった。無傷とまではいかないが、意識を保てる程度の軽傷だ。

だが、当然の帰結として、彼自身は銃撃をまともに喰らうことになった。氷の柩の正面で、一斉射撃の直撃を浴びたのだ。

「無謀で愚かだが、勇気ある行動だったことは認めよう。だが、しょせんは脆弱な人間の肉体。残念だったな――」

哀れむような口調でそう言って、ハザーロフは再び自らを巨大な神獣へと変えた。

あれだけの銃撃を浴びせてもまだ、少年の肉体が原型を留めていたことが気になった。

だとすれば第四真祖の肉体も、同じように残っている可能性がある。万一のことがないように、徹底的に焼き尽くしておくべきだろう。

――案ずるな。今度こそ楽にしてやる！」

怯える東洋人の少女にそう宣告して、ハザーロフは残酷に笑った。

漆黒の獣人の体内に、凄まじい魔力が凝縮されていく。強大な神獣の爆炎をもって、この遺跡のすべてを消滅させるつもりなのだ。

だが、その攻撃を放つ直前――ハザーロフの脳裏をかすかな疑問がよぎる。

あの少年は、どうして柩の正面に立っていたのだろう――？

動死体たちが柩を狙っていることを、彼は知っていたはずだ。妹を庇うためだとしても、あえて銃撃に身をさらす必要はなかったはず。

第四真祖を救おうとした、とでもいうのだろうか　？

いや、それこそあり得ない。彼は妹を庇うだけで精いっぱいだった。そんな余裕があるはずもない。そう、彼は妹を助けようとしていたのだ。自分自身を犠牲にしてまでも。

そんな彼が、自ら死を選ぶ理由はなんだ　？

妹が、最初の銃撃を生き延びたとしても、それだけで彼女が見逃してもらえるという保証はない。今まさにハザーロフがやろうとしているように、誰かが彼女にとどめを刺す可能性は、当然予測できただろう。

本当に妹を救いたいのなら、彼は生き延びなければならなかった。

リアナ・カルアナはもういない。兄である彼以外に、妹を救ってくれる者はいないのだ。

では、妹を救ってくれるかもしれない誰かの存在を、もしも彼が知っていたら　！？

「第四真祖……！」

魔力の充塡を続けながら、ハザーロフは我知らずうめいていた。

「第四真祖の亡骸は、どこにいった……!?」

部下である動死体たちに、ハザーロフは捜索を命じる。第四真祖の亡骸が　柩の中に囚われていたはずの少女が、いない　見当たらない。

「少年……おまえは……!?」

まさか、とハザーロフが声を震わせる。

あのときリアナの眷獣の暴走で、氷の柩は割れていた。少女の亡骸は柩の外に出ていたのだ。

もしも彼女が、本物の第四真祖だったなら、神に呪われたというその肉体は不滅だ。なにか些細なきっかけで復活しても不思議ではない。些細なきっかけ

たとえば、生け贄となる人間が、自らの血を彼女に捧げたとしたら——？

「それを計算していたというのか!?　銃撃を受けた己の血肉が、第四真祖に降り注ぐことを」

そしてハザーロフはようやく気づく。

氷塊の中に囚われていた少女は、いなくなったわけではない。ただ沈んでいただけだ。

肉片となって飛び散った少年の肉体の下に。彼が流した血溜まりの中に——！

「アヴ……ロー……ラ……」

絶命していたはずの少年が、誰かの名前を呼んだ気がした。

突然噴き出した凄まじい凍気が、遺跡の中を埋め尽くしたのはその直後だ。

「なんだと……おおおおっ……!?」

ハザーロフの顔が驚愕に歪んだ。

傷ついた少年の身体を支えるようにして、血まみれの少女が起き上がる。

粗末な薄衣だけをまとった、妖精のような少女だった。

虹色に輝く彼女の髪は炎のように逆巻き、見開かれた瞳は焔光を放っている。
彼女が撒き散らす冷気を浴びて、凍結した動死体たちが次々に砕けた。
神獣化したハザーロフですら、その壮絶な魔力に圧倒されそうになる。
「無駄だ。本物の第四真祖であろうとも、覚醒したばかりの貴様など我の敵ではない！」
ハザーロフが咆吼した。凝縮した魔力すべてを解放して、最大級の爆炎を放つ。
吸血鬼の眷獣すら一撃で消滅させる、圧縮された魔力の業火だ。
この遺跡の中心にした半径数百メートルは、跡形も残さずに灰になる。ハザーロフ自身、無傷では済まない捨て身の攻撃だった。
だが、その必殺の黒い爆炎を、焔光の瞳の少女は易々と受け止める。
彼女の背後に浮かび上がっていたのは、氷河のように透きとおる巨大な影だった。
上半身は人間の女性に似ており、下半身は魚の姿である。そして背中には翼が生え、指先は猛禽のような鋭い鉤爪になっている。氷の人魚、あるいは妖鳥——
陽炎のように揺らめく異界からの召喚獣だ。
眷獣……だと……!?」
少女が喚び出した眷獣が、黒い爆炎を完全に消滅させた。そして余剰した魔力は、凍気の奔流となって荒れ狂い、神獣化したハザーロフを一瞬で凍結させる。
物質が物質としての形を維持できなくなる、絶対零度以下の負の温度領域まで

「馬鹿……な……これほどの凄まじき力……あっていいはずが……」
ハザーロフが意識を保つことができたのはそこまでだった。
彼の肉体は塵すら残さずに完全に消滅する。そして彼らがいた遺跡も、また——
「古城、君……」
崩壊していく石室の中で、暁凪沙が弱々しく呟く。
すべては白い闇の中へと包まれていく——

9

眩い朝陽に照らされて、暁牙城は目を覚ました。
水平線が青く染まっている。夜が明けようとしているのだ。
牙城の全身は傷だらけだった。愛用の革ジャケットはボロ布のように引き裂かれ、こびりついた血で赤黒く染まっている。血を流しすぎたせいか、ひどく寒い。だがそれでも生きている。
またしても牙城は生き延びたのだ。多くの仲間を死なせて、牙城だけが。
「——気がついたようだな」
硬い岩場に横たわる牙城の頭上から、声が聞こえてきた。どこか舌足らずな女の声だ。
声のするほうを振り返ろうとして、牙城は低くうめき声を洩らした。

指先を動かすだけで全身に激痛が走る。どうやら全身にガタが来ているらしい　それでも牙城は強引に上体を起こして、声の主の姿を確認する。

フリルまみれの豪華なドレスを着た、小柄な東洋人だった。人形を思わせる美しい顔立ちで、髪が長い。早朝だというのに、なぜか日傘をさしている。

若いというよりも幼いと形容するべき顔立ちだが、彼女がまとう気配は、奇妙な威厳とカリスマ性を感じさせた。おそらく見た目どおりの年齢ではないのだろう。

「　―まだ動かないほうがいい。左腕が折れている。もっとも〝死皇弟〟を相手にその程度の傷で生き延びるとは、噂どおりの強運だな、〝死都帰り〟の暁牙城」

憎しみすら覚えている肩書きで呼ばれて、牙城は不満げに舌打ちした。

数々の危険な遺跡から、たった一人で生還してくる　―それが〝死都帰り〟という不名誉なあだ名の由来だ。そんな形で名を知られるのは不愉快だが、事実だから仕方がない。

「その服装……そうか。あんたが南宮那月か。魔族殺しの〝空隙の魔女〟」

意趣返しのつもりで、牙城もわざと相手の異名を口にする。しかしドレス姿の小柄な少女は、ふ、と嘲るように小さく笑っただけだ。そして彼女は、少し哀しげに目を伏せる。

「戦王領域の〝蛇遣い〟からの依頼で、黒死皇派の残党を追っていた。すまん。私がもう少し早く来ていれば、これほどの犠牲を出さずに済んだ」

「いや……この遺跡は結界で魔術的に隠蔽していたからな。見つけられなくて当然だ」

牙城はそう言って力無く首を振る。〝妖精の柩〟の発掘調査は〝戦士領域〟と日本政府の、ごく一部だけが知る極秘計画だ。那月たちを責めるわけにはいかなかった。

「調査団員の生存者は、十二名　地上にいたスタッフの約半分は、無事に避難できた計算だ。貴様が〝死皇弟〟を抑えて、時間を稼いだお陰だな」

落胆する牙城を励ますように、那月が淡々と報告する。

牙城は投げやりに肩をすくめて、かつて遺跡があった方角へと視線を向けた。

巨大な魔力のぶつかり合いによって地下墳墓は陥没し、今や形を留めていなかった。内部の復旧はほぼ絶望的だろう。

「ミス・カルアナは？」

「カルアナ伯の娘か……残念だが――」

「そうか」

牙城は短く溜息をついた。野営地の結界が消滅していた時点で、リアナの死は予想できたことだった。彼女が護衛していた古城や凪沙も、助からなかったということだろう。

「いろいろと世話になったな。礼を言うぜ、那月ちゃん」

乾いた口調でそう言って、牙城は虚ろに笑いながら立ち上がる。

「私をちゃん付けで呼ぶな、暁牙城。それに貴様に礼を言われる筋合いはない」

ハザーロフを斃したのは、あんたじゃないのか？」

牙城は困惑したように訊き返す

那月は無感情な瞳で静かに首を振った。

「私が遺跡に入ったのは、すべてが終わったあとだ。〝死皇弟〟を滅ぼしたのは私ではない」

「だったら、誰が？　ミス・カルアナと相討ちになったとでも……？」

そう言いかけて牙城は戦慄した。

死皇弟、ゴラン・ハザーロフと戦ってリアナは死んだ。だが吸血鬼の貴族である彼女以外に、ハザーロフを斃せる者はいない。たったひとつの可能性を除いては――

「私がやったのは、地下に埋もれていた子どもたちを外に連れ出すことだけだ」

くるくると日傘を回して、那月が挑発的に微笑んだ。

「子どもたち……だと……？」

「十二番目の〝焔光の夜伯〟　アヴローラ・フロレスティーナと名付けたそうだな」

「眠り姫が……目覚めたのか……!?」

牙城が声を荒くして訊いた。さあな、と那月は愉快そうに笑う。

「十二番目が覚醒したという証拠はない。誰が〝死皇弟〟を滅ぼしたのかは不明のままだ。まだ今のところはな」

那月が遠回しな口調で言う。それは彼女が、この状況の危険さを正確に理解していることを示していた。十二番目の〝焔光の夜伯〟の覚醒――それがどういう意味を持つのか、彼女は把

握しているのだ。

暁凪沙は生きているが重傷だ。今はローマの病院に空輸する手配をしている」

那月はそう言って、かろうじて焼け残っていた野営地の一画を指さした。そこでは〝魔族特区〟の医療チームが、仮設テントの下で負傷者の治療にあたっている。

巫女装束を着た東洋人の少女は、半透明の医療カプセルの中で死体のように眠っていた。現場での治療を断念し、仮死状態にして国外の病院に搬送するつもりなのだろう。

「古城はどうなった？　凪沙と一緒にいたはずだ！」

野営地を見回して、牙城が訊いた。治療を受けている負傷者の中に、彼の息子の姿は見当たらない。

「少年は無傷だよ。今は眠っているだけだ」

那月はどこか物騒な笑顔で、美しく目を細めた。牙城の全身から血の気が引く。

「無傷？」

「そうだ。銃撃を浴びて、肺と心臓を含めた全身の大部分を吹き飛ばされた痕跡が残っているにもかかわらず、な」

「なん……だと!?」

――十二番目の〝焔光の夜伯〟と、暁兄妹。この二人は、極東の〝魔族特区〟で預かる。戦王領域にもその条件で納得させた。文句はないな、暁牙城」

「極東の〝魔族特区〟……!?　絃神島か……！」

ようやく那月の真意を悟って、牙城がうめいた。絃神島は太平洋上に浮かぶ人工島。日本政府が管轄する特別行政区だ。そして〝空隙の魔女〟南宮那月の本拠地でもある。

欧州から遠く離れた絃神島に連れ帰れば、〝戦王領域〟や、ほかの真祖たちの〝夜の帝国〟も、おいそれとは手が出せない。十二番目に対しても、暁兄妹に対しても――

「随分と手際がいいじゃねェか、〝空隙の魔女〟――」

牙城が忌々しげに呟いた。南宮那月は、ふふん、と得意顔で笑う。

「〝聖殲〟がらみだ。私とて多少は無理もする。貴様にとっても悪い話ではないはずだが？　不満か、暁牙城？」

「……いや。あんたの思いどおりになるのは癪だが、ほかに選択肢はなさそうだ」

牙城は疲れたような口調でそう言うと、焼け焦げた中折れ帽を拾い上げた。

そして那月に背中を向ける。

「どこに行く気だ？」

那月が軽く眉を上げて訊く。牙城は振り返りもせずに、折れたままの左腕を気怠く振った。

「……このままじゃガキどもに合わせる顔がなくてな。あんたは信用できそうだ。悪いが、もうしばらくあいつらの面倒を見てやってくれ」

「探すつもりか？　子どもたちを救う方法を」

那月の質問に牙城は立ち止まり、白嘲するようにクッと頬を引き攣らせて笑った。
「調べ物は得意なんだよ……学者だからな」
ふらつく身体を引きずるようにして、牙城が再び歩き出す。
那月も彼を引き止めようとはしなかった。
やがて眩い陽光の中に男は姿を消した。
硝煙の臭いを乗せた風が、傷ついた岩場を吹き抜けていく。
それが十二番目の〝焔光の夜伯〟と、幼い兄妹の最初の出会い
そして新たな悲劇の前奏曲だった。

第二章
仮面の真祖
Shadow Of Another Kaleido-Blood

1

狭い路地には、錆びた鉄と潮の臭いがこもっていた。
無秩序に建物がひしめく廃墟のような街並み。ビルの壁はひび割れて、内部の鉄骨までもがあちこち剝き出しになっている。シャッターは醜い落書きに埋め尽くされて、割れていないガラスを探すほうが困難だ。
しかしそんな薄汚れた街は、退廃的な享楽を求める、大勢の酔客たちで賑わっていた。
女を漁りに来た男たちと、そんな男たちが目当ての街娼。酒と非合法な薬品に溺れた重度の中毒者。血と暴力と金の臭いを敏感に嗅ぎつけ、集まってきたはみ出し者たち——
最先端の学究都市〝魔族特区〟にあるまじき、異端の街。
ある意味それは、当然の結末だったのかもしれない。
その街の名は、紘神島二十七号廃棄区画。不慮の事故で海に沈んだ人工島・旧南東地区の跡地——地図からも消された〝抹消地区〟なのだから。

そんな〝抹消地区〟の猥雑な路地を、一人の男が歩いている。
長身の美しい青年だった。

彼が着ているのは愛用の白いコートではなく、黒革のライダースジャケットだ。この街の雰囲気から、それほど外れているわけではない それでも青年の姿はひどく目立っていた。混じり気のない金髪と端整な顔立ち ——そして、彼の動作から滲み出る洗練された気品が、石ころに混じった金貨のように人々の視線を惹きつける。
「待てよ、兄ちゃん」
街に入って数分も経たないうちに、青年は、暴力的な男たちの一団に囲まれていた。異分子を排除しようとする街の住人たちの本能が、生々しい敵意となって彼に向けられている。
「こんなところに何の用だ。ママと喧嘩して家出してきたのか？」
逃げ道を塞ぐように、彼の背後からも声がする。気づけば青年を包囲する住人は、十人近くにも膨れ上がっていた。
しかし青年はそれを気にもせず、ただ鬱陶しげに住人たちを一瞥する。
その静かな眼差しに気圧されたように、住人たちが後ずさった。
何事もなかったかのように青年は再び歩き出し、住人たちは無言でそれを見送る。
やがて青年の姿が見えなくなると、人々は一様に大きな溜息をついた。
理性の乏しい暴力的な人種であるゆえに、彼らは本能的に察知していたのだ。
金髪の青年がその気になれば、一瞬で自分たちが消滅させられていたことを。
そして自分たちが生き長らえたのは、彼の気まぐれに過ぎないということを。

青年が向かったのは、一軒の薄汚れた酒場だった。
流行っている店ではなかった。廃ビルを利用した店内に、客の姿は数えるほどしかない。店に漂っている異臭は、南米に自生するサボテンを主原料にした麻薬の臭いだ。普通の人間が摂取すれば、ごく微量で中毒死するという強烈な幻覚剤は、薬剤耐性を持つ魔族に対しても十分な効果を発揮する。
カウンターの奥には、店主らしきバーテンダーがいた。
彼の身長は二メートルを超えており、筋肉の付き方も明らかに普通の人間とは違う。ギガスなどと呼ばれる希少種の魔族。〝魔族特区〟や夜の帝国でも、滅多に見かけることのない巨人種族である。
「見ない顔だな」
低音楽器の響きに似た太い声で、店主が青年に声をかけてくる。その言葉は意外に、帰れ、と告げているように思われた。
しかし青年は平然と店主に歩み寄り、カウンターの上に紙幣の束を置いた。おそらくこの店の半年分の売り上げを余裕で上回る額である。
「このあたりに若い女の吸血鬼が匿われてると聞いた。よかったら紹介してくれないかな」
金髪の青年が静かに聞いた。

優雅な気品を滲ませつつも、どこか皮肉っぽく響く声だ。
「知らねえな、そんな話」
店主は札束を受け取りつつ、無愛想に首を振る。
ふ、と青年は微笑んだ。その唇の隙間からかすかに覗いたのは、鋭い牙だ。
ふと気づけば、店の奥で飲んでいた二人組が、青年を挟みこむようにカウンターに歩み寄っていた。彼らの身長も店主と同様に二メートルを超え、おそらく体重は四百キロに迫る。まるで筋肉の壁のような、凄まじい威圧感である。
「――帰ンな。この店は巨人族の貸し切りだ」
恫喝めいた口調で、巨人種族の一人が言う。しかし青年は、平然とその警告を聞き流した。
「手間賃が足りなかったかい？　これならどうかな？」
そう言って青年がカウンターに置いたのは、北帝クローネと呼ばれる硬貨十数枚だった。額面は日本円にして十万円以上。北海帝国領で使われているこの銀貨には、偽造を阻止するための特殊な術が施されており、特に犯罪組織間の取り引きで利用されることが多い。
店主は思わず銀貨に手を伸ばそうとするが、怒声を上げてそれを遮ったのは客たちだ。
「俺たちを無視するとはいい度胸だ、若造！」
「それとも特区の中にいれば、巨人族が大人しくしてるとでも思ったか？」
右側の巨人が青年の胸ぐらをつかんで、そのまま彼を持ち上げようとする。

青年の体重は、おそらく巨人たちの二割にも満たない。しかし彼の表情に焦りはなかった。逆に片手で巨人の腕を押さえつけ、巨人たちが嵌めた腕輪を眺める。

人工島管理公社が支給する魔族登録証　それは市民として登録された魔族たちの身分証であると同時に、彼らを監視する枷だった。魔族たちが紘神市内で暴力事件を起こせば、その情報はただちに特区警備隊へと伝達される。

しかし巨人たちが激昂しているにもかかわらず、魔族登録証は反応していない。

「へえ。魔族登録証の接続インフラが駄目になっているのか」

金髪の青年は、そう言って悠然と周囲を見回した。

どうやら〝抹消地区〟であるこの区画には、魔族登録証の圏外となる、電子的な死角があるらしい。つまり、この街で魔族が暴力を振るっても、誰もそれに気づかない、ということだ。たとえその結果として誰かが死んだとしても――

「存在しないはずの街とはいえ、こんな場所が残っていると知られたら大問題だな」

「わかったら、とっとと消え失せろ。それともこのまま絞め殺されるか？」

「……なにをそんなに焦っているんだい？」

「なに!?」

笑いを含んだ青年の声に、二人の巨人たちの表情が凍った。

男の胸ぐらをつかんでいたはずの巨人の腕が、あっさりと引き剝がされていく。青年は、たいして力を入れているとも思えない。だが、ギシギシと骨を軋ませ、力負けしていたのは巨人種族のほうだった。

金髪の青年の瞳は真紅に染まり、伸びた牙が刃のように輝いている。

「吸血鬼か!?　だが、この力……！」

ついに完全に突き放されて、巨人はよろよろと後退した。

その間に、左側にいたもう一人が、背中から武器を抜いていた。巨人種族にとっては単なるナイフだが、普通の人間から見ればその刃渡りは大剣と変わらない。

「おまえ……ディミトリエ・ヴァトラーか!?　〝戦王領域〟の戦闘狂――！」

「それがわかっていて剣を向けるのか。なるほど、ただのチンピラじゃないな」

巨大なナイフを構えた巨人を、金髪の青年――ヴァトラーは愉快そうに微笑んで見上げる。

そんなヴァトラーの長身が、突然ぐらりとよろめいた。

コンクリート製の建物の床が、彼の周囲だけ陥没したように歪んでいく。

店内の大気が重苦しく軋んでいるのは、急激に気圧が変化しているせいだろう。その変化は、やがてビルの壁や柱にも無数の亀裂を入れていく。

「精霊の力を操る巨人族の武器か――さすが、亜神の末裔を自称するだけのことはある」

全身を襲う凄まじい重圧に耐えながら、ヴァトラーは平然と呟いた。

巨人種族の武器となるのは、巨体を支える筋力だけではない。不毛な砂漠や山岳地帯などの

過酷な環境に適応した代償なのか、彼らの肉体は極めて精霊と相性がいい。すなわち巨人種族の多くは、先天的な精霊遣いなのだ。

そして巨人たちは古代から、採鉱や金属加工、鍛冶の技術に秀でた種族でもあった。

そんな彼らが造り出した武器は、精霊の力を借りて、高等魔術を凌駕する様々な異変を引き起こす。アルディギア王国の疑似聖剣も、彼ら巨人種族の武器を参考に生み出されたものなのだ。

巨人種族の男がヴァトラーに対して使った短剣も、そのような魔器のひとつだった。

重力を操る、凶悪な魔剣。百倍の重力はヴァトラー自身の肉体に重さ数トンの負荷をかけ、わずか十センチの落差を、高度十メートルからの落下の衝撃へと変える。

しかもその超重力の影響範囲は、攻撃対象であるヴァトラーが立っている場所だけ。二人の巨人は、魔剣の効果とは無関係にヴァトラーを攻撃することができるのだ。

超重力の負荷に耐えるヴァトラーはさすがだが、今の彼が攻撃を避けられるはずはない——巨人たちが自分たちの勝利を確信した、その直後だった。

「……ぐ……がっ!?」

ゴッ、と巨大な鉄槌で殴られたような衝撃が、二人の巨人を吹き飛ばした。

ヴァトラーは、まだ脊獣すら召喚していない。ただ抑えこんでいた体内の魔力を一気に解放しただけだ。だが、その爆発的な威力は重力攻撃をあっさりと無効化し、巨人種族を打ちのめした。それどころか老朽化した酒場の外壁を爆砕し、崩落した天井の破片が店内に降り積もる。

「ぐっ……狂犬め……」

血まみれで倒れた右側の巨人が、憎々しげにそう呟いて意識を失った。左側の巨人はさらに傷が深い。ヴァトラーの反撃を少しでも防ごうと、最後まで魔剣を使い続けた反動だ。

もうもうと立ちこめる粉塵の中、無傷で立っていたのはヴァトラーだけだった。

そしてもう一人、酒場の店主が、カウンターの奥に呆然と立ち尽くしている。

最後まで戦意を喪失しなかった二人の巨人を、ヴァトラーは満足げに一瞥した。そして、

「さあ、質問の続きをしようか——」

相手を凍りつかせるような真紅の眼差しを、震える店主へと向けて酷薄に笑う。

彼女は、壊れかけたビルの屋上に佇んでいた。

白いフードを被った外国人の少女だ。すらりと伸びた脚は透きとおるように白い。身じろぎもせずに海を眺めるその姿は、美しくも儚いガラス彫刻のようだった。

少女の足元に広がる海面は、月光を反射して、まるで夜空のようにも見える。

そして暗く透明な海の底には、広大な廃墟が沈んでいた。

彼女はその水底の街を、一人きりで見つめていたのだ。

「――人工島・旧南東地区、半年前に沈んだ悲劇の街だよ」

少女に向かって呼びかけたのは、半壊した階段を上ってきたヴァトラーだった。

いつもと同じ気障な口調だが、その言葉の端々には、冷え冷えとした殺意がこもっている。

怒りの原因は、少女の居場所を突き止めるのに予想外に手間取ったことではない。

彼女がこの場所に立っているという、その事実こそがヴァトラーを不愉快にさせているのだ。無関係の余所者が、足を踏み入れていい場所ではない。

「やはり、来たか。ディミトリエ・ヴァトラー……」

しかし白いフードの少女は、振り返りもせずにそう呟いた。

ヴァトラーが口元に笑みを浮かべる。少女は、ヴァトラーがここに来ることを知っていた。つまり戦闘になる可能性をも覚悟しているということだ。

「誰だい、キミ。いつから紘神島に潜りこんでいた？　こんなところでなにを調べている？」

ヴァトラーが静かに少女に訊く。

彼女は正規の紘神市民ではない。不法滞在の未登録魔族だ。だが、その一方で彼女は〝抹消地区〟と、海底に沈められた人工島・旧南東地区の存在を知っていた。あまりにも紘神島の事情に詳しすぎるのだ。

それどころか命を懸けてまで、彼女を匿おうとする協力者までもが存在する　ありプライドの高い巨人種族が、単なる吸血鬼の少女に対して忠誠を誓うとは考えづらい

「余に構うな」

そんなヴァトラーの疑念を、少女は軽く一蹴した。

「今宵の余は寛大だ。特別に見逃してやろう。去ね、蛇遣い」

「いいね。愉しませてくれるじゃないか――こっそり船を抜け出して来た甲斐があったよ！」

ヴァトラーの相好に喜色が浮いた。彼の背後にゆらりと浮かび上がったのは、巨大な眷獣の影だった。相手が同じ吸血鬼であるなら、ヴァトラーが眷獣を出し惜しむ理由もない。

「ふむ、余の忠告は聞けぬか。それもよかろう」

ローブの裾を翻しながら、少女がゆっくりと振り向いた。

話が早いな、とヴァトラーは笑う。少女はヴァトラーとまともに戦うつもりでいるらしい。戦闘狂の彼にとっては願ってもない状況だ。最悪、彼女を喰らって情報を引き出せば済むからだ。

「――〝難陀〟！　〝跋難陀〟！」

ヴァトラーが喚び出した眷獣は二体。それらを融合させることで、魔力を数倍にも増幅した新たな眷獣を創り出す。灼熱の炎をまとった、鋼色の龍。真祖の眷獣にも匹敵する膨大な魔力が、廃棄された人工の大地を揺るがし、周囲の海面を激しく波打たせた。

「おう……！」

少女が感嘆の吐息を洩らす。ヴァトラーが最初から融合眷獣を使った理由はふたつ。圧倒的な力の差を見せつけることで、相手の戦意を奪うため。そしてもうひとつは、未知の力量を持つ敵に対しては最大の攻撃をぶつける、という戦術の基本を忠実に実行するためである。

たとえ儚げな少女が相手でも、ヴァトラーが敵を侮るようなことは決してない。

そして結論からいえば、ヴァトラーの命を救ったのは、彼のその純粋な闘争心だった。

「それが噂に聞く融合眷獣か。たしかに凄まじい威力よな」

融合眷獣の攻撃が少女を襲う　その瞬間、少女は右手を掲げ、その攻撃を無造作に払いのけていた。自らの攻撃と同等の衝撃を浴びて、融合眷獣が消滅する。

「ぐ!?」

激突の余波に、ヴァトラーがうめいた。

実体化を維持できなくなった融合眷獣が分離して、そのまま異界へと戻っていく。

少女はヴァトラーの攻撃を防いだのではない。その逆だ。激突の瞬間、少女が放った凄まじい魔力を、かろうじてヴァトラーの眷獣が相殺した。融合眷獣の威力をもってしても、少女の攻撃に耐えることしかできなかったのだ。

「馬鹿な……キミは……」

「なにを驚く？　世界最強の吸血鬼たる余が、貴様の攻撃を防ぐのが意外か？」

動揺するヴァトラーを愉快そうに見返して、少女が告げる。

爆風でフードがめくれたせいで、彼女の素顔があらわになっていた。
妖精めいた美貌を持つ十四、五歳ほどの少女だった。腰まで届く長い金髪が、光を反射して虹色に色を変えていく。そして彼女の大きな瞳は、炎のように青く輝いていた。
「どうした、蛇遣い？　よもや余の顔を忘れたか？　それとも死んだはずの余がここにいるのが、それほどまでに面妖に思えたか？」
「焔光の瞳……アヴローラ・フロレスティーナ……だと!?」
ヴァトラーが、ギリと奥歯を鳴らした。彼の全身から放たれたのは、これまでよりも桁違いに濃密で、破壊的な魔力の奔流だった。
同時に召喚された二体の蛇が、四肢を持つ金色の龍へと形を変えていく。その龍が撒き散らす瘴気だけで大気は毒に変わり、周囲の草木が茶色く枯死して崩れ落ちた。
「三体融合か……面白い」
くふっ、と小さく息を洩らして、少女は子どものように無邪気に笑う。
「余の姿を見ただけで逆上するとは　―叮愛いところがあるじゃないか、ヴァトラーの坊や」
「――ボクの前にその姿をさらした以上、手加減の必要もないだろう。悪いが、それなりの代償は払ってもらおう」
一切の感情を排した冷徹な声で、ヴァトラーは宣告した。
先代の第四真祖　アヴローラ・フロレスティーナが、彼の前に現れることはあり得ない。

暁、古城が、すでに第四真祖の力を受け継いでいるからではない。
アヴローラはもう存在しない。存在することができない理由があるのだ。
だが、それすらもヴァトラーにとっては些細な問題だ。
目の前の少女が、本物のアヴローラ・フロレスティーナであるか否かはどうでもいい。
彼女が真の第四真祖であるならば、ヴァトラーの攻撃にも耐えるだろう。そして偽者ならば彼女はここで死ぬ。ただそれだけの簡単な理屈だ。
混乱の中で、ヴァトラーは一瞬の遅滞もなく、その冷酷な判断を下した。
「ふむ」
そんなヴァトラーを賞賛するように、少女が鋭い牙を剝いて笑った。
巨大な融合眷獣を従えて、ヴァトラーは彼女へと突撃する。
吸血鬼の貴族という枠組みを超えた凄まじい魔力が、彼を取り巻いていた。格上の〝長老〟たちを何体も屠ってきたという実績は伊達ではない。今のヴァトラーを阻める者がいるとすれば、それは本物の真祖だけだろう。
夜の帝国の王座に君臨する二人の真祖か、あるいは存在すらも定かではない第四の真祖のみ――
「やはり最初におまえを排除することにしたのは正解だったか、蛇遣い」
そして焔光の瞳を持つ少女は、愉しげに目を細めて独りごちた。

次の瞬間ヴァトラーが見たのは、凄まじい速度で遠ざかる彼女の姿だった。
否、遠ざかっていたのは少女ではない。ヴァトラーと彼の眷獣だけが、彼らが本来いるべき世界から切り離されていく。視界は闇に包まれてなにも見えない。音も匂いも重力すら消失し、やがて彼自身の存在すら知覚できなくなる。
「……空間制御……いや、この空間そのものが眷獣なのか!?」
自分が置かれている状況を把握できたのは、ヴァトラーの持つ膨大な戦闘経験の賜物だった。
少女に攻撃を仕掛ける前に、ヴァトラーは逆に彼女の攻撃を受けていたのだ。
空間そのものを実体とする眷獣――
無限の広がりを持つ闇の世界。今やその世界自体が少女の武器なのだ。
さすがのヴァトラーも戦慄を禁じ得ずにいる。そのような眷獣を操る者が実在するならば、それはまぎれもなく真祖以外にはあり得ない。
「命までとろうとは思わぬ。余の用が済むまで、しばしここで傍観していてもらおう」
闇に囚われたヴァトラーの脳裏に、少女の声が直接聞こえてくる。苦笑を含んだその響きに、敵意は感じられなかった。
「そうか、キミは　いや、あなたは最初からこれが目的だったのか。〝戦王領域〟の監視から古城を切り離すことが」
ヴァトラーが溜息混じりに呟いた　普段の彼ならば決して見せることのない、どこか拗ねたような表情だ
「悪く思うな、ディミトリエ・ヴァトラー。おまえが第四真祖に執着する理由はわかる。が、あの少年に興味があるのは、〝忘却の戦王〟だけではないのでな」
少女が不意に口調を変えた。愉快そうでいて、どこか真摯にも感じられる声だった。
広大な闇の中を漂いながら、ヴァトラーは冷ややかに忠告する。
「この貸しは高くつきますよ――」
「覚えておこう、ディミトリエ・ヴァトラー――懐かしき我が盟友よ」
からかうような口調でそう言い残し、少女の気配が遠ざかっていく。
闇の中には吸血鬼の貴族が、ただ一人きりで残された。

2

十一月も終わりに近づいた木曜日――
暦の上では晩秋だが、亜熱帯に位置する絃神島には今日も強い陽射しが降り注いでいる。
その朝、世界最強の吸血鬼である暁古城の安眠を妨げたのは、自宅の玄関チャイムの音だった。どこか軽快な電子音が、何度もしつこく家中に鳴り響く。
布団を被って聞こえないふりを続けてみたが、さすがにそれも限界だった。

古城はのろのろと身体を起こし、ベッドサイドの目覚まし時計に手を伸ばす。

「客……か」

カーテン越しに射しこむ陽光が、無防備な古城の肌を焼く。ダメージというほどのものでもないが、むず痒く感じる程度の不快感はあった。薄い膜が張ったように、頭がぼんやりとして働かない。吸血鬼化した今の古城の肉体は、どうしようもなく寝起きが悪いのだ。

誰だよ、こんな平日の朝っぱらから……いったい何時だと思って……」

恨みがましく呟きながら、古城は時計の文字盤を覗きこむ。直後、彼の喉から洩れたのは、自分でも制御不能の間抜けなうめき声だった。

「ぬおおおおおおっ!?」

時計の針が示していたのは、普段の起床時間を一時間ばかり過ぎた、あり得ない角度だ。このままでは確実に遅刻する。今すぐマンションを出ても果たして間に合うかどうか。

「ひ、姫柊か!?」

古城は慌ててベッドから飛び降り、インターホンの受話器を取った。

『おはようございます、先輩』

玄関のマイクから聞こえてきたのは、生真面目そうな少女の声だ。彩海学園中等部二年生の姫柊雪菜　獅子王機関なる組織から派遣されてきた、古城の監視者の声である。

焦りまくる古城とは対照的に、雪菜の口調は平静だった　国家公認ストーカーであるところの彼女は、謎の呪術によって常に古城の行動を監視している。古城が寝坊したことも、雪菜は最初から知っていたのだ。そしてギリギリまで待っても起きてこない古城に業を煮やし、チャイム連打の暴挙に及んだのだろう。

「悪い、寝過ごした。俺は今から準備するから、姫柊は先に行っててくれ」

玄関の前で待っている雪菜に、古城はいちおう提案してみる。優等生である彼女まで遅刻につき合う必要はないだろう、と古城なりに気遣ってみたのだが、

『いえ、待ってます』

雪菜はすげなくそう言った。

「だけどそれだと姫柊まで遅刻するかもしれないんだが――」

『一時間目の授業はサボろうって思ってませんか、先輩?』

雪菜に的確に指摘され、古城は、うぐ、と言葉に詰まる。今から慌てて準備した挙げ句に、結局遅刻するよりも、最初から遅刻と割り切ってのんびり登校したほうが結果的に被害が少なくて済むのではないかと思ったのだが――

『なるべく早く準備してくださいね。それまでずっと待ってますから』

有無を言わせぬ口調で断言されて、古城はそれ以上の抵抗を諦めた。心なしか最近の雪菜の言動は、ストーカーぶりに拍車がかかってきたような気がしてちょっと恐い。

インターホンの受話器を置いた古城は、そのまま妹の部屋へと向かう。いつもなら寝坊した

古城を叩き起こすのは彼女の役目だ　その彼女が寝坊するのはめずらしい。

「凪沙、入るぞ！」

わざと乱暴にノックしながら、古城は妹の部屋のドアを開けた。

いかにも片付け魔の彼女らしい、整理整頓の行き届いた個室。壁際に置かれたベッドの上で、寝乱れたヘソ出しパジャマ姿の暁凪沙が顔を上げる。

「ん……古城君……どうしたの？　恐い夢でも見た？」

「朝だ。起きろ」

目をこすりながら訊いてくる凪沙に、古城は平坦な声で告げた。

「え？」

ごろん、と百八十度回転しながら、壁掛けのデジタル時計を見上げる凪沙。そして彼女は、いきなりカッと目を見開いて、

「わ、嘘!?　なんで!?　どうしてもっと早く起こしてくれなかったの!?」

「俺も今起きたとこなんだよ。急いで着替えろよ、遅刻するぞ」

「そ、そっか。そうだよ！」

甲高い悲鳴を上げながら、バタバタとベッドから転がり落ちる凪沙。寝癖つきの長い髪をバサバサと振り乱し、ハンガーに掛けた制服を取りに行く。

一方の古城は、朝メシは抜きだな、などと呑気に考えつつ、自分の部屋に戻ろうとして、

「あ、そうだ、表に姫柊を待たせてるから　―」

「ひゃあっ!?」

妹の部屋を出て行く直前、急に振り返った兄に驚いて凪沙が絶叫する。

ふと見れば、凪沙はパジャマのズボンを脱ぎかけだった。遅刻寸前でよほど焦っていたのか、古城が部屋を出て行く前に着替え始めていたらしい。

慌てふためく凪沙は、足首にパジャマを巻きつかせたまま振り返ろうとしてバランスを崩し、そのまま前のめりに転倒した。ちょうど古城の立ち位置からは、突き出されたパンツが丸見えになる体勢である。

「ちょ、なんで見てるの!?　古城君のスケベ！」

ベッドにぶつけた額を押さえながら、更に大声で騒ぎ立てる凪沙。

なんでそうなる、と古城は思わず目を剝いて、

「俺が悪いのかよ!?　ドア閉める前におまえが勝手に脱ぎ始めたんじゃ　―」

「うるさいです！　いいから出てけーっ！」

体勢を立て直した凪沙に縫いぐるみを投げつけられながら、古城は妹の部屋を後にする。

彩海学園の校舎が見えてきたのは、ギリギリ始業時刻の前だった。

通学路には、まだちらほらと登校中の生徒たちの姿が残っている。なんとか遅刻は免れそう

だと判断して、古城たちは走る速度を落とした。

「どうにか間に合いそう……だね」

ぜえぜえと息を切らせながら凪沙が言う。さすがの彼女も、起き抜けの全力疾走はこたえたらしい。普段は結い上げている髪も今日は下ろしたままで、しきりに寝癖を気にしている。

「でも、めずらしいね。凪沙ちゃんが寝坊するなんて」

黒いギターケースを背負った雪菜の表情は、凪沙とは対照的に涼しげだった。同じ距離を走ってきたはずなのに、呼吸ひとつ乱していない。獅子王機関の剣巫として鍛えられている雪菜にとって、おそらくこの程度では運動したうちにも入らないのだろう。

もっとも自分の正体を隠している古城にしてみれば、監視役である雪菜にも、もう少し普通の女子中学生らしく振る舞って欲しいところではあるのだが――

「目覚まし時計を止めたあと、二度寝しちゃったみたいなんだよね。普段は滅多にそんなことやらないんだけど。ほら、サルも木から落ちる的な――って、誰がサルやねーん！　あ、ちなみにサルと類人猿の見分け方はね、尻尾があるのがサルで類人猿には尻尾がないんだって。あと類人猿で泳げるのはヒトだけなんだって。これ豆知識ね。あとね――」

「やめとけ、凪沙。姫柊が固まってる。てか、ウザい」

一人で勝手にボケてツッコミまで入れる妹の頭頂部を、古城が軽く叩いて黙らせる。比較的よく出来た妹である凪沙の数少ない欠点が、この口数の多さだった。どうやら寝坊のショックから立ち直って、いつもの調子が戻ってきたらしい　むしろ、いつもよりテンションが高い。

「そうそう、もうすぐ冬休みだね」

意味もなく空を見上げながら、凪沙が唐突に話題を変えた。常夏の絃神島にいるせいで今ひとつ季節感がわかないが、十一月も終わりが近い。あとひと月足らずで冬休みだ。

「そうだな……そういえば姫柊って正月はどうするんだ？」

漠然と不安を覚えて、古城は雪菜に訊いてみる。獅子王機関はもしかして年末年始も関係なく、雪菜に古城の監視を続けさせるつもりなのだろうか。

「お正月、ですか？」

「あー……つまり、ニャンコ先生たちのとこに戻ったりはしないのか、って意味だけど」

「いえ。今のところ特になにも決めていませんが」

そう言って雪菜は古城を見上げる。この反応を見る限り、やはり彼女は、冬休み中も古城の監視任務を続行するつもりだったらしい。ちなみにニャンコ先生とは、雪菜の師匠に当たる魔術師の名前だ。古城が勝手にそう呼んでいるだけではあるのだが。

「先輩たちのご予定は？」

「そうだな……公社の許可が降りるなら久々に祖母さんに会いに行きたいとこだけどな」

古城がぼそりと呟くと、凪沙が、わ、と賛同するように声を上げた。

「行きたい行きたい。もう四年も会ってないしね。お祖母ちゃん、元気かな」

懐かしそうに呟く凪沙を見て、雪菜が怪訝そうに首を傾げた。
「先輩たちのお祖母さまというのは……」
「ああ。丹沢の山奥にある小さな神社で神職みたいなことをやってるんだ」
「神職……ですか」
雪菜は少し驚いたように目を瞬いた。古城は苦笑混じりに顔をしかめて、
「凪沙はずいぶん可愛がられてたけど、けっこう強烈な年寄りでな――……怒らせると恐いというか、昔は未登録の攻魔師みたいなこともやってたって噂もあってさ」
「え……？」
雪菜が表情を硬くして立ち止まる。つられて古城も足を止め、その背中に激突してきたのは凪沙だった。ぼんやり歩いていたせいか、古城が立ち止まったことに気づかなかったらしい。
「痛ったぁ！」
「なにやってんだ、おまえ」
「うー……古城君が急に止まるから……！」
派手に尻餅をついたままの姿勢で、凪沙が不満げに古城を睨め上げてくる。寝坊したことでケチがついたのか、今日の凪沙はやたらと転びまくる運命らしい。
そんな妹に手を貸して起き上がらせながら、
「……で、なんか学校の周りが騒がしい気がするんだが、なんだ、あれ？」

古城は、校門前に駐まっている車を眺めて、眉をひそめた。紘神島ではあまり見かけない、欧州製の高級車。黒塗りの装甲リムジンである。
「なにか……事件でしょうか？」
雪菜が不安そうな口調で呟いた。たしかに彼女の懸念もわかる。あんな銃撃戦の似合いそうな車を学校に乗りつけて来るような人種が、堅気の一般人とは思えない。
「俺は関係ない……よな」
「だと、いいんですけど」
互いに顔を寄せて、頼りなく呟き合う古城と雪菜。そんな二人の心配をよそに、リムジンから降りた人影に気づいて、校庭にいた生徒たちの間にどよめきが広がる。
野次馬として集まってきた彼らが、リムジンの姿を覆い隠していく

3

苦労して登校してきたにもかかわらず、一時間目の授業は自習だった。
当初の予定になかった短期留学生がまとめて七人もやってきた、ということで学校側も混乱し、朝の職員会議が長引いているらしい。校門前の装甲リムジンは、その留学生たちを乗せてきた送迎車だったのだ。そんな物々しい警戒態勢で登校してきた留学生の存在は、当然のよう

に教室でも話題になっていた。

「……オシアナスガールズ？」

雪菜たちと別れて教室に辿り着いた古城は、そんな名前を聞かされて戸惑った。耳馴染みのない集団名だ。

「最近、動画投稿サイトなんかで流行ってる女性ボーカルユニットなんだけど、知らない？〝戦王領域〟出身の五人組」

藍羽浅葱が、愛用のピンクのタブレット端末を取り出して、古城の前に差し出してくる。

画面に映し出されていたのは、可愛らしい衣装に身を包んだ外国人の女性グループだった。

年齢はローティーンから、十代前半くらいまで。どこかで会ったことがある気がするのだが、それがどこだったのかは思い出せない。

「歌と踊りは素人臭いんだけど、五人とも日本人ウケのいい美少女って感じでしょ。雑誌でもよく取材されてるわよ」

「ちなみに俺のイチオシは黄色の子な」

勝手に話に割りこんできた矢瀬基樹が、訊かれもしないのにそう言って、左端のいちばん小柄な少女を指さした。ついでに裏声でノリのいいテクノポップを歌いながら、カクカクとしたダンスを踊り始める。歌はアレだが、踊りは意外にそれっぽい感じだ。

矢瀬の意外な才能に、古城はわりと本気で感心して、

「ああ、そういや最近、あちこちで流れてる気がするな、その曲」

「ていうか、基樹。あんたモノマネ上手すぎ。キモい」

「なんでだよ!? 上手いんだったらいいじゃねーかよ！」

本気で傷ついたように涙目になって抗議する矢瀬。実際、少し気持ち悪くもあったのだが、

「で、そのボーカルユニットさんが、なんで彩海学園なんかに留学してくんだよ？」

タブレットの画面を眺めたまま、古城は訝しげな表情を浮かべて訊いた。

「知らない。偶然なんじゃないの？」

浅葱が投げやりな口調で答えてくる。矢瀬もしつこく踊り続けながらうなずき、

「ちょっと時期はずれな気もするけど、紘神島に夜の帝国からの短期留学生が来るのは、べつにめずらしくねーからな。たまたま今回はネット有名人だったってだけで」

「まあ、そういやそうか」

古城は気の抜けたような表情で息を吐く。有名人とはいえ、主に動画投稿サイトで活動しているということは、基本的にはアマチュアなのだろう。彼女たちが普通に学校に通うのも、それほど奇妙な話ではない。〝戦王領域〟からの留学生を受け入れるのは、〝魔族特区〟内の教育機関だけなのだから、留学先として彩海学園が選ばれたことは確率的にも妥当だった。

だが、それはそれとして、古城が無意識に感じているこの不安はなんなのか――

「あ、いたいた。古城様ーっ！」

そんな古城の予感を裏付けるように、見慣れない少女たちの一団が、明るい声を上げながら教室に雪崩れこんでくる。彩海学園の制服を着た外国人の五人組だ。

仲のいい姉妹のような雰囲気だが、顔立ちや髪の色に統一感はない。共通点といえるのは、彼女たちが全員やたらに美人ということだけだった。生まれの高貴さを感じる種類の美貌だ。

「お久しぶりです、古城様！」

「お、お会いしたかった……です」

ほかのクラスメイトたちには目もくれず、五人は古城を包囲して熱烈な親愛の言葉を口にする。古城は唖然と目を見開いたまま、石像のように固まっていた。

「オシアナスガールズ……!?」

クラスの誰かが、ぼそりと小声で呟いた。それが引き金になって、教室内に驚きと嫉妬混じりのざわめきが広がっていく。

「え？　嘘？　本物？」

「やべえ、予想以上に可愛い」

「でも、どうして暁くんと……？」

「……また古城か！」

「……」

クラスメイトたちの好奇の視線に晒されながら、古城はダラダラと冷や汗を流す。

オシアナスガールズとやらの正体を、古城はようやく思い出していた。彼女たちは〝戦王領域〟周辺諸国の王族や重臣の娘たちだ。もともとは祖国の安全と引き換えにディミトリエ・ヴァトラーに預けられた〝人質〟だったらしいのだが、戦闘狂のヴァトラーは人質にも女にも興味がなかったため、彼女たちを単なる客人として扱っていた、と聞いている。

それどころかヴァトラーは、古城の眷獣を覚醒させるための餌として彼女たちを利用しようとしている素振りがあり、彼女たちは彼女たちで、第四真祖の力を下克上の道具として利用しようと狙っている　―そんなわけで古城は、彼女たちがひどく苦手なのだった。

「古城、この子たちと知り合いなの？」

当惑している古城を睨んで、浅葱が不機嫌そうに訊いてくる。古城はぎこちなく首を振って否定した。

「い、いや……知り合いってほどの知り合いじゃないんだが」

実際問題、彼女たちがどうしてここにいるのか古城にはさっぱりわからない。ヴァトラーのクルーズ船〝オシアナス・グレイヴⅡ〟で、何不自由なく優雅な船上生活を送っているのではなかったのか？

「えー……ひどいです、古城様！」

五人組のリーダー格らしき金髪が、そう言って古城の腕にしがみついてきた。彼女はおそらく、十歳前後のはずだが、案外制服が似合っている。しかしさすがに既製品では彼女のグラマ

ラスな体型に対応しきれなかったらしく、ただの制服がやたらエロく見えるのは問題だった。
そんな魅惑の制服姿で、彼女は古城にそっと腕を絡ませて、
「私たち、一緒にお風呂にも入った仲じゃないですか！」
「い、一緒にお風呂!?」
浅葱が声を裏返らせて叫び、教室中がどよめきに包まれた。古城は必死の形相で首を振り、
「違う！　こないだヴァトラーの船に乗ったときに、こいつらが勝手に乱入してきたんだよ！」
「嘘！　あの船のお風呂って、あたしがあんたと一緒に入ったやつじゃん……！」
浅葱も咄嗟に言い返す。彼女の不用意な発言に、さらに教室内のどよめきが増した。おお、と感嘆の声を洩らしたのは矢瀬だ。
「あ……!?」
そんな幼なじみの反応を見て、浅葱は自分の失言を悟ったらしい。耳の先まで顔を真っ赤に染めながら、あああああっ、と両手で頭を抱え、
「違う！　そうじゃなくて！　あああもう、うるさい！」
開き直ったようにそう叫ぶと、浅葱は八つ当たり気味に矢瀬の頭を殴りつけた。まさかの不意討ちに反応できなかった矢瀬は、もんどり打って壁際まで吹き飛んでいく。
その間もオシアナスガールズの五人組は古城にベタベタとくっついて、自習中の教室内は、

完全に収拾がつかない状態になりつつあったのだが
「その雌どもは、退屈しのぎに俺たちについてきただけだ。浮かれるな、暁古城。情けない」
教室内に突然響き渡った殺伐とした声が、その混乱を一気に収束させる。
「浮かれてねーよ！　困ってんだよ――！」
古城は脊髄反射で反論しながら振り向いた。教室の入り口に立っていたのは、左手首に魔族登録証を嵌めた、銀髪の留学生である。冷たい刃物を連想させる、美しい顔立ちの少年だ。
「って、おまえ……ヴァトラーの船にいた吸血鬼か……！」
「トビアス・ジャガンだ。今日からしばらくこの学校に通うことになった」
ジャガンと名乗った留学生は、そう言って自分が着ている制服を忌々しげに睨みつけた。どうやら古城の学校に留学してきたのは、彼の本意ではないらしい。
「留学……なんでおまえらが……!?」
古城は唖然として訊き返す。見た目の年齢こそ古城たちと大差はないが、トビアス・ジャガンは〝旧き世代〟の吸血鬼だ。実際の年齢は二百歳を超えているはずである。今さら高校生の真似事をさせられるのは、屈辱以外の何者でもないだろう。
だがそれよりなによりも、古城と同じ教室にいること自体が、彼の苛立ちの原因らしい。
「日本の学校は上下関係に厳しいと聞いていたんだがな」
古城の前に詰め寄りながら、ジャガンは攻撃的な口調で言う。

彼が誇示するように見せつけてきたのは、二年生であることを示す学年章だ。どうやら自分のほうが上級生だと主張しているつもりらしい。

しかし古城は、額を押しつけるような勢いでジャガンを睨みつけ、

「悪いが閉鎖的な島国なんでね。新入りは揉まれるってのが、日本の伝統なんだよ、先輩！」

「くっ……閣下の命令でなければ、誰が貴様の護衛など……！」

至近距離で古城と睨み合ったまま、ジャガンが悔しげに歯を軋ませる。

古城は、ん、と怪訝そうに眉を上げ、

「ヴァトラーの命令……？　俺の護衛ってどういうことだ!?」

「俺が貴様に説明する義理などあるか、馬鹿め」

「　トビアス」

中性的な響きの柔らかな声が、なおも意地を張るジャガンを穏やかに制止する。

一触即発の古城たちの間に割って入ってきたのは、柔和な美貌を持つ吸血鬼の貴族――キラ・レーベデフ・ヴォルティズラワだった。灰色の髪と翡翠色の瞳。男子にしては小柄で、優しげな容姿の持ち主だ。フード付きのコートを羽織っているのは、日光を避けるためだろうか。コートの下の服装は、やはり彩海学園の制服である。

「キラくん？　もしかしてきみもウチの学校に……？」

「はい。よろしくお願いします」

キラが怖ず怖ずと右手を差し出して、その手を握り返しながら古城は軽い頭痛を覚える。

たしかに〝戦王領域〟からの短期留学生は、全部で七人だと聞いていた。オシアナスガールズの五人が勝手にくっついてきただけの単なるおまけということは、本来の留学生はジャガンとキラの二人組ということか。

「アルデアル公が書き置きを残していたんです。もしもご自分がいなくなった場合、僕たちは古城様に仕えてお護りするように、と」

キラが古城の耳元に顔を寄せ、声を潜めて説明してくる。

「書き置き？　ヴァトラーが？」

「そういうことだ。せいぜい俺たちに面倒をかけないように、大人しくしていてもらおう――なぜか勝ち誇ったような口調で、ジャガンが高慢に言い放つ。古城はイラッと唇を曲げて、

「おまえらがここにいる時点で、俺の立場が面倒なことになってるんだけどな――」

「すみません」

古城の皮肉に、キラが困ったように長い睫毛を伏せる

「あ、いや。キラくんが謝ることじゃないけど……だけど、ヴァトラーになにかあったのか？　あいつがいなくなったっていうのは――」

「わかりません。ただ、アルデアル公の気まぐれは今に始まったことではありませんから」

不安げな口調で呟いて、キラが艶やかな唇を噛んだ。

用は済んだ、と言わんばかりの乱暴な足取りで、ジャガンは自分の教室へと戻っていく。オシアナスガールズの五人も、いつの間にか姿を消していた。

「で……いつまで手を握ってるのよ、あんたたち」

握手を続けていたキラと古城を、半眼で見上げて浅葱が言う。

「お、おう」

無自覚に頬を赤らめながら、慌てて手を離す古城たち。

浅葱はますます不愉快そうに眉を寄せて、溜息をつく。

4

その時間、雪菜たちのクラスの授業は体育だった。女子の種目はバレーボール。基礎動作の確認をひととおり終えて、まったりとした試合形式での練習が続いている。

体操服姿の雪菜も、クラスメイトに混じって真面目に試合に参加していた。

敵陣から飛んできた山なりのサーブを、床スレスレで後衛の選手がレシーブする。ボールはふらふらと舞い上がって、誰もいないネット際へと飛んでいく。そのままサイドラインを割ってアウトになるだろう、と誰もが思った瞬間、

「げっ……雪菜!?」

「はい！」

ボールの下へと走りこんだ雪菜が、トンと軽く床を踏み切って跳んだ。ツーアタック　――小柄な身体が軽々と舞い上がり、軽く振った左手でボールを敵陣へとはたきこむ。

雪菜はそのまま音もなく着地した。相手コートにいた生徒たちは、なにが起きたのかわからない、という表情で、呆然と自陣の床に転がるボールを眺めている。

「あ……」

それを見て雪菜は、またやりすぎてしまった、と軽く落ちこんだ。獅子王機関で剣巫として育てられた雪菜の身体能力は、呪術による強化を行うまでもなく、同年代の女子の水準を遥かに上回るのだ。陸上などの個人種目であれば、適当に手を抜くこともできるのだが、球技の場合は手加減するのが難しい。

「やったね、雪菜！」

立ち尽くしている雪菜に笑いかけてきたのは、現役バスケ部員のシンディ　進藤美波だった。彼女自身も運動が得意なこともあってか、雪菜のデタラメなプレイを見ても、それほど驚いてないようだ。

「や、しかし、あれだね。雪菜は運動神経いいよね」

「そ、そうかな……？」

雪菜は引き攣った笑みを浮かべて、シンディの賞賛の言葉を受け流す。しかしシンディは、

そんな雪菜を面白そうに眺めて、

「見かけによらないよね。天然でぼーっとしてそうなのに」

「て、天然？」

まったく予想外の不本意な形容に、雪菜は思いがけずショックを受けた。自分ではしっかり者だと思っていただけに、友人の評価に動揺が隠せない。

「お、凪沙だ。あの子もよく動くねえ」

雪菜たちの試合が終わって、コートには凪沙たちの班が入っていた。シンディの言うとおり、寄せ集めのチームの中で凪沙はかなり健闘している。背が低いので前衛には向かないが、そのぶんレシーブを拾いまくってチームに貢献していた。どことなく小動物っぽい愛らしさがある。

「凪沙ちゃん、昔、入院してたって聞いたけど」

体育館の壁際に体育座りして、雪菜はシンディに小声で訊いた。

シンディが懐かしそうに微笑んで、

「ああ、そうだね。一年生のときは半分くらいしか学校に来てなかったもんね。体育もずっと見学だったし。今みたいに元気になったのは去年の秋くらいからかな……チア部に入ったのも、それくらいだもんね」

「去年の……秋？」

雪菜は唇を噛んで沈黙する　なにかがおかしいと、剣巫の直感が告げていた。

暁古城が絃神島に来たのは、事故が原因だったと聞いている　魔族がらみの事故で重傷を負った彼女の治療には、皮肉にも〝魔族特区〟の技術を利用する必要があったのだ。

実際、彼女はその治療によって快復したのだろう。完治したのは昨年の秋。

そしてそれから間もなく、彼女の兄である暁古城は、突然、第四真祖の力を手に入れた。世界最強の吸血鬼の力を。ただの偶然で片付けるには、あまりにもイレギュラーな出来事だ。

さらに雪菜を悩ませていたのは、先日の〝賢者〟事件で、凪沙が使った力のことだった。

彼女に憑依した謎の霊体。

一瞬で半径数百メートルの氷塊をも造り出す、意思を持つ巨大な魔力の塊。

雪菜の知る限り、そんな存在があるとすれば、それは吸血鬼が操る眷獣だけだ。それも〝旧き世代〟の最強クラスか、あるいは真祖の眷獣だけ

どうして凪沙がそんなものを喚び出せるのかはわからない。だが、彼女が本当に眷獣を操ったとすれば、古城が第四真祖の力を手に入れたことと無関係ではないはずだ。

もしかしたら雪菜は、勘違いをしていたのかもしれない。

第四真祖の妹が、たまたま〝魔族特区〟で入院していたのではなく。

彼女が入院していたからこそ、古城が第四真祖になったのだとしたら——

それが意味する恐ろしい可能性に気づいて、雪菜は全身が凍りつくような錯覚にとらわれた。

そしてそのせいで気づくのが遅れた。試合中のクラスメイトが雪菜たちを見て騒いでいる。

誰かがレシーブしたボールがコートを出て、壁際に座る雪菜のほうへと飛んできていた。それをべつの生徒が追いかけてくる。ボールを追うことに気を取られて、彼女は雪菜の存在に気づいていない。このままでは激突する。

「――雪菜ちゃん、危ない！」

凪沙がコートの中から叫んでいた。その声で我に返る前に、雪菜は無意識に動いていた。飛んできたボールを裏拳で跳ね上げ、突っこんできた女子生徒に向き直る。よけるのは簡単だったが、そんなことをすれば彼女が怪我をするのは確実だった。だから雪菜は逆に前に出た。突っこんできた生徒の腕を掴め捕り、彼女の勢いをそのままにベクトルだけを変えてやる。直進運動から回転運動へ。雪菜の目の前で女子生徒はふわりと浮き上がり、そのまま上下方向に一回転。体育座りのような姿勢で、彼女はストンと床に落ちた。

衝撃もほとんどなかった。

自分になにが起きたのか、女子生徒本人にもわからなかったに違いない。

そして彼女と入れ替わるような形で立ち上がった雪菜の前に、跳ね上げられていたボールが落ちてくる。雪菜は何事もなかったかのように、そのボールを静かにキャッチした。

「あ……」

自分がやったことを自覚して、雪菜がサッと青ざめる。体育館中が静まり返って、クラス全員が雪菜に注目している。が、

しかし恐れていたような畏怖の眼差しが、雪菜に向けられるようなことはなかった。

雪菜の技があまりにも高度過ぎるせいだった。普通の女子中学生には、雪菜がなにかをした、ということ自体、理解できなかったのだ。なにがなんだかわからないけれど、とにかくみんな無事でよかった、というふうに誰からともなく拍手が起きる。

ボールを抱いて立ち尽くしたまま、雪菜は赤面するしかない。

「なにやったの、今の？」

ただ一人、すぐ隣で雪菜を見ていたシンディだけが、驚いたような表情で訊いてくる。

うっすらと額に汗を浮かべながら、雪菜は視線を泳がせて、

「え……と……ぐ、偶然？」

「やっぱり、天然だねえ」

シンディは雪菜の反応を面白そうに眺めて噴き出した。

だがその直後、シンディが不意に青ざめた。雪菜もそれに気づいて息を呑む。

試合が中断しているはずのコートの中で、誰かが音もなく倒れていた。

長い髪をショートヘア風に結い上げた、特徴的な髪型の少女だ。コートに倒れ伏す彼女の姿は、普段よりも余計に小さく見える。

「……凪沙ちゃん!?」

持っていたボールを投げ出して、雪菜は彼女に駆け寄った。

シンディもすぐについてくる。ほかの生徒たちも異変に気づいて、凪沙を遠巻きに見つめている。隣のコートで審判をしていた体育教師の笹崎岬が駆け寄ってくる。

「ちょっと、どうしたの、凪沙!? 凪沙――!?」

シンディが大声で呼びかけても凪沙は反応しない。ついさっきまで元気に動いていたはずの凪沙は、ひどく苦しげで、荒々しい呼吸を続けている。

「凪沙ちゃん……そんな、まさか……」

雪菜は呆然と呟いた。抱き上げた凪沙の全身はひどく冷たい。まるで死体に触れているかのように。そして彼女に触れた瞬間、雪菜は凪沙の衰弱の原因を理解していた。

暁古城と暁凪沙、彼ら兄妹に隠された秘密についても ―

「なんてことを……」

雪菜の悲痛なうめきは、クラスメイトたちのざわめきにかき消されていく。

眠り続ける凪沙の身体は驚くほど軽く、目を閉じた横顔はどこか妖精めいて見えた。

5

連絡を受けた古城がMARの研究所に駆けつけたのは、午後になってからのことだった。

マグナ・アタラクシア・リサーチ社 通称MARは、東アジアに本拠を置く巨大企業だ。

軍事兵器から食品まで手広く扱う、世界有数の魔導産業複合体である。

紗神島にはそのMARの医療研究所と付属病院が置かれており、古城の母親 暁深森が、研究主任として働いている。そして彼女は愛娘、暁凪沙の主治医でもあった。

「姫柊！ 凪沙は？」

待合室の片隅で所在なげに座っていた雪菜は、駆け寄ってきた古城に気づいて、ぎこちなくうなずいてみせた。自宅が隣同士という半ば無理やりな口実で、彼女は、病院に搬送される凪沙に強引に付き添ってきたらしい。

大丈夫だと思います。意識が戻らないだけで、今は呼吸も脈もしっかりしてますし」

「そう……か……」

張り詰めていた緊張の糸が切れる音がして、古城は脱力したようにその場に屈みこむ。凪沙が無事だという情報は電話でも聞いていたのだが、それでもどうしようもなく不安だったのだ。

シスコンめ、と言いたげな表情で雪菜はクスッと小さく笑い、

「凪沙ちゃんのことは、先ほどおば……深森さんが来て医療棟に連れていきました。部外者は立ち入り禁止ということなので、わたしはここで待ってますけど、先輩はご家族だから――」

「いや。医療棟には俺も入れてもらえないんだ……まあ、専門家がついてるから大丈夫だと思う。俺が付き添ってても、できることはないしな」

「それにしては、ずいぶん大勢で来たんですね」

雪菜はそう言って、古城の肩越しに不審げな視線を向ける。

「え？」

雪菜につられて古城も背後を振り返り、うおだっ、と間抜けな悲鳴を上げた。ちょうど待合室の自動ドアをくぐって、制服姿の集団がぞろぞろと入って来るところだ。

浅葱と矢瀬、そして〝戦王領域〟からの留学生を名乗る二人組――

「な、なんでおまえらまでいるんだよ!?」

どう考えても無関係な四人を睨んで、古城が喚いた。今まで気づいてなかったんですか、と呆れ顔で雪菜が呟いている。

「あ、あたしだって凪沙ちゃんのことが心配だったし」

浅葱はどことなくバツの悪そうな表情で目を逸らして、

「あと、この人たちがあんたのあとを追いかけてったからさ――」

「俺は自分の役目を果たしているだけだ。おまえの妹を見舞いに来たわけじゃない」

浅葱に責任を押しつけられたジャガンは、悪びれもせずに堂々と胸を張った。

キラはその隣で真顔でうなずき、

「はい。ですから、自分たちのことは気にしないでください」

「気にするわ！」

ここが病院だということも忘れて怒鳴り散らす古城。おそらく彼らは古城を護衛しろという

ヴァトラーの言いつけを、忠実に守っているだけなのだろうが

「なんで留学初日からいきなり学校サボってんだよ、おまえら！　つか、なんで矢瀬まで!?」

「いや、なんか面白そうだったから――じゃなくて、俺も凪沙ちゃんのことが心配でな」

明らかに見物する気満々の態度でそう言って、矢瀬はわざとらしく真面目な表情を浮かべてみせる。ったく、と古城は乱暴に舌打ちした。

それでも無理に彼らを追い返そうとしなかったのは、浅葱や矢瀬の本当の気持ちを、薄々理解していたからだ。彼らはたぶん凪沙ではなく、古城のことを心配してついてきてくれたのだ。

「すみません……わたしが一緒にいたのに、凪沙ちゃんの体調のこと、気づけなくて」

待合室の小さなベンチに腰掛けたまま、雪菜が悄然と肩を落として呟いた。目の前で凪沙が倒れてしまったことに、責任を感じているらしい。

「それを言うなら、悪いのは俺のほうだろ。あいつが寝坊した時点で、体調が悪いのを疑ってくべきだったんだよな。あいつが身体が弱いのは、今に始まった話じゃないんだし」

古城は彼女の隣に腰を下ろして、疲れたように首を振る。

朝起きられなかったこと、登校中にふらついていたこと……凪沙の不調を見抜くチャンスは何度もあった。それに気づけなかったのは、家族である古城の責任だ。普段の口数の多さとは裏腹に、凪沙は滅多なことでは泣き言を口にしない。古城はそのことを知っていたのだから。

「凪沙ちゃんの怪我って……完全に良くなったわけじゃなかったの？」

浅葱が、落ちこむ古城を気遣うような口調で訊いてくる。

ああ、と古城は溜息混じりに弱々しく笑って、

「普段の生活には支障ないんだけどな。定期的にチェックが必要だって言われてる。まだ薬もいろいろ試してるみたいだし」

「そっか……大変だね」

「退院してからは、倒れるようなこともあんまりなかったんだけどな」

見慣れた病院内の風景を眺めて、古城は呟いた。入院中の凪沙を見舞うために、中学時代、何度も訪れた待合室だ。

「先輩、凪沙ちゃんの入院の原因というのは――」

雪菜が古城に真剣な眼差しを向けてくる。古城は軽く肩をすくめた。いちおうプライベートな情報とはいえ、凪沙に付き添ってくれた雪菜に隠しておく意味はないだろう。

四年前にローマで、魔族による爆破テロがあっただろ。列車に爆弾が仕掛けられてたやつ」

「はい……」

雪菜がなぜか驚いたように目を細めた。古城は構わず話を続ける。

俺と凪沙は、そのときたまたま現場に居合わせたんだよ。二人とも事件の前後の記憶はほとんど残ってないんだけど……ただ、それからだな、凪沙が魔族を恐がるようになったのは。たぶんそのときの恐怖が残ってるんだと思う」

「……そうですか」

雪菜は呟いてそれきり沈黙する。うつむいて考えこむ彼女の横顔が、古城をかすかに不安にさせた。四年前のテロは数多くの死傷者を出した大惨事だが、すでに過去の出来事だ。犯人は全員が射殺されたし、背後の組織も壊滅している。今さら彼女が考えてどうにかなるとも思えない。あの事件は、今ここにいる古城たちとは、もはや無関係の出来事なのだ――

「ここにいても仕方ないから、食堂にでも行くか」

待合室の時計を見上げて、古城が提案する。

昼休みになってすぐに学校を飛び出してきたせいで、古城たちは昼食を済ませていないのだ。おまけに朝飯抜きだったこともあって、冷静に考えると凄まじく腹が減っていた。腹が膨れれば多少は不安も晴れるかもしれない、とも思う。そして、

「え!?　食堂!?」

殊更に明るい声で反応したのは、浅葱だった。

「古城がおごってくれるの？　MARの社員食堂って有名よね。絃神島のグルメガイドにも、隠れた名店として紹介されてたり」

「おまえな……」

目を輝かせている浅葱を見返して、古城は口の失言を悔やんだ。スリムな見かけによらず、浅葱は美食家で大喰いだ。ファミレスのランチプレート程度なら、四、五人分は余裕で食べる。

ましてや普段は滅多に入れない隠れた名店、しかも他人の奢りとなれば、容赦なく本気で注文しまくるつもりに違いない。

「まあいいか。どうせうちの母親のツケだしな」

古城は開き直ったような気分でそう言った。雰囲気を和やかにするために、浅葱があえて大げさにはしゃいでいるという可能性も、おそらくゼロではないはずだ。

「ふん。貴様となれ合うつもりはない。俺たちは別行動をさせてもらおう」

ジャガンが無愛想な口調で言う。古城は気怠く頬杖をついて彼を睨み、

「好きにしろよ。もともと誘ってねえし」

「すみません。では、自分もこれで」

少しだけ名残惜しそうに微笑みながら、キラが慇懃に頭を下げる。

「ああ、またな」

「はい」

妙に気の合った挨拶を交わしながら、古城は気持ちよく彼を見送った。そんなキラの後ろ姿を、なぜか浅葱は警戒するように睨んでいる。

「今の方々、〝戦王領域〟の貴族ですよね。どうして先輩たちと一緒に　？」

同じく懐疑的な表情でキラたちを見つめて、雪菜が訊いた。

古城は、なにかが奥歯に挟まったような表情で顔をしかめて、

「それがよくわかんねーんだよ　ヴァトラーのやつが、俺を護衛するようにって書き置きして、いなくなったとか言ってたけどな」

「……アルデアル公がいなくなった？」

雪菜が困惑したような呟きを洩らす。

彼女が戸惑うのも当然だった。ディミトリエ・ヴァトラーは気まぐれな吸血鬼だが、行動のわかりやすい男でもある。彼の目的は強い敵と戦うこと――それだけだ。無限に近い寿命を持つ吸血鬼の貴族にとって、自らの命を脅かす強敵との戦いは唯一最高の暇潰しだからだ。

そんなヴァトラーが、部下にも黙って姿を隠したという。

戦いそのものを娯楽とする彼には、似つかわしくない行動だ。ましてや古城の護衛を部下に任せたとなると、どうしようもなく不可解だった。

第四真祖、世界最強の吸血鬼である古城を傷つけられる者が、そう滅多にいるとは思えない。

そしてそんな強敵が出現したならば、喜び勇んで真っ先に戦いを挑むのは、ほかならぬヴァトラー自身のはずだからだ。

「まあ、そんなことだろうとは思ってたけどさ。やっぱり、あなたもヴァトラーさんのことを知ってたわけね、姫柊さん」

古城たちの会話を聞いていた浅葱が、挑発的に笑って雪菜を見つめた。

「いい機会だし、そろそろ聞かせてくれない？　あなたと古城はどういう関係なの？　古城は

なにを隠してるの？　ヴァトラーさんと古城って、ホントにそういう関係じゃないのよね？」

「――そういう関係ってどんなだ!?」

思わず横からツッコミを入れる古城。浅葱はいまだに古城とヴァトラーが、恋愛関係にあるのではないかという疑いを捨て切れてないらしい。完全な誤解だと言い切れないところが、少々厄介ではあるのだが――

「わかりました」

そんな浅葱の視線を真っ向から受け止めて、雪菜が言う。彼女の意外な返答に古城は驚いて、

「お……おい、姫柊……」

「でも、その前にひとつ、わたしのお願いを聞いてもらえませんか？」

「そ、そう来る？」

雪菜が条件をつけてくるとは思っていなかったのか、浅葱が、うっと怯んだようにうめいた。とはいえ今さら引っこみもつかなくなったのか、浅葱は開き直ったようにうなずいて、

「いいわよ。やってやろうじゃないのよ」

「お願いします。藍羽先輩に調べて欲しいことがあるんです」

なぜか見えない火花を散らして睨み合う雪菜と浅葱。妙に重苦しく張り詰めた空気が、待合室に漂い始める。そのプレッシャーに気圧されて、古城はなんとなくこの場から逃げ出したい衝動に襲われた　そして、

「あー……すまん」

そんな古城の機先を制して、矢瀬がいきなり滑るように後退を始める。

「や、矢瀬？」

「盛り上がってるところ悪いんだが、ちょっとトイレ行ってくる。急に腹の調子がな」

「そ、そうか。だったら俺も――」

古城も矢瀬に便乗して、咄嗟に立ち上がろうとした。が、

「あんたは駄目よ、古城！」

「先輩はここにいてください！」

二人がかりで却下され、ぐ、と古城は動きを止めた。

「悪いな、古城。お先！」

その隙に矢瀬はすたこらと逃げ出していき、古城はやれやれと溜息をつく。

「で、あたしになにを調べて欲しいわけ？」

浅葱が愛用のノートPCを取り出して、雪菜に訊いた。華やかな外見からは想像できないが、浅葱の正体は〝電子の女帝〟などと呼ばれる世界有数のハッカーだ。その気になれば、彼女は北米連合情報局の最重要機密ファイルにも平然とアクセスしてみせるだろう。

「四年前の事故のことです」

そんな浅葱に、雪菜は淡々と告げた。

「先輩と凪沙ちゃんが遭遇したというテロ事件、それが本当にあった出来事なのかどうか。そして先輩たちが本当に巻きこまれていたのかどうかということを――」

6

「納得いかん」

不機嫌そうに吐き捨てながら、トビアス・ジャガンはＭＡＲ付属病院の敷地を出た。彼の怒りの矛先が向けられているのは、もちろん暁古城である。

「――気品もなければ凄味も覇気もない。あのような輩が本当に第四真祖なのか。あんな男を護衛しろとは、閣下の気まぐれにも困ったものだ」

「意外に気が合ってたように見えたけどね」

変声期前の少年のような澄んだ声で、キラが笑う。ジャガンは苦々しげに唇を歪め、どこかムキになったような早口で抗議した。

「冗談でもやめろ、キラ。虫唾が走る」

「ふふっ」

キラは朗らかに笑いながら、地面を蹴って跳躍した。魔族に特有のデタラメな筋力で、傍に建っていた六階建てのビルの屋上に一気に辿り着く。

「それに閣下が、自分たちに彼の護衛を命じた理由はわかったね」

「ああ、そうだな」

キラの隣に着地したジャガンが、強い陽射しに顔をしかめながら目を凝らした。

彼が睨んでいた先には、有機的に乱立する無数のビル群がある。人工島北地区の研究所街。人工島らしさを色濃く残した、未来的でメカニカルな街並みだ。

中でもひときわ背の高い灰色の電波塔の上に、白いフードを被った少女が立っている。

彼女が見下ろしているのは、MARの付属病院だ。

まるで獲物を追う狙撃手のように、暁古城がいるその場所を、彼女は監視していたのだ。

それを確認した瞬間、ジャガンは己の眷獣を解き放っていた。

「妖撃の暴王、よ――！」

凄まじい魔力とともに実体化したのは、閃光に包まれた巨大な猛禽だった。その実体は摂氏数万度にも達する高密度の魔力の炎である。それは灼熱の閃光となって数百メートルの距離を一瞬で駆け抜け、少女が立っていた場所へと突き刺さる。

青空を背景に無数の美しい火花が散り、一瞬遅れて衝撃が伝わってきた。

ジャガンの眷獣が生み出す超高熱は、爆発すらも引き起こさなかった。達人の手による斬撃のように、金属製の鉄塔を一瞬で溶断しただけだ。もちろんそんな攻撃に巻きこまれて、生き延びられる生物がいるはずもない。

おそらく、目の前にいる一人の少女を除いては

「ずいぶん手荒い歓迎だな」

フードの裾を翻しながら、少女が近くのビルの上に着地する。ジャガンの眷獣の攻撃にも、無傷。妖精めいた美しい顔立ちで、彼女は愉快そうに笑っている。

「さすがはヴァトラーの側近といったところか、トビアス・ジャガン」

「警告は一度だけだ。次は直撃させる」

呼び戻した眷獣を頭上で待機させながら、ジャガンは少女を睨めつけた。彼女が自分の名前を知っていたことにも動揺はない。むしろ名乗る手間が省けたと思っているような態度だ。

「あなたが第四真祖を尾けていたことはわかっています。理由を聞かせてもらえますか。ついでに、あなたの名前と所属も」

少女の退路を断つ位置に移動しながら、キラが質問する。ヴァトラーは、キラたちに暁古城の護衛を命じた。つまり第四真祖を脅かす敵の出現を予見していたということになる。

だとすれば、その敵とは、目の前の少女以外にはあり得ない。眷獣の攻撃を受けて、平然と笑っているこの少女は、たしかにキラたちが戦うに足る強敵だ。

しかし少女は、くふっ、と肩を揺らして失笑する。

「この私が、第四真祖を尾けていた、だと……おまえたちはなにも知らされていないのだな。ヴァトラーは教えてくれなかったのか？」

「……なにが言いたい？」

ジャガンが殺気立った声で訊き返す。ヴァトラーと彼の信頼関係を揶揄するような、少女の口振りが気障りなのだ。

だが、憤るジャガンを嘲るように、少女は穏やかな声で続けてくる。

「察するに、貴様たちはヴァトラーが派遣した護衛であろう。あの第四真祖を護りたいのなら、貴様たちの敵は余ではないぞ。せっかくのヴァトラーの配慮を無駄にする気か？」

「……どういう意味です。あなたはアルデアル公の居場所を知っているのですか？」

キラが戸惑いの表情を浮かべる。少女の忠告は、まるでヴァトラーの行動をすべて知悉している人物の物言いだ。焦りを殺して冷静に情報を引きだそうとするキラを、少女は、いい子だ、とでも今にも言い出しそうな表情で眺めた。

「案ずるな。殺してはおらぬ。さすがに彼奴を完全に滅ぼすのは、余の力をもってしても楽ではないのでな。用が済めば、解放してやろう」

「貴様ごときが閣下を捕らえただと？」

ジャガンが獰猛に美貌を歪めて笑った。ふむ、と少女はむしろ意外そうに呟く。

「信じられぬか？　むしろヴァトラーごときが余に敵うと信じられる根拠はなんだ？」

「あなたは、いったい……!?」

キラの表情にはかすかな迷いが滲んでいた。〝忘却の戦王〟直系の吸血鬼であるキラやジャガンを――ましてやあのヴァトラーを凌ぐほどの力が、彼女にあるとは思えない。そんな強大な力の持ち主の名を、キラたちが知らないとは考えられないからだ。

だが、戦場慣れした吸血鬼の本能が警告を発している。この少女の底知れぬ自信は、おそらく無根拠なものではない。

「もういい。下がれ、キラ。これ以上、そいつの戯れ言につき合う義理はない」

やがて業を煮やしたように、ジャガンが荒々しく言い放った。真紅に染まった彼の瞳が、妖しい魔性の光を放つ。それは〝魔眼〟と名付けられた、不可視の眷獣の輝きだ。ジャガンの目から相手の脳内に侵入し、相手の意識を支配する――

「貴様が知っていること、すべて話してもらうぞ、女！」

ジャガンの瞳が輝きを増した。それを平然と見返して、ほう、と少女が感嘆の息を吐く。

「精神支配系の眷獣か。さすがは戦王の縁者。稀少な能力を持っているのだな――」

「な……に!?」

少女の言葉が終わる前に、ジャガンの身体が仰け反った。ぐお、と彼の口から悲鳴が洩れる。

「馬鹿な……その瞳……貴様……！」

膨大な魔力の逆流に、ジャガンは左目を押さえて片膝を突いた。少女が眷獣の攻撃に抵抗し、その反動が召喚主であるジャガンを襲ったのだ。

「悪く思うな。余の瞳を覗きこんできたのは、貴様のほうだ」

少女が気遣うような口調でジャガンに告げる。フード越しに覗く彼女の瞳が、青白い光を放っていた。その輝きがジャガンの眷獣の攻撃を防ぎ、逆にジャガンを苦しめている。

「〝炎網回廊（ネフィラ・イグニス）〟」

その直後、キラの澄んだ声が響き渡り、彼の指先から鮮血の霧が飛び散った。霧は赤熱した熔岩へと変わり、少女の周囲を蜘蛛の巣のように覆い尽くす。

「キラか――!?」

「下がって、トビアス。ここは自分が――」

キラが清冽な微笑を浮かべて主張する。その足元に出現していたのは、美しく輝く琥珀色の蜘蛛だった。熔岩の肉体を持つ蜘蛛の眷獣だ。

眷獣が放つ糸も灼熱の熔岩。それは美しい幾何学模様の陣となり、白いローブの少女を完全に包みこんでいた。指一本でも動かせば、絡みつく熔岩が一瞬で彼女を焼き尽くすだろう。

「この陣のすべてが一体の眷獣か。凄まじいものだな」

隙間なく張り巡らされた琥珀色の糸を眺めて、少女は不敵に目を眇めた。糸の形をしているとはいえ、眷獣である以上、その実体は濃密な魔力の塊である。キラが展開した網の中では、霧化も空間制御の魔術も使えない。この陣から脱出するのは不可能だ。

「自分も一度だけ警告します。降伏してください」

キラが静かな口調で言う。警告に従わなければ殺すしかない――そんな苦悩の滲む声だった。

しかし少女は悠々と眼光を輝かせて哄笑し、

「警告の必要はないぞ、キラ・レーベデフ～貴様には余を傷つけることはできぬ。仲間を護るためとはいえ、余に牙を剝いた報い、受けるがいい」

――っ!?」

瞬間、少女から放たれた魔力の凄まじさにキラは絶句した。張り巡らされた熔岩の糸がキラの眷獣の肉体がちぎれ飛ぶ。少女が召喚した眷獣の魔力に抗いきれず、内側から弾けて散ったのだ。脱出できぬ陣であれば蹴散らせばいい。そう言わんばかりの少女の暴挙である。

「眷獣だと!? 馬鹿な、この力は――！」

出現した眷獣の巨大過ぎる魔力に、ジャガンまでもが言葉を失っていた。

形容しがたい怪異な魔物。迸る魔力の濃密さは、キラやジャガンの眷獣を遥かに凌ぎ、おそらくはヴァトラーの融合眷獣すら凌駕する。これほどの眷獣を扱える存在は、彼らだけだ。

最強最古の吸血鬼たる真祖だけだ。

「少々段取りが狂ったが、やむを得ぬか。いや、こうなることを見越して護衛を置いていたか、蛇遣いめ　やってくれる」

傲然と笑いながら、少女が力を振るう。

解き放たれた爆発的な魔力が〝魔族特区〟の空を揺るがし、青白い雷光で染めていく。

7

謎の少女の襲撃に気づいていたのは、ジャガンたちだけではなかった。過適応者（ハイパーアダプター）・矢瀬基樹も、古城の周囲に張り巡らせた音響結界（サウンドステープ）で、追跡者の存在を把握していた。

ジャガンやキラが彼女と交戦することになったのも、いちおうは矢瀬の想定内だ。だが、少女が召喚した脅獣の規模は、予想を遥かに超えていた。

「おい、モグワイ――なんだ、あれは!? 聞いてないぞ！」

矢瀬がスマートフォンに向かって怒鳴る。通信相手は、浅葱によってモグワイと命名された人工知能――絃神島を管理する五基のスーパーコンピューターの現身（アバター）だ。

『いやあ……正直、俺も驚いてるぜ。入島記録なし。魔力波形は計測限界を突破して測定不能。完璧な未確認魔族（アンノウン）だ』

モグワイが妙に人間臭い口調で答えてくる。彼が本気で驚いているとは思えないが、記録がないというのは、おそらく嘘ではないだろう。この状況でモグワイが矢瀬を騙す理由がない。

「映像は？　骨格から解析できないか？」

矢瀬が冷静に指摘する。モグワイは絃神島の各所に設置された監視カメラで、島民の画像データを大量にストックしているはずだった。それらと照合することで、彼女の手がかりが得られる可能性は高い。

当然モグワイ自身も同じことを考えていたのだろう。彼の応答は速かった。

『該当サンプルは一個だけだな。相似率は九八・七七九パーセント――』

「サンプル名は、アヴローラ・フロレスティーナか」

『ご名答。十二番目の〝焔光の夜伯（ノーブル）〟だな』

明らかに面白がっているような口調で、モグワイが告げてくる。

矢瀬は思わず、傍にあるビルの外壁を殴りつけていた。

「馬鹿な……！」

『ケケッ……今更、十二番目（アヴローラ）が出てくることはあり得ない、か。だったら、あの女は何者だろうな。〝戦王領域〟の貴族をあっさりぶちのめす化け物だ。案外、ホンモノかもしれんぜ？』

迷いを見透かすようなモグワイの問いかけが、矢瀬の心を惑わせる。逆巻く炎のような虹色の髪。焔光の瞳。妖精めいた幼い美貌――そのすべてが、かつてこの島にいた少女の特徴と一致していた。矢瀬自身とも因縁浅からぬ一人の少女と。だがしかし、

「それこそあり得ない話だろうが　おまえはその理由を知っているはずだぞ、モグワイ」

『そうだな。だけど、あの嬢ちゃんが偽者だとして、それでどうする？』

モグワイの指摘に、矢瀬は言葉を詰まらせた。矢瀬の役割は単なる監視者だ。天与の過適応能力や人工島管理公社の支援をもってしても、あのような怪物たちと、まともに戦う

ことは望むべくもない。その事実が今は恨めしい。

「結局また指をくわえて見てるしかないってことか」

『いや……そいつもどうやら無理そうだぜ』

モグワイが矢瀬を哀れむような口調で警告した。どういう意味だ、と矢瀬がモグワイの真意を問い質そうとしたとき――

「そうですね」

目の前で不意に声がした。

な、と矢瀬が息を呑む。ひと気のないビルの屋上、矢瀬からほんの数歩ばかり離れた距離に、一人の男が立っていた。眼鏡をかけた、繊細そうな面立ちの青年だ。

ゆったりとした黒い中華服を着ており、どことなく古代の仙人を連想させる雰囲気がある。しかし特徴と言えるのはそれだけだ。間近で対峙していても、意外なほど彼の存在感は薄い。

「俺に気づかれずに近づいた……だと!?」

その不可解な事実に、矢瀬は動揺する。能力によって増幅された矢瀬の超聴覚は、数キロ離れた人間の足音すらも聞き分けるのだ。いくら謎の少女に気を取られていたとはいえ、矢瀬がまったく無自覚なまま、ここまで相手の接近を許すことはあり得ない。

驚く矢瀬を無感情に眺めて、青年が武器を取り出した。長さ一メートルをわずかに越える程度の全金属製の短槍だ。穂先も柄も、光を吸いこむような黒一色で成形されている。

それが、一本

青年は左右の手に持った短槍を接合して、一本の槍を造り出す。両先端に穂先を持つ奇妙な形の長槍だ。

「あなたの能力は、私にとっても少々厄介ですからね、このあたりで退場してもらいましょう、矢瀬基樹。傍観者は一人だけでいい――」

「そうか……監獄結界からの脱獄者は全部で七人だったな。おまえが七人目か！」

青年の正体に気づいて、矢瀬が叫んだ。

ひと月ほど前に起きた魔導犯罪者の脱獄事件。あの日、〝書記の魔女〟仙都木阿夜とともに監獄結界から抜け出した囚人は七人いた。

そのうちの六人までは結界内に連れ戻されたものの、一人だけ行方の知れない脱獄囚が残っている。それがこの黒衣の青年だ。罪状、能力ともに、すべての記録は抹消されて不明。唯一残されていたデータは彼の名前だけ

「……絃神冥駕！」

矢瀬はポケットから取り出したカプセル錠剤を口に含んで、ガリガリと噛み砕く。その直後、彼の周囲を風が吹き始めた。やがてそれは凄まじい突風へと変わる。

「気軽にその名前を呼ばないでもらいたいのですが……まあいいでしょう」

轟、と渦巻く爆風に圧倒されながら、青年は薄く溜息を洩らした。

やがて彼の眼前に、光の屈折が生み出す暴風の巨人が出現する。矢瀬が自らの過適応能力を一時的に増幅することで生み出す分身――重気流躰だ。数十気圧に濃縮された気流の肉体は、局地的な竜巻にも匹敵する破壊力を持つ。しかも中身は単なる空気であるため、魔術的な防御では防げない。姫柊雪菜の七式突撃降魔機槍ですら、矢瀬の攻撃を無効化することは出来ないのだ。

「気流を操る過適応者……面白い能力です。ですが……」

その暴風の巨人を眺めて、青年は静かに武器を構えた。漆黒の長槍が放ったのは、闇の中で揺れる鬼火に似た、仄白く禍々しい輝きだ。

そして暴風の巨人の攻撃がその輝きに触れたとき　まるで最初から存在しなかったかのように、荒れ狂う気流もろとも巨人は消滅していた。あとに残されたのはわずかな微風だけだ。

「重気流躰が無効化された……!?」

矢瀬が驚愕に息を詰まらせた。青年は暴風の巨人を破壊したわけではない。攻撃を防ごうとすらしなかった。ただ矢瀬が操っていた異能の力そのものを消したのだ。

「その槍……七式突撃降魔機槍か!?　いや、違う……！　まさか!?」

矢瀬はようやく黒槍の正体に気づいた。そして本能的に理解する。この男と戦ってはならないと。残されたわずかな気流を使って、矢瀬は自らの背後へと跳躍。青年の反撃を避けようとする。

だが、その前に放たれた黒槍の斬撃が、矢瀬の身体をとらえていた。斬り裂かれた胸から、鮮血が散る。フェンスを突き破った矢瀬の身体が、地上に向かって落ちていく。

「ふむ……」

手応えの浅さに顔をしかめて、青年は破れたフェンスの隙間から地上を見下ろした。

そこに倒れているはずの矢瀬の姿はない。ただ大きな血溜まりが、舗装された地面に広がっているだけだ。動ける傷ではなかったはずだが――

「さすがにしぶとい……が、まあ、いいでしょう」

黒衣の青年は静かに独りごちて、ふと屋上の片隅に目を留めた。そこに転がっていたのは、一台のスマートフォンだった。戦闘のどさくさで矢瀬が落としたものだろう。

ひび割れた画面に浮かび上がった文字が、彼の通話相手を示している。そして回線がいまだに繋がったままだということも――

「ようやく会えましたね。我らが王よ」

満足げな口調で呟いて、絃神冥駕は恭しく一礼した。そして彼は、おもむろにスマートフォンを踏みつけた。そのまま踵に体重を乗せて、乱暴に踏み砕く。ガラスが粉々に砕け散り、ケケッ、という奇妙な笑い声を残して、今度こそ完全に回線は沈黙する。

8

「たしかに四年前　正確には二年八カ月前の二月に、イタリア半島の自治領ローマで列車の爆破テロが起きてるわ。被害に遭ったのは、列車の乗員乗客と駅にいた人たち。死傷者は四百名以上。日本でもけっこうな騒ぎになったわよね」

分厚いパンケーキを頬張ったまま、浅葱がノートPCの画面を睨んで言う。彼女の周囲には空になった大皿が四枚ほど積み重ねられていた。浅葱にしては控え目な分量だ。それだけ作業に集中しているのだろう。

浅葱がアクセスしているのは、地元公安警察の内部資料だ。テロのような政治がらみの事件の場合、意図的にマスコミに対して情報の一部が隠蔽されたり、改竄されることがある。そのような攪乱を避けるためなのだという。

ランチタイムを過ぎていることもあって、MARの社員食堂は空いていた。古城と雪菜は、食事を摂るのも忘れて、浅葱の説明を聞いている。

「事件が起きたのは、現地時間の午後一時。その日の午後八時過ぎには、重傷を負った凪沙ちゃんがMARの特別機で絃神島に運びこまれてきてるわ」

そこまで呟いて、浅葱は苦悩するように目元を覆った。溜息混じりに首を振る。

「なんてこと……」

「やはり、そうでしたか……」

浅葱と同じように目を伏せた雪菜が、沈痛な声で呟いた。

「え？　なんだ、その反応……？」

古城は彼女たちの態度に混乱する。自治領ローマでテロ事件が発生し、古城たちは現場に居合わせた。そして重傷を負った凪沙は治療のために、絃神島へと搬送されたのだ。古城が説明を受けたとおりだし、時系列的にも問題ないと思える。

しかし浅葱は、鈍いわね、と呆れたような表情で古城を見た。

「あんたね……ローマから絃神島まで、飛行機で何時間かかると思ってるのよ？」

「え？　あ……」

古城はようやく異常性を把握する。自治領ローマから東京までの飛行時間は、直行便でも十二時間前後。そこからさらに絃神島まで一時間弱　乗り継ぎ時間などをいれたら、更に時間がかかるだろう。MARが特別機を手配したにしても、絃神島への到着時刻は速すぎる。

「いや、だけど時差があるだろ。たしか八時間くらいズレてたはずだから――」

「日本とローマの時差はマイナス八時間。絃神市の午後八時は、現地時間の正午です」

雪菜が淡々と指摘する。古城は自分の足元が崩れていくような錯覚に襲われて、呆然と首を振った。

「……どういうことだ？」

「爆破テロが起きたときにはもう、凪沙ちゃんは入院してたってことよ。あの子の負傷は事件とは無関係。たまたま同じ日に起きたべつの事件を、入院の口実として利用したんだわ」

浅葱はそう言って肩をすくめた。雪菜が引き継いで補足する。

「先輩と凪沙ちゃんに事件前後の記憶がなかったのも当然だと思います。この事件において人は、最初から遭遇してなかったんですから」

「こうなると凪沙ちゃんが怪我したとき、あんたたちがローマにいたって話も疑わしくなってくるわね。出国記録は残ってるから、欧州方面に向かったのは間違いないんだろうけど……」

「それって……俺たちが今まで騙されてたってことか……？」

弱々しく呟いて、古城は自分の掌を見つめた。周囲の大人たちが寄ってたかって自分たちに嘘を吹きこんでいた、という想像は、不快というよりも不気味で空恐ろしいものがあった。実の両親までもが、その欺瞞に関与していたというのだから余計にだ。

「だけど、その嘘になんの意味があるんだ？　どうして俺たちを騙す必要があるんだよ!?」

「わかりません……」

雪菜が古城を気遣うように静かに首を振る。

「ですが、おそらく先輩の体質と無関係ではないはずです」

「古城の体質？」

浅葱がハッと顔を上げて雪菜を見た。古城が隠していることを知りたければ、まずこの事件について調べて欲しい　そんな不可解な条件を切り出したのは雪菜だった。おそらく雪菜は最初から、古城に植えつけられた記憶が偽りだと看破していたのだ。

「そっか……それを説明してくれるって約束だったのよね。あんたたちが隠してること、この際だから全部話してもらうわよ」

真剣な眼差しで浅葱に睨まれて、古城は諦観したようにうなずいた。どのみち浅葱には、いずれ打ち明けようと思っていたことだ。

だが、その前にひとつだけ、古城自身が確認しておきたいことがある。

「なあ、浅葱。凪沙の治療の記録、ＭＡＲには残ってるはずだよな――」

「そりゃまあ……ね。許可なく覗くのは違法だし、プライバシーの侵害だけどね」

古城の意図を察したのか、浅葱がめずらしく逡巡するような口調で言う。

しかし古城は思い詰めたような表情で、窓の外へと目を向けた。

広々とした芝生の中庭を挟んだ対岸に、白い外壁のビルが建っている。ＭＡＲの医療研究所。凪沙が治療を受けているはずの建物だ。

「ＭＡＲの連中だって俺たちを騙してるんだ。おあいこだろ。連中がなにも知らない凪沙を利用してるんだとしたら、そっちのほうが犯罪じゃねーかよ」

「……だそうよ、モグワイ」

浅葱は深々と息を吐き、相棒である人工知能に呼びかけた。世界有数のハイテク魔導企業、MAR相手のハッキングに、非力なノートPC一台では、いくら浅葱でも少々厳しい。なので人工島管理公社のメインコンピューターに支援させようとしたのだろう。

しかし人工知能からの応答はない。

「モグワイ……？」

浅葱が滑らかにキーボードを操作して、検査コマンドを入力する。普段は用もなく勝手にしゃしゃり出てくる皮肉屋の現身が、今日に限っては浅葱の呼び出しに反応しない。なんらかの障害が起きているらしい。

「えっ……!?」

「――っ!?」

同時に雪菜と古城もうめき声を洩らしていた。MARの建物からそう遠くない場所で、巨大な魔力が放出されたことに気づいたのだ。その手の気配に敏感といえない古城ですら、はっきり感知できるほどの凄まじい魔力量だ。

「姫柊、これは――！」

「はい、眷獣です。だけど、こんな桁外れの魔力は……!?」

立てかけてあったギターケースをつかんで、雪菜が窓際へと駆け寄った。ビルの隙間から見えていた電波塔が、巨大なナイフで斬られたように、ゆっくりと倒壊していくのが見える。

間違いなく〝旧き世代〟の吸血鬼――それも貴族クラスの眷獣の仕業だ。しかも魔力の源は一箇所ではない。少し遅れて、新たな眷獣が召喚された気配が伝わってくる。

古城たちが真っ先に思い出したのは、ジャガンとキラのことだった。〝戦王領域〟の貴族である彼らなら、このクラスの眷獣を召喚できてもおかしくはない。

問題は、彼らが複数の眷獣を使わなければならないほどの敵が存在する、ということだ。しかも戦闘が終わる気配はない。ヴァトラーの側近二人が苦戦しているということか――

「な――!?」

その直後、悲鳴を上げたのは浅葱だった。まるで真夜中のように周囲が暗くなり、激しい雷光が空一面を埋め尽くす。隕石の落下を思わせる衝撃が、人工の大地を震わせた。

古城と雪菜は声を出せずに固まっている。その衝撃の正体に、二人は気づいていたからだ。

人工島の上空を覆い尽くす魔力の塊――それはジャガンたちの敵が召喚した眷獣だった。

これほどにも凄まじい異変をもたらす存在を、眷獣と呼ぶことができるのならば、だが。

巨大すぎる質量が重力に干渉するのと同様に、巨大すぎる魔力はただそこに存在するだけで人工島の機能を狂わせる。深海に引き摺りこまれたように、大気が息苦しく濃密なものへと変わり、視界が歪む。

ここまで膨大な魔力を撒き散らす眷獣の存在を、古城たちはただ一種類しか知らない。

それは世界最強の吸血鬼――第四真祖の眷獣だけだ。

「――占城、あれ！」

稲妻が間近で炸裂した。その雷光とともに、病院の中庭へと降り立った影がある。それを指さして、浅葱が叫んだ。稲妻をまとって立っていたのは、白いローブを着た少女だ。彼女がジャガンたちと戦っていた〝敵〟なのだろう。

少女がスッと指を伸ばす。

その指先に導かれたように、巨大な雷球が地上に降り注いだ。常軌を逸した破壊力の前には、避雷針設備も防御結界も無力だった。膨大な熱と衝撃が医療棟のビルを直撃し、建物の外壁を粉々に粉砕する。

最新鋭の研究施設は、今や倒壊寸前の廃墟へと変貌していた。同じ攻撃をもう一度喰らえば、建物は跡形もなく消滅するだろう。

「なんなんだよ、あいつは!? あの中には凪沙がいるんだぞ！」

占城はそれを見てようやく我に返る。

あの少女の正体が誰であろうと関係ない。重要なのは、彼女が凪沙のいる建物を破壊しようとしているという事実だけだ。そんな蛮行を絶対に許すわけにはいかない。

だが、果たして止められるか。占城と同等以上の眷獣を操る彼女を――

「……くふっ」

そんな占城の迷いを見透かしたように、少女が振り返って占城を見た。彼女が脱ぎ捨てたロ

ーブの下から妖精めいた美貌が現れる。暴風に波打つ虹色の髪と、挑発的に笑う焔光の瞳が。

「先輩、凪沙ちゃんはわたしが――！」

戦慄する占城の耳朶を打ったのは、雪菜の鋭い声だった。

彼女がギターケースから引き抜いたのは、銀色に輝く全金属製の長槍だ。それは彼女の手の中で滑らかな金属音とともにスライドし、重厚な刃を展開する。

「姫柊!?」

「藍羽先輩のことをお願いします！」

一方的にそう言い残すと、雪菜は強化ガラスの壁を破って外へと飛び出した。

中庭には、少女が放った雷撃の余韻が今も残っている。雪菜はそこに真正面から突っこんだ。銀色の槍の一閃が、くすぶる稲妻を消滅させる。雪菜の七式突撃降魔機槍は、ありとあらゆる結界を斬り裂き、魔力を無効化する破魔の槍だ。この場で真祖の眷獣に対抗出来る人間は、その槍を持つ雪菜以外にない。

「なに、あの槍!? あの子、いったい……」

浅葱が呆然と呟いた。彼女は雪菜の正体を知らない。初めて目の当たりにする剣巫としての雪菜の姿に、さすがに圧倒されているらしい。

しかし占城は、そんな浅葱に声をかけることができない。なぜなら占城自身もまた、激しく動揺していたからだ。

ただならぬ古城の様子に気づいて、浅葱が彼の横顔を見上げる。
放心したように見開かれた古城の目は、ただ一点だけを見つめていた。雷光をまとって獰猛に微笑む虹色の髪の少女だけを――
「アヴローラ……どうして……」
古城の喉から洩れたのは、慟哭に似た悲痛な問いかけだった。

「嘘……だろ……」
「古城？」

9

マグナ・アタラクシア・リサーチ　ＭＡＲは、世界有数の魔導産業複合体だ。紘神市内に設けられた研究施設だけで、一千人近い研究者を抱える巨大企業である。
施設内の警備を担当しているのは、魔術的な回路を組みこまれた警備ポッドたち。ゴミバケツほどの大きさのカラフルな小型機械だ。
丸みを帯びた外観は、どことなくユーモラスで可愛らしい。
だがそれらが警備用というのは、表向きの建前に過ぎなかった。ＭＡＲ製警備ポッドの中身は軍用の無人攻撃機、対魔族戦闘を想定して開発された試作兵器だ。

その無人攻撃機たちが、侵入者の少女に向かって殺到し、銃弾の雨を叩きつけようとする。
新開発の白金ロジウム弾頭により、魔族に対して半永久的な損傷を与える小口径高速呪装弾。特区警備隊ですら採用を見送ったといわれる凶悪な弾丸である。
三十台の警備ポッドが、それぞれ毎分一千発の速度でばらまく弾幕の中で、しかし虹色の髪の少女は平然と微笑み、自らの眷獣に攻撃を命じた。
上空を覆い尽くす闇が巨大な雷球を放ち、それは無数の光の矢となって研究所の敷地内へと降り注ぐ。撒き散らされた熱衝撃波が無人攻撃機を粉砕し、建物の外壁と地面に巨大な破壊の痕跡を刻みこんでいった。
警備ポッドの背後に控えていた警備員たちが、悲鳴とともに逃走を始める。
少女は無人攻撃機の残骸を踏みつけながら、逃げ去る人々の背中を意外そうに眺めていた。
自分に銃口を向けた彼らが今も生き長らえていることを、訝しく思っているような表情だ。
「ふむ。彼奴らの命を救ったのは、貴様か」
爆煙の中に立っていた人影を認めて、少女が愉快そうに唇を舐めた。眷獣の攻撃を防いだのは、銀色の槍を構えた小柄な少女だ。
「そうか。第四真祖の監視のために、七式突撃降魔機槍の使い手が派遣されてきたという噂があったな。面白い――貴様に多少の興味が湧いた。名乗れ、娘」
「姫柊雪菜。獅子王機関の剣巫です」

少女の傲岸な質問に、雪菜は気丈な口調で答える。

間近で向き合った少女の鬼気は、雪菜の想像を超えていた。一瞬でも気を抜けば、たちまち戦意を奪われそうだ。これまでに彼女が相対した、あらゆる敵を凌ぐ威圧感である。

それでも槍を構え続ける雪菜に、少女は賞賛するような眼差しを向けた。

「動かないで。眷獣の召喚を解除して、わたしの指示に従ってください」

「余に指図するか。自らの分をわきまえぬ無謀な若者は好きだぞ、雪菜とやら」

くふ、と少女が口元に荒々しく笑みを刻んだ。ひときわ巨大な雷球が彼女の頭上に出現し、帯電した空気がチリチリと雪菜の肌を刺す。空一面を覆い尽くす巨大な雷雲　おそらくそれ自体が彼女の眷獣なのだろう。

「だが、聞けぬな。余の目的はまだ果たされてないのでな」

青白い閃光が雪菜に向けて放たれた。普通の人間には決して見切れないはずのその攻撃を、雪菜の槍が撃ち落とす。獅子王機関の剣巫は、霊視により一瞬先の未来を視る。その未来視によって、文字どおり閃電の速度で飛来する少女の眷獣を迎撃したのだ。

雪菜はそのまま少女に向かって走り出す。

「力ずくで余を止めるか。ますます気に入ったぞ！」

歓喜の表情を浮かべて、少女が再び攻撃を放った。しかし雪菜は止まらない。灼熱の雷撃を斬り裂いて、一直線に少女へと向かう。が、

あらゆる結界を斬り裂き、魔力を無効化する破魔の槍か　未熟ながら、よく使いこなす。だが、それだけでは余は止められぬぞ！」

「――え!?」

〝雪霞狼〟の主刃が、少女を貫く――そう思われた瞬間、雪菜は驚愕の声を洩らしていた。

あらゆる魔力を断つはずの雪菜の槍が、横殴りの衝撃を受けて軌道を逸らす。

眷獣の攻撃を受けたわけではなかった。少女が素手で〝雪霞狼〟を殴り飛ばしたのだ。

追撃しようとした雪菜の槍は、少女の蹴りに防がれた。そして彼女が放った手刀の一撃を、雪菜は紙一重で回避する。体勢を崩した雪菜に向かって、強烈な掌打が撃ち出された。その速度に雪菜は反撃できなかった。咄嗟に後退して逃れるのが精いっぱいだ。

「そんな……この動きは……」

雪菜は激しい焦燥を覚えてうめく。

目の前にいる少女は、まぎれもなく強力な吸血鬼なのだろう。彼女が操る眷獣の破壊力は、古城の〝第四真祖〟の眷獣と同等以上。だが、それだけならば〝雪霞狼〟を持つ雪菜が苦戦することはあり得ない。

雪菜がショックを受けたのは、少女が接近戦で雪菜を圧倒したという事実だった。ロタリンギアの殲教師や、獣人の傭兵とも互角以上に渡り合った雪菜が、ほとんど自分と変わらない体格の少女に一方的に追い詰められている。

しかし相手の力量に感じ入っていたのは、虹色の髪の少女も同様だったらしい。無傷で攻撃を逃れた雪菜を賞賛するように大きくうなずくと、

「くふふふっ、よく受けた。が――征け、〝シウテクトリ〟」

少女の足元から出現したのは新たな眷獣。火山の噴火を思わせる灼熱の火柱だ　大蛇のようにのたうつ爆炎の激流が、頭上から雪菜に襲いかかってくる。

「〝雪霞狼〟――！」

桁外れの熱量に唖然としながらも、雪菜はありったけの霊力を長槍に流しこみ、爆炎流を迎撃した。灼熱の奔流といえども、その正体は純粋な魔力の塊だ。魔力を無効化する〝雪霞狼〟の一撃は、熱と炎それ自体を消滅させる。

「……自ら炎の中に斬りこむか。一瞬でも恐怖に負けて〝シウテクトリ〟に背を向けたならば、その瞬間に骨まで焼き尽くしてやったものを――まずは見事。手心を加えたとはいえ、余の眷獣を二度まで防いだ者はそうはおらぬ。誇るがいい」

虹色の髪の少女が、むしろ晴れやかな口調で言い放つ。その底知れぬ自信に、雪菜は根源的な恐怖にも似た疑問を抱いた。

「あなたは、いったい……!?」

目の前の少女は、雪菜がこれまでに遭遇したいかなる敵とも異質だった。強いていえば、模造天使となったときの叶瀬夏音に近い。無尽蔵の魔力と絶対的な不死性。神々しいまでの

威圧感　通常の魔族とは違う次元　遥かな高みに、彼女は存在している

模造天使との違いがあるとすれば、彼女がまとっているのが神気ではなく、無限の負の生命力ということか。

不完全ながら彼女に近い存在を、雪菜はほかに一人だけ知っている。

それは暁古城　現在の第四真祖だ。彼が本来の真祖の能力をすべて取り戻したなら、少女と同等の存在になるのかもしれない。

だが、彼女が吸血鬼の真祖であることはあり得ない。美しくも幼い彼女の姿形は、伝え聞く三人の夜の帝国の領主たちとはまったく異なっている。

そして吸血鬼の真祖は、本来存在しないといわれる第四真祖を含めても四人だけ　――

古城が第四真祖である限り、彼女は真祖ではあり得ないのだ。

古城が本物の第四真祖である限り　――

「この力……その姿……まさか、そんな……!?」

槍を握る雪菜の手が震えた。

思い出したというよりも、考えないようにしていた事実を突きつけられたという感覚に近い。

逆巻く炎のような虹色の髪、青白く燃える焔光の瞳。畏怖とともに語られるその姿は、伝説に語られた真の第四真祖　アヴローラ・フロレスティーナのものではなかったか。

妖精の如き美貌を持つ少女の姿の吸血鬼。

その儚げな容姿だけならば、偽者と断じることもできただろう。
しかし彼女は眷獣を使う。真祖以外には使いこなせないであろう強大な眷獣を。
「征け、〝カマシュトリ〟」
立ち竦む雪菜に興味をなくしたように、虹色の髪の少女が静かに命じた。
上空を覆い尽くす黒雲から、眩い稲妻が放たれる。
狙われていたのは、雪菜ではなかった。大気を裂いて雷光が伸びていく先は、雪菜の背後にある建物——半壊した医療棟の方角だ。
雪菜が時間を稼いでいたとはいえ、職員の避難は終わっていない。研究所の付属病院には、動かすことができない入院患者も大勢いる。
しかし少女の攻撃に容赦はなかった。建物の避雷針設備はすでに破壊されており、〝雪霞狼〟とて、巨大な研究所すべてを護りきることは不可能だ。眷獣の攻撃から人々を護るものは存在しない。天災にも等しい真祖の眷獣の攻撃は、絶望的な破壊をもたらすだろう。
「ぬ？」
少女の口から低い驚きが洩れた。天空から降り注ぐ彼女の雷撃を、地上から放たれた新たな雷撃が撃ち落としたのだ。激突の衝撃で撒き散らされた稲妻が、巨大な獅子の姿へと変わり、雷鳴をまとう咆吼が大気を震撼させる。
〝獅子の黄金〟！」

雷光の獅子の姿を見上げて、雪菜が叫んだ。
虹色の髪の少女が、ようやく来たか、と微笑んで視線を巡らせる。
彼女の瞳が映していたのは、眷獣を従えて立っている古城だ。油断なく少女を睨みつけたまま、雪菜の代わりに前に出る。
「無事か、姫柊？」
全身に青白い稲妻をまとって、古城が訊いた。雪菜はその姿を呆然と見つめた。
「先輩——」
「選手交代だ。浅葱を頼む」
古城が、どこか捨て鉢な乾いた声を出す。この場にいるのは雪菜たちだけではない。古城が眷獣を喚び出した姿は、当然、浅葱にも見られている。
おそらく秘密を知られた古城より、真実を突きつけられた浅葱のほうが動揺しているはずだ。しかし今の古城たちには、浅葱を気遣っている余裕はない。出来るのは、せめて浅葱の安全を確保することだけだ。
「先輩、あの方は……」
「ああ……似てるな、アヴローラに」
虹色の髪の少女を睨んで、古城が弱々しく苦笑した。
雪菜は短い沈黙を挟んで、恐れていた事実を口にする。

「だとしたら、彼女は本物の第四真祖なんですよ？」
「だから尚更、俺が戦わなきゃいけないんだろ」
古城が双眸を紅く輝かせた。その全身から濃密な魔力が噴き上がる。
「あいつが凪沙を狙ってるんだとしたら、余計にだ！　絶対にこの病院には手を出させない。ここから先は真祖同士の戦争だ　！」
古城の怒声とともに、雷光の獅子が咆吼した。
巨大な魔力の塊が、虹色の髪の少女に向かって牙を剝く。しかし少女の表情に恐れはない。浮かんでいるのは歓喜の笑みだけだ。
膨大な魔力が解き放たれて、古城の魔力と拮抗する。
〝獅子の黄金〟か。懐かしいな――ならば、征け、〝カマシュトリ〟　！」
少女の頭上から放たれた眷獣が、巨大な雷霆となって雷光の獅子を襲った。
ともに巨大な電荷をまとう眷獣同士が、正面から激突する。その激突の衝撃波が、爆風となって周囲を無差別に襲った。古城の表情が焦りに歪む。
「……〝獅子の黄金〟が押し負ける……だと⁉」
それは信じられない光景だった。〝獅子の黄金〟の突進が、少女に触れる前に止まっている。無敵を誇った雷光の獅子が、少女の眷獣の威力に圧されているのだ。
「第四真祖を名乗りながら、やはりまだ眷獣を完全に御しきれてはおらぬか！　あまり余を

失望させてくれるな！」
吹き荒れる暴風に髪を遊ばせながら、少女が荒々しく叫んでいた。彼女の足元から炎の柱が噴き上がり、灼熱の奔流と化して古城を襲う。
「征け、〝シウテクトリ〟」
「ぐっ！　疾く在れ〝双角の深緋〟！」
古城が喚び出した暴風の眷獣が、灼熱の奔流を撃墜した。逆流してくる爆炎流を避けるため、少女は眷獣の召喚を解除する。
「くふふ……よく防いだ！　ならば　！」
少女が突然、地面を蹴って跳躍した。
吸血鬼の筋力をもってしても再現不能な、化け物めいた大加速だった。
十数メートルもの間合いを一瞬でゼロにして、少女は古城へと右腕を突き立てる。その指先からは少女の繊手に似合わぬ凶悪な鉤爪が伸びている。
「こいつ！」
少女の攻撃はよけられない――直感でそう判断した古城は、新たな眷獣を喚び出していた。
古城の全身が霧に変わり、それを刺し貫こうとした少女の右腕も霧化する。
「霧の眷獣〝甲殻の銀霧〟か　悪くない選択だが、迂闊だな！」
意思に反して消滅しようとした右腕を、少女が自らの魔力で強引に実体化させた。それに引

きざられるように古城の霧化も解除され、引き裂かれた左胸から鮮血が散る。あらゆる物質を霧に変えて消滅させる古城の眷獣も、自分と同格以上の吸血鬼には通用しないのだ。

「ぐお……ッ……！」

血まみれの少女の右腕を睨んで、古城がうめいた。吸血鬼でありながら、あたかも獣人のように変化している彼女の腕を――

「そう……か！　おまえは――！」

「ようやく気づいたか。だが遅い！　征け、〝ソロトル〟！」

少女が二体目の眷獣を召喚する。それは巨大な骸骨の巨人だ。

眼球を失った空虚な眼窩と、ぽっかりと開いた巨大な口腔、そして剝き出しの肋骨の隙間を満たすのは、一切の光を反射しない闇の空間だった。

その肋骨が扉のように開いて、あふれ出した闇が砲弾のように放たれる。空間そのものをえぐり取る貪欲な闇色の砲弾だ。

ヤバい　と古城の全身が凍った。骸骨の巨人が狙っていたのは、古城ではない。その背後にある建物だ。古城を挑発するのが目的なのか、虹色の髪の少女は、一貫して凪沙がいる医療棟だけを狙っている！

しかし空間をもえぐり取る攻撃を、どうやれば止められる――！

「疾く在れ、〝龍蛇の水銀〟！」

古城が眷獣を召喚する。水銀色の鱗に覆われた双頭の龍。それらは巨大な顎を開いて、周囲の空間ごと逆に闇色の砲弾を呑みこんでしまう。

だが、さすがに同格の眷獣が放った攻撃を喰らうのは、〝次元喰い〟の双頭龍にとっても負担だったらしい。ごっそりと魔力を消費して、古城はたまらず膝を突く。

消耗しているのは、虹色の髪の少女も同様だったらしい。存分に力を振るって満足したのか、彼女はすべての眷獣の召喚を解除して、満足げに微笑んでいた。

「――見事。我が〝ソロトル〟の穿滅空間を、よもや逆に次元ごと抉り取るとはな。なるほど、貴様はその機転をもって、あの〝焔光の宴〟を生き延びたか」

「焔光の……宴……だと!?」

どこか聞き覚えのあるその言葉に、古城は胸を締めつけられるような感覚を覚えた。失ったはずの過去の記憶が、突き刺すような痛みを訴えてくる。

「今少し貴様の器量を確かめてみたかったが、潮時か。まあいい。目的は果たしたのでな」

久々の眩い陽光に顔をしかめながら、少女が言う。

彼女が見つめていたのは、医療棟の建物だ。途中で古城に邪魔されたとはいえ、少女の眷獣はビルの外壁を大きくえぐって、地下深くに設けられた実験施設を剝き出しにしていた。

分厚い金属の内壁と、補強用の鉄骨。高電圧のコードと冷却液の循環装置。そして無数の計測機器。工場の内部を連想させる無機質な空間だ。

中央に置かれた金属製のベッドの上に、小柄な少女が眠っている。
薄い患者服だけを着せられた彼女の姿は、祭壇に横たえられた生け贄を連想させた。
「凪沙……!?」
眠り続ける妹を眺めて、古城は呆然と立ち尽くす。
横たわる凪沙の隣には、まるで鏡に映したように眠るもう一人の少女の姿がある。
彼女を包みこんでいるのは、氷河のように青白く澄んだ氷の塊だ。
かつて〝妖精の柩〟と呼ばれていたその氷塊を、古城は無言で見つめていた。

10

「古城の正体が第四真祖？」
虹色の髪の少女と古城の戦いは、いちおうの決着を見たらしい。唐突に訪れた静寂の中に、浅葱の疑問の声だけが響く。
彼女の視線の先にいたのは雪菜だった。自分を護るために戻ってきた雪菜を憤然と睨んで、浅葱は頭を抱えている。
「あの馬鹿が世界最強の吸血鬼になったって……なにそれ？　それであなたが国の特務機関から派遣されてきた監視役？　わけわかんない。なんなのよホントに……ああもう！」

「すみません。今まで隠していたことは謝ります。ですが……」
粛然と頭を下げて雪菜が言う。しかし雪菜の声音には、かすかな戸惑いの響きが混じっていた。浅葱が腹を立てるのは当然としても、彼女の反応は、雪菜の予想と少し違っている。
「あの、あまり驚かないんですね……」
雪菜に恐る恐る指摘され、浅葱は膨れっ面で髪をかき上げた。
「十年以上も魔族特区に済んでるんだから、今さら知り合いが吸血鬼や攻魔師だったくらいで、悲鳴上げたりはしないわよ。言われてみれば思い当たることも多いし。だいたい目の前であんなもの見せられたら、信じるしかないでしょうが」
「はい……すみません」
冷静に考えると雪菜が謝る理由はなかったのだが、浅葱の剣幕に圧されて、ついつい雪菜は目を伏せてしまう。
「それよりも、姫柊さん！」
「は、はい！」
全身をすくめながら、雪菜が頭を上げた。その雪菜の目の前に、ぐい、と浅葱が顔を近づけてくる。浅葱の瞳が見つめているのは、雪菜の細い首筋だ。
「あなた、古城とはもうヤッたの？」
「は……はい？」

「血を吸ったり吸われたりしたのかって訊いてるの！」

バンバン、と浅葱が乱暴に近くのテーブルを叩く。あまりにも突拍子のない彼女の質問に、雪菜の頭の中は真っ白になった。

「え!?　いえ、それは……なんというか、非常事態だったので……！」

「ヤッたの!?　何回!?」

「そ、それは――」

思わず素直に指折り数え始めてしまう雪菜。心の準備をしていなかったので、適当に誤魔化すという選択肢に思い至らなかったのだ。

「あの男はァァ……！」

「あ、藍羽先輩……？」

雪菜が折り曲げた指を見て、浅葱が眦を吊り上げた。どうやら浅葱にとって重要なポイントは、古城が人間か否かということではなく、彼が雪菜の肌に唇を触れたかどうかという　その一点にあるらしい。

取りなす言葉を選ぼうとして、しかし雪菜は不意に表情を硬くした。

「すみません、藍羽先輩。その話はあとで――」

銀色の槍を旋回させて、雪菜は音もなく前に歩み出る。雪菜が向けた視線の先には、気配もなく忽然と出現した若い男の姿があった。黒衣を着た、繊細そうな顔立ちの青年だ。

「誰……？」

男の存在に不吉な予感を覚えたのか、浅葱が警戒したように身構える。

「脱獄囚です。監獄結界からの――」

「監獄結界!?」

雪菜の短い説明に、浅葱は表情を強張らせた。彼女には、監獄結界をただの都市伝説だと笑い飛ばせない理由があった。十月末の波朧院フェスタの夜に、浅葱は監獄結界からの脱獄囚と死闘を繰り広げている。彼らの恐ろしさを誰よりも知っているのだ。

「ああ……あなたはあのときの剣巫ですか」

黒衣の男――絃神冥駕が、雪菜を一瞥して薄く失笑した。冥駕が握っていたのは左右一対の短槍。それを強引に接合し、一振りの長槍へと変える。

漆黒の長槍が放つ妖しい輝きに、雪菜は驚いて目を見張った。

「その槍、まさか――」

「さすがに気づきましたか。零式突撃降魔双槍　獅子王機関の失敗作〝廃棄兵器〟です」

「――っ！」

雪菜の目つきが険しさを増していく。脱獄囚の青年が獅子王機関の名前を口にしたことに、怒りを覚えたわけではない。彼の持つ歪な形の槍が、〝雪霞狼〟と同種の技術で造られた代物であることは、ひと目見た瞬間にわかっていたことだ。

雪菜の意識を惹きつけていたのは、槍そのものではなく、槍に染みついたかすかな異臭だった。真新しい血の臭いだ。

「矢瀬先輩をどうしたんです　？」

雪菜の問いかけに、浅葱が肩を震わせた。この状況で、脱獄囚の青年が誰かに手をかけるとすれば、それは中座して戻ってこない古城の友人である可能性が高い。

そんな雪菜たちの疑念を肯定するように、青年は穏やかに微笑んだ。

「大丈夫。死んではいませんよ。たぶん、まだ」

「くっ――！」

次の瞬間、雪菜は弾かれたように飛び出していた。これ以上、会話を続ける意味はない。まずは青年を無力化するべきだと考えたのだ。

魔族の反応速度をも上回る雪菜の神速の一撃は、男の握っている槍を叩き落とし、彼の側頭部を殴打する――はずだった。

「え!?」

だが、槍から伝わってくる手応えのなさに、雪菜は愕然と動きを止めた。

「どうしました？」

青年が、雪菜の背後から平然と声をかけてくる。彼はなにもしていない。ただ、ほんの一歩、雪菜の突進を避けるため、隣に足を踏み出しただけだ。

そんな馬鹿な、と雪菜がうめく。

雪菜の霊視は、青年の次の行動を間違いなく視ていた。雪菜の攻撃が外れることは、絶対にあり得ないはずなのだ。

「いちおう忠告しておきますが、あなたに私を斃すことはできません。優れた剣巫であるからこそ、あなたは私を傷つけることができない」

青年が淡々と雪菜に告げる。不出来な弟子に教え諭す師のような口調で。青年は最初から、雪菜のことなど、己の敵と見なしてすらいないのだ。

「獅子の神子たる高神の剣巫が願い奉る――」

雪菜は静かに祝詞を紡いだ。体内で練り上げた呪力のすべてを〝雪霞狼〟へと注ぎこみ、魔力を切り払う神格振動波の輝きへと変える。絃神冥駕がいかなる魔術を張り巡らせていようと、この輝きの中では効果を失うはず――

だが〝雪霞狼〟が放つ美しい輝きは、青年の身体に触れる前にすべて消滅していた。打ち消されたのは彼の術ではなく、雪菜が放った神格振動波のほうだ。

「……この零式突撃降魔双槍は失敗作です。七式は歪なる魔力を無効化しつつも、巫女であるあなたの霊力を増幅する　ですが、この零式は、魔力も霊力も等しく消滅させる」

動揺して動けない雪菜を、冥駕は哀むように見つめて微笑んだ。

「ゆえにこの槍は封印されました。あまりにも危険すぎるからという理由で」

「そんな……霊力も魔力も遮断された状態で、生きていられるなんて……あなたは……」

雪菜の声に焦燥が滲む。万物に陰と陽があり、始まりと終わりがあるように、霊力と魔力の拮抗は生命の揺らぎそのものである。人間であれ、魔族であれ、霊力と魔力の双方から切り離された状態で生命を維持できるはずがない。生とも死とも無縁というのは、存在しないことと同義だからだ。

「そういう体質なんですよ。いかなる異能の力の影響も受けない、完全なる傍観者としての肉体　この槍がなければ、なんの役にも立たない体質ですが」

青年が雪菜に黒槍を向ける。雪菜の霊視は、彼の次の行動を予測できない。たしかに冥駕の言うとおりだった。彼の槍は、霊力を操る剣巫の天敵だ。優れた剣巫であればあるほど、優位を覆されてしまうことになるからだ。

長い修練を経て身につけた武技まで、奪われてしまったわけではない。だが、未来視による反応速度と、呪術による筋力の強化を封じられた雪菜の身体能力は、多少運動神経がいいだけの普通の少女のものである。はたして今の状態で、監獄結界からの脱獄囚を斃せるか――

「やめなさい！」

捨て身の攻撃を覚悟した雪菜を、浅葱が荒々しく一喝する。

そして屋内に響き渡ったのは、突然の激しい銃声だった。

「そこまでよ。動かないで！」

ノートPCを開いた浅葱が、険しい表情を冥駕に向けている。
浅葱の足元には、忠実な番犬を思わせる姿でカラフルな機械が座していた。冥駕に銃口を向けたその機械は、MAR社製の警備ポッドである。
浅葱が研究所のネットワークを経由して、警備ポッドの制御を乗っ取ったのだ。吸血鬼には無力だった無人攻撃機も、相手がただの人間ならば十分過ぎるほどの殺傷力を持っている。
「魔力霊力を無効化するってことは、物理攻撃は防げないってことよね。そこから、歩でも動いたら、この警備ポッドがあんたを蜂の巣にするわよ」
キーボードに指を乗せたまま、浅葱が厳かに宣告する。
雪菜は唖然として彼女の横顔を見つめた。浅葱の膝はかすかに震えている。恐怖を感じていないわけではないのだろう。戦闘訓練など受けていない普通の女子高生なのだから当然だ。
しかし雪菜の危地を救ったのは、そんな普通の女子高生に過ぎない彼女なのだ。
「は……ははは……ははははははははははは！」
雪菜と同様に呆気にとられていた冥駕が、突然声を上げて笑い出す。
嘲笑するでも自棄になったわけでもない。晴れ晴れとした歓喜の哄笑だ。
「なにがおかしいのよ？」
浅葱が苛立ったように問い質す。馬鹿にされたと思ったのかもしれない。
しかし冥駕はゆっくりと首を振り、槍を下ろして粛々と浅葱に一礼した。

「このわずかな時間で、厳重にプロテクトされた警備ポッドをハッキングして、思いどおりに操るプログラムを流しこんだというのですか……あなたは、それがどれだけデタラメな能力か自覚していないのですか……」
「え……」
黒衣の青年の賞賛の言葉を、浅葱は途方に暮れたような表情で聞いていた。彼の突然の豹変ぶりに、どう反応するべきか迷っているのだろう。
困惑しているのは雪菜も同じだった。たしかに浅葱のハッキング技術は、尋常ではない域に達しているのだろうが、冥駕がそれほどまでに驚嘆する理由がわからない。
しかし冥駕は満足げに微笑んで、双槍の連結を解除する——
「監視していた甲斐がありました。あなたのその力こそ、あの御方が待ち続けていたものだ」
その瞬間、彼が消失させていた霊力と魔力が回復した。
雪菜が剣巫の力を取り戻す。だがそれは、冥駕も同様に、呪術を使えるようになったということだ。黒衣をまとう彼の肉体の周囲に、墨で描いたような無数の文字が浮かび上がる。
「空間制御術式——!?」
「なによそれ!? 反則じゃん！」
浅葱が警備ポッドに威嚇射撃を命じた。狙ったのは、冥駕が握っている短槍だ。しかし撃ち放たれた弾丸は、冥駕が展開した呪術結界に阻まれる。

「では、いずれまた。〝電子の女帝〟藍羽浅葱。いえ――カインの巫女よ」
静かな声で言い残し、黒衣の青年は姿を消していく。
雪菜たちは、それをただ呆然と見送ることしかできなかった。

11

どこからともなくサイレンの音が聞こえてくる。特区警備隊の治安部隊だろう。市街地で真祖クラスの眷獣が暴れ回ったのだ。たとえMARが通報しなくても、特区警備隊が押し寄せてくるのは当然の成り行きだった。
MARの敷地内は、無惨な姿を晒していた。
美しかった中庭は焼け焦げて、人工島の基底部まで剝き出しになっている。建物のガラスは軒並み砕け散り、特に被害の集中した医療棟は今にも倒壊寸前だった。
だがそれでも結果だけを見るならば、損害は軽微だったといえるだろう。
吸血鬼の真祖二人がまともに戦って、この程度の被害で済んだのだから――
「さすがは尊き我らが真祖同士の戦い　存分に堪能させてもらいましたよ」
いまだ膨大な魔力の余韻が燻る中、立ち尽くす古城たちの耳元に、軽妙な声が聞こえてくる。
やがてガラスを擦り合わせたような耳障りな音とともに、なにもない虚空に亀裂が走った。

そこから現れたのは黄金の霧だ。霧は次第に輝きを増し、美しい男の姿に変わる。
金髪碧眼の吸血鬼の貴族に――
「よもや我が眷獣に囚われておきながら、自力で脱出してくるとはな」
ちっ、と忌々しげに舌打ちして、虹色の髪の少女が呟いた。
「まずは見事と言っておこうか。察するにもっと早く抜け出すこともできたはずだが、そうしなかったのは余の寝首でも掻くつもりだったのか、ヴァトラー？」
「お戯れを、陛下――」
完全に実体化したヴァトラーが、恭しい仕草で礼をする。慇懃なようでいて、卑屈な印象は微塵もない。腹立たしいほどに気障な所作が似合う男である。
少女は少し呆れたように溜息をついて、
「喰えぬ男だ。さすがは、あの戦王めの側近よな。我が血族たちにも見倣わせたいものよ」
「……陛下？」
占城が訝しげな表情でヴァトラーに訊く。二人の会話から察するに、どうやらヴァトラーはすでに少女と一戦を交え、どこかに囚われていたのだろう。だが、そのヴァトラーをして虹色の髪の少女は、敬意を捧げる対象であるらしい。
そう、ヴァトラーはたしかに言ったのだ。古城と少女を指して、真祖同士だと
「中央アメリカの夜の帝国〝混沌界域〟の領主は、二十七体の眷獣を従え、無数の化身へと姿

を変える無貌の第二真祖――あなただったのですね、〝混沌の皇女〟」

「そのような仰々しい呼び名は好かぬ。ジャーダと呼ぶがよい」

ヴァトラーの憶測を否定する代わりに、少女は悪戯っぽく笑ってみせた。

いつの間にか彼女の髪の色が変わっていた。虹色に輝く金髪から、宝石のような淡い緑色に。焔光のような青白い瞳の輝きも消え、深い湖のような翡翠色に変わっていた。

見た目の若さはそのままだが、妖精めいた儚さは消えている。代わりに現れたのは、野生の豹を思わせる、愛らしくも力強い美貌だった。先程までの少女とは、完全な別人だ。それが彼女――第二真祖〝混沌の皇女〟の本来の姿なのだろう。

「化身……変身能力か？　その力であんたはアヴローラに化けていたのか？」

「非礼は詫びよう、暁古城。貴様を愚弄するつもりではなかった」

古城の言葉に、ジャーダが神妙な口調で答えてくる。翡翠色の彼女の瞳は、試すように真っ直ぐに古城を見据えていた。

「だが貴様に本気を出させるには、こうするのが最も容易であろうと思ってな」

「……ああ、そうだな……おかげで思い出したよ。なにもかも、全部な」

古城が静かな怒りに声を震わせる。ジャーダに対する怒りではない。過去の自分への憤り、そしてそれを忘れていた自分自身に対する憤激だ。

凪沙と、氷塊の中で眠っている少女。そしてアヴローラの姿をした少女との戦いが、忘却の底に沈んでいた古城の記憶を喚び起こしていた。凍りついていた怒りと絶望とともに。

「そうか。ならば余の役目はこれで終わりだ」

ジャーダが落ち着いた口調で言った。そして彼女は、瞳に残酷な光を浮かべ、半壊した医療棟のビルを睨め上げる。

「だが、哀れなる十一番目の亡骸を弄んだMARとやら――此奴らには、相応の報いを与えてやるべきかと思うが――」

「やめろ」

古城が、静かな憤怒を含んだ瞳をジャーダに向けた。二人の視線が刃のように交錯する。

「部外者のあんたが手を出すな。これは第四真祖の戦争だ」

「……いい覇気だ。ヴァトラーが貴様を気に入ったのも道理だな。面白い」

ジャーダが満足そうにうなずいた。

「ならば此度は貴様の顔を立てておこうか、暁古城。いずれ我が〝混沌界域〟でまみえようぞ。それまでになくしたものを取り戻しておくがいい」

少女の姿が質感を失い、虚空へと溶けこむように消えていった。ヴァトラーを異空間に閉じこめていたという眷獣の力を使ったのだろう。

彼女の存在が消えただけで、周囲の大気が重さを減らしたように感じられた。第二真祖〝混沌の皇女〟――想像を上回るでたらめな重圧感の持ち主だ。

「相変わらずおっかない婆さんだな。厄介なのに目をつけられたね、古城」

ヴァトラーが同情するような眼差しを古城に向けてくる。

冗談めかしたその言葉の裏側に、昏い炎のような響きが混じっているのを古城は感じ取っていた。貪欲な戦闘狂のヴァトラーは、ジャーダをも、いずれ彼が喰らうべき敵の一人だと見なしているのだろう。そしてジャーダ自身、そんなヴァトラーの思惑を理解した上で、彼を見逃した気配がある。互いにより強力な敵を求める――それが彼ら忌まわしき魔族の本能なのかもしれない。

「あんたに他人のことが言えるかよ」

古城はうんざりと顔をしかめて言った。そしてひどく不本意そうな口調で付け加える。

「……だけど、さっきは助かった。礼を言う」

古城の殊勝な言葉を聞いて、ふ、とヴァトラーが小さく笑った。

気づいていたのか、と言いたげな微苦笑だ。

古城との戦いの中で、ジャーダが最後に口にした潮時という言葉――

おそらくあれは、異空間からのヴァトラーの帰還を意味していたのだ。古城とヴァトラーの二人を同時に敵に回せば、いかに第三真祖といえども、不覚を取る可能性がある。だから彼女は、あのとき古城との戦いを諦めなければならなかったのだ。

もしあのまま戦闘を続けていれば、たとえ古城が生き延びたとしても、この程度の被害では

済まなかっただろう。絃神島と古城は、結果的にヴァトラーに救われたことになる。

「ハハッ、水臭いじゃないか、古城。我が愛しの第四真祖よ」

ヴァトラーは大げさな口調でそう言って、古城を誘うように両腕を広げてみせた。本能的な危険を覚えて、思わず後ずさろうとする古城。そのとき、

「古城！」

血相を変えて古城たちの間に割りこんできたのは、彩海学園の制服を着た華やかな髪型の少女だった。愛用のノートPCを楯のように構えて、ヴァトラーのことを牽制する。

「あ、浅葱……？」

「あんたたち、やっぱり……！」

「え!?」

不潔なものを見るような視線を向けられて、古城は激しく声を上擦らせた。

「ち、違う。それはこいつが勝手に言ってるだけで――」

「どうだか！」

警戒心もあらわに浅葱が睨みつけてくる。これまで散々隠し事をしてきたせいで、完全に信用を失ってしまったらしかった。この誤解を解くのは容易なことではなさそうだ。

そんな古城たちのやりとりを、ヴァトラーは少し興味深そうに眺めて、

「すまないな、古城。ゆっくり愛を語らいたいところだが、部下たちのことも心配でね。この

場の後始末はキミに任せるヨ」

「え!?」

ヴァトラーがさらりと口にした言葉に、古城は更なる焦りを覚えた。この場には間もなく特区警備隊が大挙して押し寄せてくるのだ。

MARの施設は大破。負傷者も多数。設備の損害額は一億や二億ではきかないだろう。そして主犯のジャーダは逃走済み。まさか彼女の代わりに古城に責任を取れと言うつもりか？

「カインの巫女か……いいね。愉しくなりそうだ。キミもそろそろ覚悟を決めたほうがいい」

思わせぶりな口調でそう言い残し、ヴァトラーは霧に変じて姿を消した。

残された古城は、無駄に晴れた青空を見上げて絶望に浸る。

「先輩、彼女は……」

そんな古城の隣で、雪菜がぽつりと訊いた。彼女が見つめていたのは、医療棟の地下に設置されていた巨大な氷塊と、その中に横たわる少女だった。

「……本物のアヴローラ。十二番目の〝焔光の夜伯〟だ」

忘れていたはずのその名前を、古城は掠れた声で口にした。そんな古城の傍に寄り添って、浅葱がそっと袖をつかんでくる。

「眠ってるの？」

いや、と古城は首を振った。決して溶けることのない氷塊の中で、少女は目を閉じている。

逆巻く炎のような虹色の髪　妖精めいた儚げな美貌　かつてその唇が古城の名を呼び、微笑みかけてくれたこともあったのだ。

しかし彼女が目覚めることは二度とない。

「こいつはもう死んでるよ」

氷塊の中に横たわる少女の胸には、銀色の光が輝いていた。

彼女の心臓を刺し貫くように

全金属製の小さな杭が。

切なげに目を伏せて、古城は呟く。

「俺がこの手で殺したんだ　」

第二章 道化師の追想

Reminiscence Of The Zany

1

矢瀬基樹が初めてキーストーンゲートを訪れたのは、十二歳の春、中学入学直前のある日のことだった。

〝魔族特区〟紘神市――

形式上は東京都に区分されているが、その特別行政区の施政を担っているのは、人工島管理公社と呼ばれる組織である。矢瀬家の現当主、そして矢瀬の父親でもある矢瀬顕重は公社の理事。その父親の名前で直々に呼び出されたのだ。

何重ものセキュリティチェックをくぐって辿り着いた公社のオフィスには、意外な人物が待ち受けていた。矢瀬幾磨。十歳年上の矢瀬の異母兄である。北米連合名門大学院の修士号を持つエリートで、現在は紘神市内の大学で統計数秘術を研究する傍ら、顕重の秘書のような仕事に就いていた。能力的にも実績的にも、顕重の後継者と目されている男だ。

「――暁古城？　誰だ？」

だだっ広い部屋の奥に座る幾磨に、矢瀬はぞんざいな口調で訊き返す。

正直に言えば矢瀬にとって、対談の相手が父親ではなく幾磨だったことは幸いだった。この狡猾で野心家の異母兄は、本家のほかの連中と違って矢瀬とも比較的ウマが合う。

矢瀬家の跡継ぎとして申し分のない実力を持ちながら、妾腹の子である幾磨に対する一族の風当たりは今も根強い。そのあたりが、落ちこぼれの過適応者と蔑まれて育った矢瀬の境遇と被るからなのかもしれなかった。

「おまえと同い年の少年だ。来月から彩海学園の中等部に編入することになっている」

そう言って幾磨がモニタに映したのは、幼さを残した少年の写真だった。入院中に撮られたものらしく、写真の背景は病室だ。運動神経は悪くなさそうだが、それ以外にさしたる特徴があるわけではない。屈折した部分を感じさせない彼の表情を眺めて、まだガキじゃねーか、と矢瀬は口の中で悪態をつく。

「本家からの命令だ。基樹、こいつを監視しろ」

「監視？」

幾磨の言葉に、矢瀬は思いきり怪訝な表情を浮かべた。

兄の命令が意外だったわけではない。矢瀬はこれまでにも何度か、本家の命令で似たようなことをやらされている。生まれつき持ち合わせていた過適応能力が、そのような役割に向いていると判明していたからだ。矢瀬一族は代々、過適応者を多く輩出する家系であり、矢瀬のような子どもの扱いにも慣れていた。

しかしこれまでの矢瀬の監視対象は、汚職容疑のかかった政治家や、違法な取引を画策する企業家などの犯罪者に限られていた。犯罪者ではない一般人、それも同年代の子どもの監視を

命じられるのは、さすがに初めての経験だ。

「具体的になにをどうしろって話じゃない。とりあえず彼に近づいて、行動をレポートにまとめてくれればいい。学校のほうはこちらで手配しておく。同じクラスになれるようにな」

困惑する矢瀬を無視して、幾磨が事務的に説明を続ける。矢瀬は手渡された資料を眺めて、あれ、と驚いたように唇を尖らせた。暁古城の身体データが、普通の人間のものだったことを意外に感じたのだ。

「こいつ、魔族ってわけでもないんだな」

「まあ、そうだな……彼が普通の魔族なら、そのほうが話は単純だったかもしれんが」

そう言って幾磨は、どこか厭わしげな表情を浮かべてみせた。矢瀬はますます混乱して兄を睨む。いつも小憎らしいくらい論理的な幾磨にしては、どうにも話が要領を得ない。

「どういう意味だよ？」

「見るか」

デスクの引き出しから取り出した封筒を、幾磨が矢瀬の前に置いた。矢瀬はそれを受け取って眉をひそめる。封筒の中身は、少年のものとおぼしき胸部の骨格写真だ。

「これは？」

「暁古城のレントゲン写真だ。右脇腹、第四と第五の肋骨の色が違っているのがわかるか？」

「ああ、まあ……」

照明に透かすまでもなく、異常はすぐに見て取れた。

彼の肋骨の中の一本は、明らかに普通の人間のものではなかった。水晶を思わせる半透明の輝きが、モノクロのレントゲン写真でもはっきりとわかる。

写真を眺めるふりをしながら、矢瀬はぼんやりと違うことを考えていた。右側の四番目と、五番目の肋骨――それはかつて神の御子と呼ばれた人物が槍で貫かれた場所ではなかったか。

「それは彼の本来の肋骨じゃない。移植――というよりも交換されたものだ」

「肋骨を交換？　いったい誰と？」

「第四真祖になるかもしれない女だ」

「は……？」

感情の籠もらない幾磨の言葉に、矢瀬はぽかんと間の抜けた表情を浮かべた。しかし幾磨にふざけているような気配はない。

「吸血鬼の〝血の従者〟を知ってるな」

「ああ。吸血鬼が自らの肉体の一部を与えて創り出す疑似吸血鬼――ってやつだろ」

〝魔族特区〟の住人としてはごく一般的な知識を口にして、矢瀬はハッと息を呑む。

「おい、まさか――」

「馬鹿げた再生能力を持つ吸血鬼だが、従者に与えた肉体の部位は、欠損したまま再生しない。だから普通は血を与えることで従者を創り出すわけだが、さらに強力な従者を創り出すために、

より重要な臓器を与えることがあるともいわれている」

「こいつが持ってるのは、真祖の肋骨か……！」

這い上ってくる根源的な恐怖に、矢瀬の全身が粟立った。吸血鬼の〝血の従者〟は、主人となった吸血鬼の能力を色濃く受け継ぐ。従者本来の肉体スペックや主人との相性によっては、感染源となった吸血鬼をも凌ぐことがあるとすらいわれている。もしも暁占城という少年が本当に真祖の〝血の従者〟なら、彼は真祖と同等の化け物ということではないのか

「女の肋骨を与えられた少年――神話と逆だな」

ふ、と幾磨は、めずらしく冗談めかした口調で呟いた。神がアダムの肋骨からイヴを作った、という喪われた聖書の記述を思い出したのかもしれない。

「なんにせよ、吸血鬼が従者に与える部位としては最上級の代物だ。なにしろヒトの肋骨には造血組織が含まれている」

幾磨が再び冷ややかな声で続ける。矢瀬に医学的な知識はほとんどないが、兄の言葉を聞いているだけで、暁占城が置かれている状況の異常性は理解できた。吸血鬼の力の象徴でもある〝血〟の源を彼は受け継いでいるのだ。

「こいつが真祖の〝血の従者〟だと……？」

もう一度、暁占城の写真を眺めて矢瀬が呟く。しかし幾磨は静かに訂正した。

「真祖の〝血の従者〟になるかもしれない少年だ。今の段階では、彼はただの人間だよ。十二番目の〝焔光の夜伯〟の肋骨を持っているだけの――な」

「十二番目……？　なんだ、それは？」

「おまえが知る必要はない」

そう言って幾磨は神経質そうに前髪を撫でつけた。

そして彼は、矢瀬の前に大きな紙袋を放り投げてくる。袋の中身はカプセル錠剤。錠剤を包むパッケージには、薬品名もメーカー名も記載されていない。

「これは？」

「増幅薬　おまえの体質に合わせて合成したケミカルドラッグだ。一時的にだが、過適応能力を四百倍近くまで増幅する。万一のときの保険と思ってくれればいい。直接的な副作用はないが、使いすぎるなよ。寿命を縮めるぞ」

「あんたが俺を心配してくれるのかよ？」

矢瀬が呆れ顔で苦笑した。小学校を卒業したばかりの弟に、そんな危険物を渡しておいて、口先だけで心配されても皮肉にしか聞こえない。

しかし合理主義の塊のような異母兄は、あくまでも真面目な表情で答えてくる。

「俺は利用価値があるものは利用する。それだけだ」

「そうかよ」

矢瀬が、べえ、と舌を突き出して幾磨を睨んだ。年相応の拗ねた子どものような仕草だ。

そのままオフィスを出て行こうとする弟を、幾磨が溜息混じりに制止した。
「基樹」
「ん？」
振り返る矢瀬から目を逸らしたまま、幾磨が独り言のような口調で告げる。
「おまえの役割はあくまで監視だ。親しくなるのは構わないが、情を移すなよ。つらくなるぞ」
「それは誰かの体験談かい？」
渡された紙袋を軽く持ち上げて、矢瀬はどこか切なげに笑った。
「覚えとくよ、兄貴。親父によろしくな」

2

正直に言えば、暁古城の監視任務は退屈なものだった。
四月の末に編入してきた暁古城は、第一印象に反することなく、ごくありふれたどこにでもいる少年で、彼の日常も一般的な中学生の行動パターンから大きく逸脱することはなかった。
それでも矢瀬は、本家の指令を忠実に守って監視を続けた。
本家にいる母親を慮ったというのが理由のひとつ。有力な親族の後ろ盾を持たず、しかも病弱な矢瀬の母親は一族内での立場が弱い。彼女の生活を守るためにも、矢瀬は自分が有能であることを示す必要があったのだ。
そしてもうひとつの理由は、単純に、矢瀬が古城を気に入ったということだった。
普段は怠惰で頼りなく見える暁古城という少年は、ごく希に本気を出したときにだけ、獰猛で破壊的な本性をあらわにする。間近で見ている矢瀬にとって、そんなふうに彼が時折見せる支配力と決断力は興味深いものだった。
そのような古城の二面性は、ある種の危なっかしい印象を彼に与えており、目が離せないと感じてしまうのは、それが原因なのかもしれない。
出会って一年が過ぎたころには、矢瀬は監視役という任務を忘れ、いつの間にか古城を親友と見なすようになっていた。
それが異母兄の警告に逆らうことだと、心のどこかで自覚しながらも

「――古城！」
よく晴れた秋の日、矢瀬は学校帰りに古城を見つけて声をかけた。
彩海学園最寄り駅の近くの空き地。ストリートバスケ用のボロボロのゴールに向かって、古城は一人で黙々とフリースローの練習を続けていた。
「こんなクソ暑いところでなにやってんだ。体育館に顔を出してやれよ。後輩連中が喜ぶぞ」

「やなこった。なんでタダであいつらのコーチしなきゃなんねんだよ」

歩み寄ってくる矢瀬に気づいて、古城が気怠そうに振り返る。

古城と矢瀬はバスケ部員。中学二年生ということもあって、いちおう夏の大会で引退という形になっている。しかし古城たちが通う彩海学園は中高一貫制だ。外部受験の予定がない生徒なら、部活の練習に顔を出しても文句を言われるようなことはない。

サボリ魔だった矢瀬はともかく、チームのエースだった古城なら確実に歓迎されるだろう。

しかし古城は、再び一人でシュート練習を再開した。

常夏の紗神島では、秋といっても昼間の気温は二十度に迫る。制服姿の古城は汗だくだ。

「なあ。本当にもうやんないのか、バスケ――」

コート近くの階段に腰を下ろして、矢瀬はシュートを打つ古城を眺めている。

「高等部のバスケ部は、人数が足りなくて休部中だろ。五十嵐さんや柳さんも辞めたっていうしな。まあ、しばらくはのんびりするよ」

かつて世話になった上級生の名前を挙げて、古城は言い訳がましく答えてきた。

矢瀬はやれやれと嘆息しながら頬杖をつき、

「本当にいいのか。おまえ、バスケやめちまったら本当になんも取り柄がねーのに」

「ほっとけよ！　ていうか、俺の可能性をいきなり全否定すんなよ！」

思いきりコースを外れたボールが壁を叩いて、古城が恨めしげな視線を矢瀬に向ける。

中学最後の試合を終えて以来、古城はすっぱりと体育館に近づくのをやめていた。部活の仲間とも、会えば馬鹿話くらいはするが、意図的にバスケの話題は避けているように見える。そのくせ未練がましくも、こんなふうに隠れてシュート練習を続けているのだ。

その姿はどこか痛ましくもあったが、蔑む気にはなれなかった。

古城が恐れているものの正体を、矢瀬は知っていたからだ。

あれは大会最後の負け試合

試合中の古城は、たしかに普段よりも集中していた。迂闊に声をかけづらいほどだった。しかしその日の古城の活躍は、それに輪をかけて異常だった。

人間離れした跳躍力と反応速度。異様なまでのシュートの精度。パスのミスは多かったが、それは古城の要求する速度に、チームメイトたちが対応しきれないことが原因だ。

試合は中盤から古城の独壇場へと変わり、そしてついに事件が起きた。

強引なドリブル突破を仕掛けた古城と、それをファウルで止めようとした相手チームの選手が接触。そして相手選手が重傷を負ってしまったのだ。

試合は一時中断し、救急車を呼ぶほどの騒ぎになった。

彼自身の落ち度ではなかったが、古城の動揺は大きかった。

それ以上に古城にショックを与えたのは、チームメイトたちの古城を見る眼差しだった。

彼らは皆、古城を見つめて怯えていた。治療のために古城がベンチに下がったとき、彼らに

はもう試合を続ける意欲は残されていなかった。ずるずると敗北していくチームを為すすべもなくベンチから見守り――そして古城はコートに立つのをやめたのだ。

「おまえの情報を餌に、ヨソの学校の女子マネともあちこち仲良くなれたのによ――」

古城に負い目を感じさせないように、矢瀬が茶化すような口調で言う。

「そんなことやってたのかよおまえは！」

ふざけんな、と歯を剝く古城。矢瀬は素知らぬ顔で口笛を吹く。バスケの傾向から、好きな食い物、彼女の有無まで　どのみち矢瀬は、古城に関するあらゆるデータを調べ上げ、詳細なレポートを作らなければならないのだ。それを横流しして多少の小遣いを稼いでも、今さら痛むような良心の持ち合わせはない。

それにしても古城は何故、この炎天下の中でフリースローの練習を続けているのか

矢瀬がそんな単純な疑問に思い至ったとき、彼らの背後で声がした。

「ごめんー、古城。待った？　城守センセの話が長引いちゃってさ　これお土産」

そう言いながら階段を駆け下りてきたのは、やたら目立つ容姿の女子中学生だった。中等部の制服を華やかに着こなして、両手には缶ジュースを握りしめている。

「お？　浅葱？」

幼なじみの少女を見上げて、矢瀬は驚いたように目を瞬いた。同時に彼女も、矢瀬の存在に気づいたらしく、なぜか焦ったように声を上擦らせる。

「な、なんであんたがいんのさ、基樹？」

「おおー……あれあれー……もしかしておまえら待ち合わせか？　ほー……これはこれは」

浅葱の質問には答えずに、大げさに驚いたふりをする矢瀬。そんな彼の反応に、浅葱はカッと頬を紅潮させて、

「な……なっ……なっ……なに勘違いしてるのよ、アホ基樹っ！」

「ぶおっ!?」

投げつけられた缶ジュースの直撃を腹部に喰らって、矢瀬はたまらず咳きこんだ。

「ってーな！　おまえ、缶ジュース投げるか普通!?　死ぬぞ!?」

「あんたが変なこと言い出すからでしょうが！　あたしは古城が凪沙ちゃんの病院に行くっていうから、お見舞いにつき合おうと思っただけだから――！」

苦悶する矢瀬の背中を、ばしばしとカバンで殴りながら浅葱が言い訳する。

矢瀬はその攻撃を必死で耐えながら古城を見上げ、

「お見舞い？　凪沙ちゃん、また体調を崩してるのか？」

「週末あたりからちょっとな――」

古城は素っ気なく呟いて、汚れたバスケットボールをバッグにしまう。

平静を装ってはいるものの、古城が妹を本気で心配していることを矢瀬は知っていた。

古城が絃神島に来ることになった原因は、妹の治療のためだという。しかし彼がそのことで

不満を口にしたことは一度もない。古城がバスケに打ちこんでいたのも、自分が活躍することで妹を元気づけたいという思いがあったらしい。

だが、古城がそれほどまでに妹を大切にしているのは、彼の罪悪感の裏返しだ。

おそらく古城は、今も自分自身を責めているのだ。暁凪沙が入院する原因になった事件で、彼女のことを護りきれなかったと。

しかし記憶を奪われている今の古城は知らない。その事件で彼自身が、どんな危険を体内に抱えこんでしまったのかということを――

「暇だったら、矢瀬もつき合わないか。凪沙のやつ、たぶん誰かとしゃべりたくてうずうずしてるだろうからさ。生け贄は一人でも多いほうが助かる」

その古城が、あながち冗談とも思えない口調で矢瀬を誘ってくる。矢瀬は思わず苦笑した。

常人離れした口数の多さは、暁凪沙という少女の数少ない欠点だ。病室で退屈を持て余している彼女の話し相手になるのは、まさしく生け贄という表現が相応しい。

「ああ、そうだな。そういうことなら――」

うっかり誘いに乗りかけた矢瀬は、不意に突き刺さるような視線を感じて言葉を呑みこむ。

ふと顔を向けると、浅葱が拗ねた子どものような表情で慌てて目を逸らすのが見えた。

「な、なによ」

ぎこちない口調で誤魔化そうとする浅葱。矢瀬と一緒のほうが気楽だが、古城と二人きりと

いうのも捨てがたい、という葛藤が滲み出ている表情である。

「いや、悪い。今日のところは遠慮しとくわ。このあとちょっと用があってな」

浅葱に気を遣ったわけではなかったが、矢瀬はそう言って立ち上がった。

じゃあな、と駅に向かう古城たちを、夕焼けの下で手を振って見送る。

「……」

そして矢瀬は、バスケットゴールを無言で見上げた。

試合のあとの血液検査でも、異常はなにも見つからなかった。暁古城は間違いなく普通の人間だ。しかし古城は無意識に気づいているのかもしれない。

中学最後のバスケの試合で、彼が見せた驚嘆すべきパフォーマンスの源に――

報告書はすでに提出してある。しかし本家からの指示はない。

缶ジュースの爆撃で痛む脇腹を押さえて、矢瀬はとぼとぼと歩き出す。

今の矢瀬にできるのは、親友の監視を続けることだけだ。

古城がこれ以上の苦しみを背負わぬようにと祈りながら。

それが決して叶わぬ祈りであることを知りながら

3

夕闇が絃神市街を覆い始めたころ、矢瀬はモノレールの改札を出て、人工島北地区の交差点に立っていた。五百メートルほど前方には、肩を並べて歩く古城と浅葱の姿がある。

遠目には、人が腕を組んでいるようにも見えるが、実は浅葱が、古城の脇腹に肘打ちを喰らわせた直後である。会話の内容までは聞き取れないが、どうやら古城のボケに浅葱がきついツッコミを入れたらしい。息が合っているといえなくもないが、初々しいカップルのやることではない。どちらかというと漫才コンビか、気心の知れた悪友同士という雰囲気だ。

「なにやってんだあいつは……」

相変わらずな浅葱の恋愛スキルの低さに、矢瀬は思わず目元を覆う。

矢瀬が古城を気に入っている理由はもうひとつ――それは藍羽浅葱の存在だ。

浅葱と矢瀬は、ともに小学校入学前からのつき合いだ。同じ保育所で毎晩いちばん遅くまで、一緒に保護者の迎えを待っていたという関係である。互いに家庭環境に若干の問題を抱えていたこともあり、実の兄妹よりもむしろ気心の知れた間柄だといえる。

だが、過適応能力の助けもあって生まれつき人あしらいに長けていた矢瀬と違い、浅葱は、人付き合いが上手いほうではなかった。特に小学生時代の彼女はクラスでよく孤立していた。

嫌われていたというよりも、恐れられていたという表現のほうが近い。浅葱のずば抜けた成績の良さと端整すぎる顔立ちが、彼女から同性の友人を遠ざけたのだ。歳の離れた姉を除けば、

浅葱に同性の遊び相手は少なく、矢瀬と行動することのほうが多かった。

その状況を一変させたのが、ほかならぬ暁古城だった。

病院の待合室で偶然交わした短い会話がきっかけで、浅葱はなぜか古城のことを、妙に意識してしまったらしい。

それからの浅葱は、傍から見ていても健気だった。人付き合いが苦手なりにせっせと口実を作っては古城に話しかけ、多少やりすぎな印象はあるがメイクやファッションにも心血を注いだ。バスケのルールも完璧にマスターし、古城とNBAの戦術を議論するまでになった。

そんな浅葱の行動によって、クラスの女子の態度も変わった。

いつの世も多くの女子は悲劇のヒロインの味方である。

はからずも浅葱の不器用さがクラス中に知れ渡り、取っつきにくい美人というイメージが、可愛いのに報われない恋愛ベタの同級生という評価に置き換えられてしまったのだ。

一度壁が崩れてしまえば、浅葱の持ち前のスペックの高さは、クラスメイトに好印象を与えるのに十分だった。かくして浅葱は浅葱のまま、周囲に受け入れられる形になった。

経緯はどうあれ、結果的に古城は浅葱を救ったことになる。もちろん口には出さないが、矢瀬はそのことで密かに古城に感謝しているのだ。

だがしかし、矢瀬はそんな古城たちに気を利かせて、凪沙の見舞いを断ったわけではなかった。彼が病院に同行できなかった理由はほかにある。

「……」

歩道を歩く古城と浅葱の後方　二百メートルほどの距離を維持して、見慣れない人影が移動を続けていた。ボンデージ風の黒革ワンピースにコートという、いかにも怪しげな服装の若い女だ。ちょうど短機関銃を収納できる程度の、金属製のアタッシュケースを提げている。

古城たちが歩いている人工島北地区は、企業や大学の施設が建ち並ぶ研究所街である。前時代的な殺し屋風ファッションの女は、そんな近代的な街の風景に紛れこんだ異物のようで、どうしようもなく目立っていた。

極めつけは女の手首に輝く、金属製の真新しい腕輪だ。

「魔族登録証か……登録魔族が、どうして……？」

矢瀬は慎重に距離を保ったまま、女の行動を観察する。

彼女の存在に気づいたのは、古城が黙々と公園でフリースローを続けている最中だ。彼女が、古城を追跡しているのは間違いなかった。しかし目的がわからない。矢瀬が古城の監視を始めて二年半もの間、古城に近づいてくる魔族は皆無だったのだ。

目的の病院に近づいて、古城と浅葱が歩道橋を渡る。続けて女も階段を上った。

そして彼女の姿が矢瀬の視界から消えた直後、その気配までもが消滅する。

「なに――!?」

矢瀬は動揺して駆け出した。耳に当てていたヘッドフォンを外して、聴覚に意識を集中する。

矢瀬は音に特化した過適応能力者だ。その気になれば、足音どころか数百メートル離れた相手の呼吸や心臓の鼓動までも知覚することができる。しかし古城たちを追っていた女の痕跡は、そんな矢瀬の能力をもってしてもつかめない――

歩道橋の上に置かれていたのは、女が提げていた金属製のアタッシュケースだけだ。

「俺が……見失っただと!? 馬鹿な!?」

矢瀬は呆然と呟いた。その声が無人の歩道橋の上で拡散して消えていく。

能力によって拡張された矢瀬の聴覚が、その反響のわずかな違和感を聞き取った。音の伝達速度のわずかなズレ。その原因は大気中の湿度の偏在だ。

「霧化!? そうか、D種――!」

女の正体に気づいて矢瀬が振り返る。矢瀬が天然モノの超能力者ではなく、訓練された攻魔師ならば、周囲に漂う濃密な魔力の存在にもっと早く気づいていただろう。

女の正体は吸血鬼。それも〝忘却の戦王〟の血脈に連なる〝旧き世代〟だ。このクラスの吸血鬼ならば、霧化によって姿を消すのも難しくはない。

矢瀬の尾行に気づいた女は霧化によって姿を隠し、まんまと彼を誘き出したのだ。

「紘神島の住人……学生か。ただの人間というわけでもなさそうね」

黒いコートを翻して、歩道橋の手すりの上に女が実体化する。見た目の年齢は、後ろ姿から想像していたよりもずっと若い。十七、八か、せいぜい二十歳。絹糸のように艶やかなブルネットの髪を夕闇になびかせ、真紅の瞳で矢瀬を睨めつける。

「どうして私を尾行していたのか、素直に答えるつもりはある?」

女が魔族登録証を外して訊いてきた。特区警備隊に通報される危険を冒してでも、眷獣を喚び出すつもりなのかもしれない。もちろん矢瀬に、吸血鬼の眷獣と戦り合うほどの力はない。背筋にじっとりと冷や汗が滲む。

「……あんたこそ、中学生をこそこそ尾け回してなんの真似だ? 年下趣味か?」

内心の焦りを押し隠して、矢瀬は不敵に笑ってみせた。実際に生きてきた長さはともかく、吸血鬼の精神年齢は外見に比例することが多いといわれている。つけいる隙があるとすれば、その精神的な未熟さだろう。

「だ、誰が――!?」

そして矢瀬の目論見どおり、女吸血鬼はあっさりと挑発に乗ってきた。

自分が不安定な手すりの上に立っていることも忘れて足を踏み出し、バランスを崩す。彼女はそのまま歩道橋の上に落下。腰と背中をしたたかにぶつけて、痛々しい音を立てた。

「痛たたたた……!」

後頭部を押さえたまま、涙目になる女吸血鬼。矢瀬はそんな彼女を、どこか哀れむような表情で見つめる。いつの間にか恐怖は消えていた。戦闘を生業とする吸血鬼にしては、彼女はあまりにも無防備すぎる。間違いなく素人だ。尾行に不向きな目立つ服を着ている時点で、予想

すべきことではあった。

「あー……おい、大丈夫か……？」

「だ、大丈夫に決まってるでしょう！　カルアナの娘である私が、これくらい……」

短いスカートの裾を必死で押さえながら、女吸血鬼が立ち上がる。彼女が無意識に口にした単語に、矢瀬はかすかな困惑を覚えた。

「カルアナ……？　〝戦王領域〟カルアナ伯爵家の生き残りか？」

「な!?　なぜそれを……!?」

驚愕の表情を浮かべた女吸血鬼を、矢瀬は軽い脱力感とともに眺める。

「いや、あんたが自分でそう言ったんじゃねーか」

「う……く!?」

矢瀬の指摘に、彼女は狼狽えたように激しく首を振り、

「ち、違っ……こんな東の果てに住んでるおまえが、そんなことを知ってるはずがない、って意味なの！　カルアナ伯爵家の名前も、一族虐殺のことも　」

「上手く誤魔化したな……」

「うるさいっ！」

ついに癇癪を起こしたように彼女は怒鳴った。そして矢瀬の胸ぐらを乱暴につかみ上げる。いくら素人とはいえ、吸血鬼の腕力だ。矢瀬が少しばかり抵抗したところで、逃れられるはずもない。大人しくなった矢瀬を見て、ようやく彼女は微笑んだ。その唇から美しい純白の牙がのぞく。

「その服、暁古城と同じ制服ね！　わざわざ彼の学校に監視者を潜ませていたの？　どの派閥の手の者？」

「……派閥？」

矢瀬が苦しい呼吸の中でうめいた。女吸血鬼の発言は、彼女以外にも古城を狙う複数の勢力が存在していることを示している。古城の監視役としても友人としても、看過できない状況だ。

「無用な騒ぎを起こしたくないのは、そちらも同じだと思ったけど？」

質問に答えようとしない矢瀬の態度を、非協力的だと判断したらしい。矢瀬の喉を圧迫する女吸血鬼の指が、力をじわじわと増していく。

「どうして……吸血鬼が古城を狙っているんだ……!?」

掠れた声で矢瀬が訊いた。その瞬間、女吸血鬼の瞳にかすかな戸惑いが浮かんだ。矢瀬が、彼女の目的とは無関係の部外者であるという可能性に、ようやく思い至ったらしい。

「私が暁古城を……狙う？　なんのこと？　おまえは鍵を探していたのではないの？」

「……鍵……だと？」

女吸血鬼は、しばし逡巡するように唇を噛んだあと、指の力を抜いて矢瀬を解放した。弱々しく咳きこみながら、矢瀬は彼女を静かに睨む。

このブルネットの女吸血鬼は、どうやら古城を狙っていたわけではないらしい。それでも彼女が古城を追跡していた事実は変わらない。

彼女が敵かそうでないのか、判断するのはこれからだ。

まともに戦って吸血鬼を艶すほどの力は矢瀬にはないが、彼女が騒ぎになるのを恐れている登録魔族であれば話は別である。おまけに彼女は迂闊な性格で、挑発にも弱い。そのあたりを上手く利用してやれば、有益な情報を引き出すことができるはず――

「――っ!?」

しかし交渉を始めようとした矢先、矢瀬は全身に凄まじい苦痛を覚えて膝を突いた。

大気が裂けるような凄まじい衝撃に、古城たちの動きを捕捉するための〝音響結界〟が破られる。夕闇の空を染めたのは、突如として地上に出現した青白い雷光だ。

「まさか!?」

ブルネットの女吸血鬼が、眩い雷光に目を細めて息を呑む。

驚愕に顔を歪ませて彼女が見上げていたのは、逆光の中に浮かび上がるビルの屋上――

そこに立っていたのは、青白い稲妻に包まれた一人の少女だった。

4

「誰だ……!?」

矢瀬が見知らぬ少女へと視線を向けた。

異変が起きたのは、その直後のことだった。

眩い閃光が視界を染めた。焼けつくような肌の痛みとともに、歩道橋の上にいた矢瀬たちが吹き飛ばされる。オゾンの異臭が鼻を突き、帯電した大気に髪が逆立った。

「ぐっ……落雷か!?」

首にかけたヘッドフォンが火花を散らし、矢瀬は舌打ちしてそれを投げ捨てる。あまりにも刹那の出来事で、なにが起きたのか理解できなかった。ビルの上の少女と目が合った瞬間、矢瀬たちは衝撃に襲われていたのだ。

「違うの！　あれは――」

歩道橋の手すりに激突した女吸血鬼が、後頭部を押さえて上体を起こす。知ってるのか、と矢瀬は彼女に視線を向け、あ、と思わず声を洩らした。

尻餅をついた彼女のスカートの中身が、矢瀬の位置からは予期せず丸見えだった。黒いレースのガーターベルトは、中学生男子には少し刺激が強すぎる。

「み、見たわね!?」

「そんなこと言ってる場合か！」

「カルアナの娘である私に、なんという恥辱――！」

女吸血鬼が頬を真っ赤にして全身を震わせる。話にならねえ、と矢瀬は諦めて、再びビルの上に視線を向けた。

稲妻をまとっているのは、十四、五歳程度の小柄な少女だ。男子のように短く刈り込んだ髪は金髪。瞳は焔のような青白い輝きを放っている。彼女の全身を覆っているのは、金の縁取りを施した白金の鎧だった。明らかな戦装束である。

「くそ。なんだ、あいつは――!?」

「この雷……ペンプトス！　王自らが、どうして……!?」

ブルネットの女吸血鬼が、鎧の少女を見上げて呆然と呟いた。彼女の全身が震えているのは、落雷の衝撃だけではないだろう。彼女は鎧の少女に怯えているのだ。

「あいつも吸血鬼なのか？　今の攻撃……眷獣ってわけじゃないみたいだが……」

「吸血鬼!?　冗談じゃないわ。あいつらはただの化け物。殺神兵器よ！」

矢瀬の質問に、女吸血鬼が怒鳴り返す。聞き慣れない単語に、矢瀬は戸惑った。白金の鎧をまとう美しい少女は、兵器という言葉から連想するイメージとはほど遠い。そして、

「――鍵を渡せ、ヴェルディアナ・カルアナ」

鎧の少女が厳かな口調で命じた。焔の双眸が見つめているのは、矢瀬の傍にいる女吸血鬼だ。ヴェルディアナというのが彼女の名前らしい。

「鍵……？」

少女の言葉で矢瀬は理解する。先ほどの閃光は、ただの脅しだ。威力を絞った上に、わざと直撃を避けたのだ。ヴェルディアナが持っている〝鍵〟とやらを手に入れるために。

「鍵を渡せ。それとも、死ぬか――？」

鎧の少女が再び告げた。彼女の全身を包む稲妻が輝きを増す。

ヴェルディアナは、くっ、と唇を噛みしめて矢瀬に視線を向けてきた。

「そこのおまえ、名前は――？」

「……矢瀬だ。矢瀬基樹」

矢瀬は素直に質問に応じる。その程度で彼女の信用が得られるのなら安いものだ、と思う。

ヴェルディアナは満足そうにうなずくと、矢瀬を庇うように立ち上がって前に出た。

「いいわ、基樹。私が時間を稼ぐの。だから、そのケースをＭＡＲの暁深森に届けて！」

「おい……!?」

ヴェルディアナがやろうとしていることに気づいて、矢瀬が表情を凍らせる。

女吸血鬼の全身から血霧が噴き出し、それは巨大な猛犬の姿へと変わった。炎を吐く二つ首の眷獣だ。彼女はこんな街中で、眷獣戦を仕掛けるつもりなのだ。

〝魔族特区〟育ちの矢瀬といえども、間近で吸血鬼の眷獣を目にした経験は多くない。妖犬が放つ爆発的な魔力に思わず圧倒されそうになる。

「〝ガングレト〟　お願い！」

ヴェルディアナが自らの眷獣に、鎧の少女への攻撃を命じた。

矢瀬はその間に、歩道橋の隅に転がっていた金属製のケースを拾い上げる。おそらくこのケースの中身こそ、鎧の少女が求めている〝鍵〟なのだろう。

このケースを受け取ることは、鎧の少女を敵に回すということでもある。それでも矢瀬は迷わなかった。なぜならヴェルディアナの口からは暁深森――古城の母親の名前が出たからだ。

ヴェルディアナが暁深森の協力者なら、古城の味方と見なしても間違いないだろう。だとすれば矢瀬には、彼女に協力する理由がある。

そして矢瀬には勝算があった。異母兄から渡された増幅薬だ。

このクソ不味いカプセル錠剤の効果は、自分自身の肉体で実験済みである。ケミカルドラッグによって増幅された矢瀬の過適応能力は、気流を自在に操って暴風を巻き起こす。その気流を利用すれば、時速九十キロ以上――百メートルを四秒台という驚異的な速度で疾走することが可能だった。深森のいるMARの研究所までは四十秒もかからない。ほんの一分足らずの間、ヴェルディアナが持ちこたえてくれれば、矢瀬は目的を果たせるはずだった。

「アアアアア――――ッ！」

だが、矢瀬がカプセル錠剤を口に含むその前に、ヴェルディアナが悲鳴とともにくずおれる。愕然と振り返った矢瀬が見たのは、眩い閃光に押し潰されるように消滅していく妖犬の姿だった。夕闇の空に出現していたのは、雷光をまとう巨大な獅子だ。

ヴェルディアナの眷獣の全長は四メートル余り。それだけでも〝旧き世代〟の眷獣に相応しい驚嘆すべき怪物だが、雷光の獅子の巨体は、それをはるかに上回っていた。優に十数メートルを超えるその威容は、空一面を覆い尽くしているような錯覚すら与えてくる。

その獅子の前肢の一撃が、ヴェルディアナの眷獣を跡形もなく消滅させたのだ。

「なんだ、こいつは……!?」

矢瀬は呆然と空を見上げて立ち尽くす。

おそらくその雷光の獅子も眷獣なのだろう。実体化し、自らの意思を持つに至った濃密な魔力の塊だ。だがこれは、あまりにも強大過ぎる。たった一名の吸血鬼が使役できる召喚獣の規模ではあり得ない。これだけの魔力が無秩序に解き放たれたら、最悪、絃神島の半分は焼き払われて消滅する。

眷獣を失い、半ば放心したように倒れたヴェルディアナを、鎧の少女が睨め下ろす。

少女が従えた雷光の獅子が、再び前肢を振り上げた。

やめろ――と矢瀬は手を伸ばす。が、その行為にはなんの意味もない。雷光の獅子の攻撃は、矢瀬をも巻きこんでヴェルディアナを襲ってくる。

交差点に跨がる巨大な歩道が、瓦礫すら残さず一瞬で消滅した。

しかし恐れていた衝撃が、矢瀬を襲ってくることはなかった。

爆発音も悲鳴も、風の音すら聞こえない。完全な静寂だけが矢瀬たちを包みこむ。

その静寂を破ったのは、どこか現実離れした穏やかな少女の声だった。

「止まりなさい、五番目――五番目の〝焔光の夜伯〟」

その声と同時に、世界に音が戻った。

歩道橋を蒸発させた熱衝撃波の余韻が、爆風となって矢瀬の頬を打つ。

ヴェルディアナと重なるようにして矢瀬が倒れていたのは、歩道橋から二十メートルばかり離れた道路の片隅だった。矢瀬たち自身も気づかぬうちに、一瞬で移動させられていたのだ。

「な……なんだ……」

記憶が欠落したような気持ち悪さを覚えて、矢瀬は乱暴に首を振る。空間制御の魔術に特有の、船酔いに似た感覚はなかった。むしろコマ落ちした映画を観ているような不快感に近い。

ページを破り取られた本のように、時間のつながりが途切れている。

「〝静寂破り〟（ベーバーノイズ）……！」

矢瀬に抱き起こされたヴェルディアナが、顔を上げて呆然と呟いた。

彼女が見ていたのは、無人の道路のほぼ中央――そこに立っている制服姿の少女だった。

眼鏡をかけて、小脇に一冊の本を抱えた地味な印象の少女である。

「おまえは……！」

五番目と呼ばれた鎧の少女が、怒りに眉を吊り上げた。本を抱く少女を右手で指差し、雷光の獅子に攻撃を命じる。

その瞬間、世界を再び沈黙が支配した。

「――！」

鎧の少女の右腕が、二の腕のあたりで音もなくちぎれた。

そして見えない鉄槌に殴られたように、彼女の身体が吹き飛んだ。矢瀬たちの眼前に少女は墜落し、そのままアスファルトの路面にのめりこむ。

世界に音が戻ってきたのは、その直後だ。

ごふっ、と少女の口から血塊がこぼれた。魔力の供給が途切れたのか、雷光の獅子の巨体が蜃気楼のように揺らいで消滅する。

矢瀬たちには、なにが起きているのかわからない。〝静寂破り〟と呼ばれた制服の少女は、

ゆっくりと振り返って鎧の少女を見下ろした。

「あなたの行為は〝宴〟の掟に抵触しています。これ以上の戦闘行動を続けるなら、采配者（ブックメーカー）の権限で、今すぐあなたを失格させることになりますが――」

〝静寂破り〟が持っていたのは、切断された鎧の少女の右腕だった。彼女はそれを無造作に鎧の少女に投げ返す。

全身の鎧を軋ませて、五番目と呼ばれた少女が起き上がる。

憎悪の眼差しで〝静寂破り〟を睨みつけたまま、彼女は全身を再び稲妻に包んだ。そして雷光の速度で何処かへと飛び去っていく。

溜息混じりに彼女を見送って、次に〝静寂破り〟は矢瀬たちのほうへと視線を移した。

正確に言えば、彼女が冷ややかな視線を向けていたのは、矢瀬に支えられているヴェルディアナである。

「さて、ヴェルディアナ・カルアナ――なぜ、あなたがここにいるのか、説明してくれますか。カルアナ伯爵家は〝宴〟の参加資格を失ったはずですが？」

〝静寂破り〟が穏やかな口調で訊いた。ギリ、とヴェルディアナは牙を鳴らして、喉の奥から必死で声を絞り出す。

「十二番目の〝焔光の夜伯〟を護ったのは姉さんよ。カルアナの一族は彼女に賭ける権利があるわ。十二番目に――！」

真紅の瞳で睨みつけてくるヴェルディアナを、〝静寂破り〟は無感情に見つめた。衣擦れのようなかすかな音が矢瀬の耳を打つ。

「いいでしょう。あなたの資格についての判断は保留します。ですが、それまでは――」

そう告げる〝静寂破り〟の手の中に、いつの間にか金属製のアタッシュケースが出現していた。矢瀬が握っていたはずの、ヴェルディアナの荷物である。

「この鍵はわたくしが預かります」

淡々と告げる〝静寂破り〟を、ヴェルディアナが怒りもあらわに睨みつけた。荒々しく路面を殴りつけたヴェルディアナの拳に血が滲む。

「獅子王機関……！」

屈辱に震えるヴェルディアナが、吐き捨てるように呟く。

そんな彼女に無防備に背中を向けて、〝静寂破り〟は立ち去っていく。

彼女の姿が見えなくなると、あとには矢瀬とヴェルディアナだけが残された。

破壊された歩道橋に気づいて、道路には野次馬が集まってきている。あと数分も経たないうちに、警察や特区警備隊も駆けつけてくるだろう。人工島管理公社の間諜である矢瀬にとって、特区警備隊は身内も同然だが、さすがに今回は彼らに捕まると面倒なことになりそうだ。一度この場を離れたほうがいいだろう。

だがその前に矢瀬には、確認しておかなければならないことがある。

「どういうことか、説明してもらえるか。ヴェルさんよ」

「なに馴れ馴れしく呼んでるの――」

項垂れていたヴェルディアナが、不機嫌そうに顔を上げて矢瀬を見た。そんな彼女の瞳が、驚愕で大きく見開かれる。

「基樹、それは――！」

「こんなこともあるかと思って、念のためにな」

そう言って矢瀬は、背中に隠してあった荷物を持ち上げてみせた。布に包まれた金属の棒だ。銀色に輝く表面には細かな魔術文字がびっしりと刻まれて、どこか未来的な印象を受ける。

直径は二、四センチほど。長さは五十センチ弱。片側の先端は鋭く研ぎ澄まされている。槍と呼ぶには短すぎるし、矢にしては重すぎる。杭という表現がいちばんイメージに近い。

その杭こそが、ヴェルディアナが矢瀬に託したアタッシュケースの中身だった。〝静寂破り〟が鎧の少女と戦っていた一瞬の隙に、矢瀬は彼女たちの目を盗んでこれを取り出し、制服の背中に隠しておいたのだ。

「あの状況で、よくも……とんでもない悪党ね、おまえは」

ヴェルディアナが、感心したように大きく息を吐く。

「こいつのことを鍵と呼んでたが――」

「そうね……鍵よ。〝柩〟の蓋を開けるためのね」

そう言ってヴェルディアナは、矢瀬の手から杭を奪いとろうとした。しかし矢瀬はひょいと彼女の手をよけて、

「こいつを返す前に、聞かせてもらえるか。十二番目の〝焔光の夜伯〟ってのはどういう意味だ？」

しばしヴェルディアナは恨みがましい視線を矢瀬に向けたあと、やがて思い直したように姿勢を正した。矢瀬のことを協力者と見なし、相応の礼を尽くそうと考えたのかもしれない。

今の彼女の表情には、貴族を名乗るに相応しい気品が、残り香のようにかすかに感じられた。

「……第四真祖のことは知ってるわね」

ヴェルディアナが静かに問いかける。矢瀬は顔をしかめてうなずいた。

「存在しないはずの四番目の真祖、世界最強の吸血鬼、か？」

「そうよ。だけど考えたことはある？　公に存在が認められている真祖は三名だけ――なのに、どうして存在しないはずの第四の真祖が歴史上、何度か出現して世界に混乱をもたらした記録が残されているのか。なぜ、ほかの真祖たちまでもが、〝焔光の夜伯〟を世界最強の吸血鬼だと認めているのか？」

ふむ、と矢瀬は低く唸った。子どもじみた都市伝説として深く気にしたことはなかったが、彼女が最後に口にした疑問だけは、言われてみれば奇妙だと感じられた。

沈黙する矢瀬を見て、ヴェルディアナは少し得意げに笑う。

「口に出してしまえば簡単なことよ。第四真祖は人工的に創り出された存在なの。ほかならぬ三名の真祖たちによって設計された世界最強の吸血鬼――それが第四真祖。〝焔光の夜伯〟というのはね、第四真祖を生み出す計画の名前なのよ」

「真祖を……生み出す計画だと……」

矢瀬の全身が総毛立った。彼女の言葉を、馬鹿げた妄言だと笑い飛ばすことはできなかった。なぜなら矢瀬は、鎧の少女が従えていた雷光の獅子を見ていたからだ。

天災にも匹敵するほどの馬鹿げた威力の召喚獣――あれこそまさに第四真祖の眷獣ではなかったのか？

矢瀬はふと思い出す。万華鏡の模様を生み出すのは、内蔵された三枚の合わせ鏡。ならば〝熔光の夜伯〟という名前こそが、第四真祖の役割を象徴しているのではないのか。三名の真祖の手によって人工的に生み出された〝世界最強の吸血鬼〟という役割を――

「第四真祖は、兵器だと言ったな」

矢瀬が低い声で訊き返す。兵器であれば、量産されていてもおかしくない。十二体、あるいはそれ以上の数が造られていたとしても。だから問題なのはそこではない。

「兵器ってのは、なにかと戦うために存在するんだぜ。世界最強の吸血鬼なんてものをわざわざ拵えて、真祖たちはなにを始める気だ？」

「そんなの決まってるじゃない」

そしてヴェルディアナ・カルアナは、その言葉を静かに口にする。

水平線に沈む黄金の夕陽が、悲壮な決意に彩られた横顔を静かに照らしていた。

「〝聖殲〟よ」

終章
Outro

矢瀬基樹は、海沿いにある防波堤の斜面で目を覚ました。

空はすでに夕闇が濃く、海風が冷たく感じられた。穏やかな波音が樹脂製の消波ブロックに反響し、潮の香りが鼻につく。血に濡れた制服がずっしりと重い。

人工島北地区のビル街で絃神冥駕と遭遇し、彼に斬られたことは覚えていた。気流を操って自ら背後に跳ぶことでどうにか致命傷を避け、たまたま通りかかったトラックの荷台に落ちることで、冥駕の追撃を逃れたのだ。だが、記憶が残っているのはそこまでだった。

「気がつきましたか、基樹――」

横たわる矢瀬のすぐ隣で声がした。彩海学園の制服を着た少女が、読みかけの本の表紙を閉じて振り返る。いつもと変わらぬ彼女の素っ気ない態度に、矢瀬は苦笑して息を吐いた。

「あんたか、先輩」

そう言って矢瀬は上体を起こし、全身を貫く激痛に悲鳴を洩らす。苦悶する矢瀬を無感動に眺めて、〝静寂破り〟――閑古詠が静かに言った。

「まだ起き上がらないほうがいいですよ。ちぎれた血管と筋肉はつないでおきましたが、応急処置です。普通に動けるようになるまで二週間はかかるでしょうね」

「どうやらそうみたいだな」

再び防波堤に突っ伏して、矢瀬は乱れた髪を乱暴に撫でつけた。

古詠はそんな矢瀬の姿を見ても、膝枕はおろか、彼の汗を拭おうともしない。まるで自分の血塗られた指先が、矢瀬に触れることを恐れているかのような態度だ。

「初めてあんたと出会ったときの夢を見ていたよ」

矢瀬が独り言のようにぼそりと呟く。

古詠は矢瀬を見つめたまま、淡い雪のような哀しげな笑みを浮かべてみせる。

「ほんの一年ばかり前の出来事が、まるで遠い昔のようですね」

「ああ、そうだな」

まったくだ、と矢瀬は自嘲するように目を閉じる。あの日からのわずかな時間に、あまりにもたくさんのことがありすぎた。人工島の一区画が沈み、大勢の人間が死んだ。そして古城は、あまりにも過酷な運命を背負いこんだ。そのことを矢瀬は今でも悔やんでいる。

「あんたがここにいるってことは、古城たちは無事だったみたいだな」

矢瀬はもう一度起き上がって古詠を見た。古詠は少し呆れたような表情で首肯して、

「ええ。第二真祖〝混沌の皇女〟は立ち去りました」

「混沌の皇女〟だと……」

そうか、と矢瀬は不愉快そうに目を眇めた。

第二真祖ジャーダ・ククルカン――ヴァトラーの側近たちが蹴散らされたことも、あの強大な眷獣も、彼女の仕業ということならば、なにもかもが腑に落ちる。

「MARの施設には大きな被害が出ていますが、この件に関しては彼らは沈黙を守るでしょうね」

「……連中も後ろ暗いところがありまくりだからな」

「いえ。今回の被害を必要経費として差し引いて有り余るくらい、利益を上げているからです。紘神支社の――いえ、暁深森の研究は」

「嫌な世の中だな……俺が言えた義理じゃないが……」

矢瀬は気怠げに顔をしかめて嘆息する。後ろ暗い駆け引きで利益を上げているのは彼の実家、すなわち矢瀬財閥も似たようなものだ。

「紘神冥鴛は気づいたみたいです。あなたの幼なじみの秘密に」

一瞬の静寂を破って、古詠が言った。

矢瀬の表情が凍りつく。取り繕うこともできずに狼狽する彼を、古詠はどこか満足げな表情で眺める。誰かの愛情を独占しようとする幼い子どものような、無邪気に残酷な表情で。

「浅葱の秘密……だと!? そうか！　クソ、そういうことかよ……！」

傷の痛みも忘れて、矢瀬は古詠を睨みつけた。無表情な彼女に荒々しく詰め寄る。

「それを知っててどうして見逃した？　あんたの能力なら、あの男を止められたはずだぞ！」

「その必要がなかったからです」

〝静寂破り（ベーバーノイズ）〟と呼ばれた少女が、突き放すような口調で宣告する。

「獅子王機関の役割は、大規模な魔導災害や魔導テロから日本という国家を護ること――紘神冥鴛の行動は、わたくしたちの目的を妨げないと判断しました」

「先輩、あんたは――」

無感情に見える古詠の瞳が、かすかに潤んで揺れていた。彼女は理解しているのだ。自分の判断が、この先どれだけの不幸と悲劇を招くのかを。

それでも彼女は紘神冥鴛を止められなかった。

獅子王機関三聖の筆頭である彼女には――

「教えてくれ、先輩。紘神冥鴛は、この島を利用してなにをしようとしている？」

正面から古詠を見据えて、矢瀬が訊く。

紘神冥鴛――人工島・紘神市の設計者、紘神千羅と同じ苗字を持つ男。彼が魔導犯罪者として監獄結界に囚われていたのは、単なる偶然ではないだろう。

冥鴛が犯した犯罪は、この紘神島に隠された重要な秘密と深く関係しているはずだ。そして彼が浅葱に興味を持つ理由――

「あなたはもう気づいているのでありませんか、基樹」

「……呼び戻すつもりなのか、奴を！」

矢瀬がざらつく声で呟いた。

文明と争いの象徴。金属と魔術によって生み出された人工島。〝魔族特区〟紘神市。

彼の者を喚び出す祭壇として、これほどまでに相応しい舞台もないだろう。生命あふれる大地に呪われし者。原初の罪人。魔族の祖。そしてすべての人間と魔族の天敵。

かつて〝聖殲〟で地上を幾度も滅ぼした者――

矢瀬が絶望に囚われかけたとき、ふと古詠が静かに囁いた。

「大丈夫――勝ちますよ。この〝聖殲〟は、第四真祖だけの戦争ではありませんから」

まるで託宣のような彼女の囁きに、ふ、と矢瀬は苦笑して力を抜く。

一瞬、矢瀬の脳裏をよぎったのは、古城と、彼の隣に寄り添う小柄な少女の姿だった。

もちろん霊能力者ならぬ矢瀬に、霊視などできるはずもない。

だがそれでも不意に思い浮かんだそのイメージは、あいつらを心配するだけ馬鹿馬鹿しい、と矢瀬に思わせる程度の効果はあった。そう、一年前のあのときとは違うのだ。

暁古城の監視者は一人ではない――

いつの間にか古詠の姿は消えていた。

疲れたように溜息をつき、矢瀬はその場に倒れて目を閉じる。

まだもう少しだけ時間はあるはずだ。思い出に浸るくらいの時間は。

そして矢瀬は眠りに落ちる。

懐かしくも哀しい〝焔光の夜伯〟と呼ばれた少女の夢を見ながら――

あとがき

そんなわけで『ストライク・ザ・ブラッド7』をお届けしております。

シリーズ七冊目です。そしてようやく第四真祖の正体や古城の過去といった重要な情報が、この巻あたりから解禁になりました。本シリーズにここまでつきあってくださった皆様への感謝をこめて、未公開エピソードや重要機密や新キャラや小ネタを怒濤の勢いで詰めこんでおります。楽しんでいただけたら幸いです。

すでに読み終えた方はお気づきでしょうが、本巻の構成は少し変則的で（約）四年前→現在→（だいたい）一年前というふうに各章ごとに時間軸が入り乱れるようなスタイルになっています。これは回想編が「終わってしまった過去」ではなく、現在進行形で古城たちの現状に影響しているせいです。それぞれ独立したエピソードとしてとらえてもらっても大丈夫ですし、時系列順に読んでいくのもアリです。お好きなスタイルで楽しんでいただければと。

ところで仮に不老不死の吸血鬼なるモノが実在したとして、いちばん迷惑を被る職業はなにかといえば、実は歴史学者や考古学者ではないかと思います。苦労して遺跡や文献を調べて、古代文明の様子を推測しても、リアルタイムで当時の様子を見てきた吸血鬼の真祖あたりに、「それ違う」と言われてしまったら全部台無しなので。

もっとも吸血鬼サイドにしてみれば、本人も忘れていたような大昔の黒歴史や、若さゆえのあやまちの痕跡を考古学者に発見されてしまう危険もあるわけで、ある意味、彼らは天敵同士といえるのかもしれません。この巻に登場する怪しい中年のオッサンは、まあ、そんなふうにして生まれたキャラクターでした。彼と深森さんのなれそめあたりも想像するとちょっと楽しいです。ていうか犯罪にしか見えない（年齢差十歳以上だし）……。

それはさておき個人的には、今回、普段あまり表に出てこない矢瀬の裏事情や心情が描けたのが楽しかったです。中学時代の古城と矢瀬については、機会があればまたいずれきちんと書いてみたいかも。しかし出番が増えるにつれて、どんどん矢瀬が不幸になっていくように見えるのは気のせいだろうか……。ともあれ彼は、ある意味、古城以上に事件の核心に深く関わっている人物なので、今後の活躍にも期待していただければと思います。

今回もイラストのマニャ子さまには大変お世話になりました。隔月刊行だった上に新キャラ多数、おまけにレギュラーの登場人物たちもデザイン変更があったりして、ご苦労をおかけしたと思います。本当にありがとうございます！

そしてコミカライズを担当してくださっているＴＡＴＥ先生、いつもありがとうございます。原作以上に女の子たちが可愛かったり、古城がイケメンだったり、戦闘シーンが恰好よかったりで毎号楽しみにしております。これからもなにとぞよろしくです！

また担当の湯澤さんをはじめ、この本の制作・流通に関わってくださった（そしてスケジュール面で多々ご迷惑をおかけした）すべての皆様に、心からお礼を申し上げます。

もちろんこの本を読んでくださった皆様にも精一杯の感謝を。

それではどうか、また次巻でお目にかかれますように。

三雲岳斗